

---

# 孤独な魔法少女は英雄になれるか？

烏口泣鳴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

孤独な魔法少女は英雄になれるか？

### 【Nコード】

N3687X

### 【作者名】

烏口泣鳴

### 【あらすじ】

内気で臆病で引つ込み思案で後向きな少女、法子はある日落ちていた日本刀の力で魔法少女となる。喜び勇んで魔物退治へ出かける法子だが……。

少女は英雄になる事が出来るのか。

『Then Lonely Girl Dreams of Wonderful Hero!』(<http://ncode.syosetu.com/n3396z/>)はこの話の第一部を改稿した

完結物です。

完結した話を読みたい場合はあちらをどうぞ。

この小説は *arcadia* にも掲載させていただいております。

## 魔法少女は物語る

朝は魔法の時間。爽やかな鳥の声と涼やかに差しこむ朝日が心も体も綺麗にしてくれる。見るもの全てが新鮮で、聞くもの全てが心地良い。朝起きたらまずは愛しの彼にご挨拶。写真立の中に居る彼に私は微笑んで、

その隣の置時計が目に入った。

「げ」

清々しさは一瞬で消え去って、私は飛び起きて、慌てて着替え、用意もそこそこに部屋を飛び出した。

「きゃー、遅刻遅刻」

リビングでは既に弟が朝食を摂っていて、駆け込んできた私を見ると呆れた様子で呟いた。

「本当に遅刻遅刻なんて言う奴初めて見た」

「うるさいなあ。て言うか、起きてたなら起こしてよ！」

弟は食パンを齧りゆっくりとした調子で口をもごもごことさせてから、ようやく口を開いた。

「だって先に行つてたと思つてたし」

「何で？」

「いや、だつてさ、朝飯食いに出て来たら姉ちゃんも母さんも父さんも誰も居ないから、先に行つたと思うじゃん」

「お父さんとお母さんも？」

その時、廊下から大きな音と共に叫び声が聞こえた。

「ああ！ もうこんな時間！ ちょっとあなた！」

叫びと共にどすんばたんという音がして、すぐに鳴りやみ、しばらくしてまた叫び。

「寝ぼけた事言つてないで早く起きて！ 遅刻するから！」

「何！ ああ、本当だ！」

そうしてどたんばたんという音が響いてくる。多分、慌てて用意

をしているのだ。先程の私と同じ様に。弟はゆっくりとココアを飲み干して言った。

「似た者同士。俺以外ずぼらすぎ」

反論したいが言い返せない。確かに余裕を持って起きたのは弟だけなのだ。

と、そこでふと気が付く。

「そういえば、在校生って今日一時間早いんじゃないかった？」

「え？ あー！」

「なんかもう時間過ぎてない？」

「やべー！」

弟が慌てて立ち上がると、鞆を拾い上げた。

「やーい、結局あんたが一番ずぼらー」

「うっせえ！ 勘違いしただけだし！」

「でも、もう遅刻だよねえ。私達はぎりぎり間に合いそうだし、遅刻するのはあんただけじゃん」

「まだ間に合う！」

そう言って、弟は飛び出していった。

「もう完全に遅刻だよー」

追い打ちを浴びせてみたが、聞こえているのかいないのか、玄関を開く猛烈な音がして、窓の外から激しい靴音が聞こえてくる。

ちよっとすつきりしたのもつかの間、こちらも時間が迫っている事に気が付いて、私も急いで準備を終えて、家を出た。学校への道をひた走る。

学校に着いて校舎に備え付けられた時計を見ると、まだ五分あった。間に合った。流石に卒業式に遅刻なんて恥ずかしすぎる。安堵した私は走るのを止めて、校舎に入り、階段を上って教室へ着いた。普段通りだ。最後の登校だっというのに何も感じない。卒業するという実感が湧かない。それを残念に思いつつ、私は教室の扉を開けた。

教室の中は卒業式だと言うのにいつもと変わらぬだらけた様子だ

った。たったそれだけ、いつも通りの光景のはずなのに、何故だろう、私の中に瞬く間に寂しい気持ち満ちた。今日で終わり。そう思うと、何だか教室に入り辛い。入り口でためらっていると、頭を叩かれた。

「おい、こんな所で立ち止まってないでさっさと入れ」

担任に促されて私は慌てて席に着く。もうクラスの皆は整然と席に坐つて、一瞬前の喧騒は消えていた。それもまた授業中に見慣れた光景で、いつもは何とも思わなかったはずなのに、再び悲しみが湧いた。

面倒臭がりだった担任らしい小ざつぱりとした最後の言葉が終わると、体育館へと移り、卒業式が行われた。卒業生、在校生、教師家族、沢山の人が居る。

私の家族の姿も見える。両親と私の目が合った。すると両親は大きく手を振つて、その行為が周囲に注目された事に気が付いて赤面し、以後は大人しくしていた。それでも時折目が合うと、恥ずかしそうに微笑み合った。弟は在校生一同が唱和する所で何だか周りから小突かれていた。多分、言葉を間違えたのだろう。別に遅刻が直接の原因ではないだろうが、私は思わずほら見た事かと呟いた。すると弟はまるでその呟きが聞こえたみたいはこちらを睨んできて、何か豪い剣幕で口をパクつかせていた。

私は始めの内こそ悲しくはあつたけれど、隣の子が泣き出した瞬間から徐々に覚めていき、終わる時にはほとんど何も感じなくなっていた。ああ、これで終わりかだと、泣いている人は偉いなあだとか、そんな淡白な思いを微かに抱いただけだった。

卒業式が終わるとそのまま解散。けれど、高校生でも大学生でも社会人でも無い、私達は校庭で最後の思い出づくりを始めた。

「へい！ 法子！」

「痛！」

お尻を叩かれた衝撃で前に飛びあがった。振り返ると親友の摩子がにやにやとした笑顔を浮かべていた。

「何すんの！」

「そんな事より良いの？」

摩子が離れた場所を指差す。

「ボタン取られちゃうかもよ？」

見れば女子の人だからが出来ていた。その光景の意味を悟った私は一瞬で寒気だって、慌てて駆けた。人だかりに手を差しこみ、

「どいて！」

無理矢理その群れを押し退けて、中心に居る男子に手を伸ばす。

「将刀君！」

私が声を掛けると、

「お、法子」

将刀君はすぐにこちらを向いてくれた。

「ボタン頂戴！」

一斉に周りの女子に睨まれた。だがそんな事に構ってはいられない。むしろだからこそボタンを貰わなくてはならない。

将刀君はブレザーを掴まんでみせて、

「良いよ。第二ボタンだっけ？」

周囲の目がきらりと光る。ブレザーには二つボタンが付いている。残りのボタンを貰う算段をしているに違いない。事実、中学校の卒業式では学生服の第二ボタン以外の全てを他の女に持って行かれた。かつての失敗を繰り返すつもりは無い。私は恥も外聞も捨てて周りに聞こえる様に大きく叫んだ。

「うっん、両方共」

驚愕と敵意と嫉妬と殺意が私に突き刺さった。そんな中で私はじつと耐えて将刀君の反応を待った。しばらくブレザーを見下ろしていた将刀君はやがてあっさりと頷いてブレザーのボタンを引きちぎった。

「良いよ、どうせもう着ないし」

あっという間に、ボタンは二つ共取れて、私の手に手渡された。

私はそれをぎゅっと握りしめる。温かかった。

「高校も終わりだな」

「そうだね。離れ離れになっちゃうね」

ちよつとしんみりとした状況だ。こちらを睨みつけてくる女子達が居なければ。

「ま、遠くに行く訳でも無いし、すぐに会えるけどな」

「浮気しちや駄目だよ？」

信頼していない訳ではないけれど、私はそう言った。

将刀君はこちらを力強く見つめて、

「安心しろよ。俺にはお前しか見えないから」

そう言つてふつと笑った。

思わずぶつ倒れそうになったのを何とかこらえた。頭の中の私の嬉しい悲鳴と周囲のけたたましい悲鳴が奇妙に共鳴する。嬉しすぎる。変な風になにやけていないかと心配になった。周りから「私もあんな事言われてみてえ」と言う声や「マジで、あの女殺す」という声が聞こえてくる。勝った。周囲の雑音全てを無視して、私は将刀君に笑いかけた。

「ありがとう。私も将刀君しか見られない」

ありつたけの思いを込めてそう言った。

すると突然将刀君が笑い出した。何か変な事でも言ったのだろうか。私としては渾身の言葉だったのに。不安が一気に広がった。私がいとつと将刀君を見つめると、すぐに笑いが止んで弁解する様な口調でもまだ言葉の端に笑いが覗いている

「悪い。ただなんか漫画みたいなやり取りだなって思ったら面白くて」

確かにそうかもしれない。けれど幾らなんでもこの状況で笑うのは失礼だ。私が目と表情で思いつきり不快を告げると、将刀君は「悪い悪い」と半笑いの表情で、まるで反省した様子も無く、その上輪の外からの

「おーい、将刀！ 写真撮ろうぜ！」

という言葉に、手を振って



「分かった、今行く！」  
と言つてのけた。

私がかますすしかめっ面を強くすると、将刀君はちょっと困った顔をしてからもう一度悪いと呟いて、それから私の耳元に口を近付けた。

「結構嬉しかった」

そう言つて、将刀君は私に手を振つて、その場を離れていった。女子の群れもそれに釣られる様に付いていく。私は一人その場に取残された。

言葉の内容には不満が残るものの、私は一瞬前のやり取りに顔を火照らせて、その場で硬直して立ち尽くした。嬉しさと恥ずかしさが緋い交ぜになって、心の中は荒れ狂っていた。

「良かったじゃん。ボタン貰えて」

背後から声を掛けられて振り返ると、摩子が笑っていた。

私はしばらくそのなじみ深い顔を見つめた後、猛る心に任せてチヨップした。

「ぐへ、何で？」

「いや、何となく。居ても立っても居られなくなって」

「相変わらず訳が分からない」

親友への攻撃で心を静めた私は気になった事を尋ねた。

「摩子ももうボタン貰ったの？」

「私はそんな風習には興味ないから」

「風習つて……でも、他の人にとられるの嫌じゃない？」

「そつちと違って、私の彼氏はそんなに人気じゃないからね」

摩子は笑つてそう言ったが、その後ろでは見知らぬ女子に話しかけられている摩子の彼氏が居る。私はそれをそつと指差した。

「良いの？」

摩子が振り返る。

次の瞬間には彼氏へ向かって駆け出して行った。

それを笑つて見送つてしていると別の友達が何人かで固まってやって

来た。それを拍子に、次第にクラスのみんなが集まって来て、摩子も戻って来て、全員が集まったところで集合写真を撮った。後は校門を出たらクラスは離れ離れになる。みんなで何か食べに行こうという提案もあったけれど、結局用事のある人が多くて立ち消えになった。私も家族と食事に行く。もしもみんなで何処かへ行くのなら優先しようと思ったけれど、立ち消えになったのならしょうがない。もう会えないというのに、こんな事で良いのだろつかという思いも心の端にはあるけれど、でもこんなものかなという思いが強かった。誰かが「うちのクラスらしいな」と言った。みんな笑って同意した。私もそうだと思った。行き先の違うクラスメイト達は校門までのとても短な最後の旅路を楽しんだ。

親友だった摩子ともお別れ。摩子は他の友達と何処かへ食べに行くらしい。私は誘われたけど辞退した。何故と言われると説明し辛けれど、強いて言うなら恥ずかしくて。校門を出たら二人の道は違う。隣に並ぶ摩子が何だか黄昏た様子で遠くを見ながらぼんやりと呟いた。

「ねえ、約束憶えてるよね？」

「勿論」

私もぼんやりとそれに応えた。何だか心がごちゃごちゃとしていて、しっかりと思いを抱けない。

「一緒にAランクに合格だからね」

「分かっているって」

「修行さぼっちゃ駄目だよ」

「そっちこそ」

摩子が急に笑って拳を突き出してきた。

私はその拳に自分の拳をかち合わせた。二人だけの合図。

校門を抜けた。

「じゃあね、法子」

「うん。じゃあね、摩子」

私達は分かれる。約束だけを結び付けて。いずれ約束の糸を辿っ

て出会うのだろう。細い糸に引き合わされた未来の自分と親友を思い描きながら、私はそんな事を思って、校門の外で待っていた家族と合流した。

卒業祝いの食事も終えて、高校生でなくなった私は、布団に転がりながら明日からの日々思い悩んだ。

携帯を無為にいじりながらしばらく考えて、ようやく私は決心する。

明日は摩子達と大学に着て行く為の服を買いに行こう。将刀君と遊びに行くのは明後日だ。

大学というのは不思議な所で、種々雑多な人々が過去と現在と未来を交差させて、驚く程多様な物語を織り成している。それらの物語は余りにもあっさり余りにも無造作に、そこら中で語られ消えていく。

授業の無い教室でまた一つの物語が語り終えられた。

それに対して聞き手はその余りにも重い内容にどう答えて良い物かと迷って、

「大変だったんだね」

それだけ言った。

語り手は笑う。

「そんな大した事じゃないさ。これ位の経験、誰だっけしているだろう?」

そんな訳が無い。家族を突然失うなんて、そんな事。そう聞き手は思うのだが、語り手が笑顔を浮かべているので、率直な意見は言い辛かった。

「まあ、私の話はもう良いだろう。それじゃあ、次は法子君、君の番」

話辛かった。今の話に比べたら自分の過去など無いに等しい。聞き手は躊躇するが、語り手はそれを許さない。

「君が話してくれないと不公平だろ。さあ、聞かせておくれよ」

「うーん、アイナさんの過去に比べたら、ホントに下らない話なんだけど」

「そんな事無いさ。さあ、お願いするよ」

「うん。じゃあ、私が魔法少女になった話なんだけど」

聞き手になった元語り手が手を叩く。語り手になった元聞き手は恥ずかしそうに俯いてから、空き教室に集まった出会ったばかりの知り合い達に向けて訥々と語り始めた。

## ヒーロー参上

変身願望は誰もが持っているありきたりな願いの一つだ。誰かになりたい。何かになりたい。何かをしたい。何かを変えたい。現実への不満は多少なりとも変身に繋がる。

変えたい。変わりたい。努力の伴わぬそれらの願いは時に現実逃避と蔑まれるが、その愚かさが時に世界を変える。断じて言おう。何かに変わりたいと願うあなたの変身願望は崇高な物である。

「私が魔法少女に？」

「そうよ。今大人気の魔法少女。でも、言われているほど華やかじゃない。泥水に塗れて常に死と隣り合わせ。それでもあなたは魔法少女になりたいの？」

「私は」

ここにもそんな変身願望を持つに至った者が居る。名を五月女摩子という。何処にでも居る中学生である。日常に不満は持っていない。ごくありきたりの世界に囲まれてごくありきたりの生活を送っている。名前が些か特殊だが、本人は余り気にしてない。名前によるいじめも無く、生活は順風満帆と言って良い。

現実への不満をそれほど持っていないのに、何故変身願望を持つに至ったか。勿論事前に述べた通り、変身願望なぞ誰でも持っている。だが彼女は実際に変身する。そこに違いがある。では何故彼女は変身出来たのか。一体どんな願いを持っていたのか。

と、酷く仰々しい書き方をさせていただいた。ところがほとんどは外連味である。彼女が願望を持つに至った経緯に何か凄い期待をした方も居るかも知れない。だが繰り返しになるが、彼女は至って普通の中学生である。がっかりさせない様にあらかじめ言っておくが、彼女の変身動機は良くある心の動きである。魔法少女を含む変

身ヒーローの中にもこの動機で変身した者は少なくない。特殊な境遇も、特別な才能も要らない。ただ目の前を見るだけで良い。

願望の動機はとても単純でそして少し不純だ。

町に魔物が出現した。そうニュースで報じていた。魔物は魔女っ娘を名乗る変身ヒーローに倒されて事なきを得たという。

特に興味も無いので摩子はまるつきり別の事を考えながらご飯を口に運んでいる。

「良いなあ」

一方、姉は目を輝かせて物欲しそうな顔でテレビに釘づけられていた。

「なりたいの？」

聞くまでも無い。姉はいつも公言している。

「勿論なりたい」

「ふーん」

変身ヒーローになりたいと願う者は多い。特に小さい子供の憧れが強く、将来なりたい職業の上位に食い込んでいる。

「見てみなさい、あの楽しそうな表情」

けれど、大人が変身ヒーローになりたいと願うのは子供っぽいという風潮が何故だかある。特に高い年齢層程、変身ヒーローは馬鹿げたものであるという考えが蔓延している。

「ああ、いいなあ。なりたくないなあ」

確かに姉はどことなく幼い。中学生の摩子から見ても、大学生の姉は少し子供っぽいところがある。けれど最近の若者の間では変身ヒーローを目指す事が容認され始めている。一概に子供っぽいから目指している訳ではない。

ロンドンで開かれた第十五回技術革新の諸問題における世界的枠組み会議、通称第十五回魔術会議において、魔物の討伐に関する条約が見直され、民間の魔物討伐従事者の待遇が向上し、日本においても魔物討伐の国家資格、及び民間資格の所持者に対して特に金銭

面の大幅な改善があった。

魔物討伐は儲かる。第十五回魔術会議以降急速に広まったその噂  
金銭だけで計るならそれは確かに正しかった。 によって、魔  
物討伐専門職の一つである変身ヒーローを目指そうとする者が増え  
た。

今迄人々は変身ヒーローなどテレビの向こうで活躍している有名  
人位に思っていた。そこに舞い込んだ儲かるという実益は凄まじい  
衝撃を持って世間に浸透し、儲かるという話から尾ひれがついて、  
曰く楽そう、曰く楽しそう、曰く人気者になれる、曰く一生安泰、  
曰く自慢出来る、曰く自由である、曰く税金がかからない、これら  
の安直で間違ったイメージが広がり過ぎた。そうして、就職を嫌悪  
する大学生や会社から逃避したい社会人がその絵に描いた餅に憧れ  
を抱く様になった。

「でもあたしには才能が無いからなあ」

そうして多くの者が挫折した。幾ら待遇が改善し多額の金銭が受  
け取れるようになったとはいえ、その為には資格を取得しなければ  
ならない。少なくとも民間資格の3級（町内の防衛相当）を持たな  
ければはした金すらもらえない。まともに生活するのであれば、民  
間資格の一級（広範囲の防衛相当）、あるいは国家資格のE+ラン  
ク（レベル2以下の作戦従事）が最低条件である。

「才能って……やってみないと分からないじゃん」

三千人しか取得していないその資格は、ペーパーテストも実技テ  
ストも存在しない。取得する為の条件は一つ、ランクに応じた魔物  
の災害を食い止める事。難易度としては甲子園に出場する位の努力  
を重ねて、ようやく取れるかどうかといったところ。

「でも今のあたしじゃあなあ」

けれど未だに希望者は後を絶たない。まだ挫折を味わっていない  
者が後から後からやってくるのもそうだし、特に変身ヒーローの場  
合、突発的な才能の開花が良く話題にがるからだ。自分も何かの偶  
然でなれるんじゃないかと期待してしまうのだ。だからこそ変身ヒ

「ローは人気がある。」

だから才能が無いと嘆いている姉もいつか何かの偶然でなれるのではないかという希望に身を焦がしている。

「ホント楽しそうだよね、魔法少女」

テレビの向こうでは丈の短いドレスの様な衣装を着た女の子が皆の喝采に頭を下げている。その楽しそうな表面だけを見て志す者は殊の外多い。

「摩子はなりたくないの？」

「私はあんまり興味ないなあ」

「楽しそうじゃん」

「楽しそうだとは思うけど」

「姉妹で魔法少女とか絶対に人気出るよ」

「アイドルじゃないんだから。それにあの衣装、お姉ちゃん着るの？」

テレビの画面には大人が着るには恥ずかしい衣装を着た少女が喝采の中去っていく姿が映っている。

姉はしばらくテレビに目をやってから摩子に笑いかけた。

「いける！」

「無理だよ」

摩子はあっさりと言い放って、しょんぼりと頂垂れた姉を余所に、またご飯に集中し始めた。

学校へ行く友達と友達が盛り上がっていた。

「どうしたの？」

鞆を置いて友達の輪に入って行くと、目を輝かせた友達が一齐に摩子へと目を向けた。

「あのね、今度の日曜日にサッカー部の試合があるんだって。それでみんなで応援に行こうかなって」

「ホントに？ 私も行きたい！」

彼女はサッカーを見たい訳じゃない。見たいのはサッカーに興



じる部員達だ。サッカー部に気になる男子が居る。だから見に行く。応援に行く。摩子もその例に漏れず、サッカー部に居る気になる男子を見に行きたかった。

「何？ 応援に来てくれるの？」

女子だけの輪に闖入者がやって来た。サッカー部に在籍している男子だった。

「いや、あなたの応援に行く訳じゃないから」

一人が辛辣な言葉を吐いた。それに合わせて他も同意する。

「ちよつとで良いから応援してくれよ」

その男子の目が摩子に向けた。

「摩子は応援してくれるよな！ なんとって幼馴染なんだし」

話を振られた摩子は考え込む様に指を口に当てて、

「良いよ。ついでに応援してあげる！」

「ついでかよ！」

「そりゃね」

男子が突っ込みに摩子は何を当たり前なという表情を返した。男子はぐつと言葉を詰まらせて何処かへと走り去っていった。

「応援してあげるって言ったのに」

摩子が不思議そうに首を傾げる。その様子を見て、周りの友達は気の毒そうに男子の消えた先を見送った。

「惚れた相手にああ言われたら心折れるわ」

「脈の一打ちも感じさせない切り捨て方だったね」

ひつそりと話す友達に気が付いて、摩子は口を尖らせた。

「何々？ 何で内緒話してるの？」

「何でもない」

尚も詰め寄る摩子を上手にいなしながら、話題はまた週末のサッカーの話題へ、そこから昨日のテレビへと移って、担任が来たところで中断された。

いつもの日常、いつもの友達。ともすれば飽きてしまいそうな程、満ち足りた生活こそが、摩子の日常だ。

時が過ぎるのは早く、授業は進み、お昼休みが終わりに、下校の時刻を過ぎて、摩子は帰り道の途中で友達と別れた。さて、帰ったらどうしようかな、今からでも戻って別れた友達を誘って遊びに行きたいな、などと考えながら歩いていると、道端に犬が集まって吠えていた。

「犬だ！」

その可愛らしさに駆け寄ろうとするとすぐに立ち止まる。犬の様子が荒れている事に気が付いたからだ。何やら喧嘩をしているみたいだ。見れば犬達に囲まれる形で猫の様な生き物が震えていた。

困む犬達は何だか獰猛そうで危険な様子が漂っている。助けに行きたいが、危なそうだ。摩子は一瞬躊躇したが、すぐに使命感に燃えて駆け寄った。

「駄目だよー」

摩子が我武者羅に犬の集団に突っ込むと、犬達は驚いて逃げた。一匹、頭を押さえた猫の様な生き物が残っている。

「大丈夫？」

猫の様な生き物が頭を上げて摩子を見た。その顔に摩子は戸惑った。それは猫とハムスターのあいこの様な顔をしていて、猫の様で猫ではなかった。摩子の知らない種類の生き物だ。摩子は誰かのペットなのかなと動物をまじまじと見つめた。その時、動物が口を開いて、摩子を更に驚かせた。

「ありがとう。助かったわ」

頭を撫でてみようかと伸ばしていた摩子の手が止まる。摩子はしばらくの間、口を聞けない程驚いて固まった。

「ここらは治安が悪いのね。参ったわ」

「喋った！」

摩子の大声に今度はその生き物が驚く番だ。

「いきなり大声を出さないでよ」

「また喋った！」

「当たり前じゃない……あなた、もしかして魔術で生み出された生

き物は初めて？」

「魔術の？」

そういえばと摩子は今日の授業を思い出した。社会の時間に魔法によって生物が初めて生み出されたという話をしていた気がする。

「まあいいわ。とにかくありがとう。お礼、をしたいんだけど」

「わあ、凄いなあ。本当に喋ってる」

摩子が近付いて頭を撫でようとすると、その生き物はひらりと避けた。

「ちよつと幾らなんでもいきなり撫でようとするなんて、失礼なんじゃない？」

「あ、ごめんなさい」

「まあ、今回は大目に見てあげるわ。で、お礼なんだけど」

その生き物は辺りを眺めまわして、それから耳をひくひくと震わせて、それから道の先に目をやった。

「あ、来た来た」

道の先に影が見える。影は少しずつ大きくなって、やがて黒いコートを着た男だと分かる。眼鏡を掛けた、理知的で、何だか冷たそうなその男は、摩子の前に立つといきなり頭を下げた。

「こいつを助けてくれたんだね。ありがとう」

「え、いえ。こちらこそありがとうございます」

いきなり現れた男に戸惑って、訳も分からず摩子も頭を下げた。

男は口の端を釣り上げて笑ってから、厳しい表情を作って生き物を見た。

「マチエはもつと気を付けなさい。君自身はそんなに強くないんだから」

「外に出歩くくらい良いじゃない」

「それでこんな事になったんだろう」

マチエと呼ばれた生き物はつんとそっぽを向いて、聞き流す体制に入る。男はしばらくそんなマチエを見つめてから、やがて摩子に向き直った。

「助けてくれたお礼をしたいんだが」

摩子は何だか浦島太郎みたいだなと思った。ついていったらおばあさんにされてしまうかもしれない。

「私は骨董品を扱っているんだ。もしも気に入った物があるなら一つあげよう。店に来るといい」

摩子は玉手箱を開けてよぼよぼになる自分を想像して首を振った。マチエの馬鹿にした様な声が男に浴びせられる。

「きんげんやは何にも分かってないね。女の子がそんな骨董なんて欲しがる訳ないでしょ」

「そういうものなのか？」

マチエが来馬鹿にした様に笑う。まるで人間みたいな仕種だ。

摩子の目がマチエに釘付けになった。今自分は凄い物を見ているんじゃないかと、何となく嬉しくなった。そんな摩子をちらりと見やった男はにやりと笑って、

「ああ、良い事を思いついた」  
静かに言った。

「君はさつきからマチエ君が気になっているみたいだ。良かったらマチエ君をあげよう」

「は？」

マチエが素つ頓狂な声を上げる。摩子も同じ心境だった。

「何でいきなりそんな事になる訳？」

「何を言う。マチエ君にだって悪い話じゃないだろう。見た所素養は十分だ」

マチエの目が摩子を射抜いた。何だか品定めをする様な目付きである。しばらく摩子の全身を子細に眺めてからマチエの首がゆっくりと縦に振られる。

「確かにそうみたいだけど。でも本人の意志も尊重しないと」

「なら聞いてみよう。君は魔女を、あー、今の言葉で言えば、魔法少女をどう思う？」

魔法少女？ 摩子の頭に今朝のやり取りが浮かぶ。そしてテレビ

に映っていた楽しそうな魔法少女の姿。

「楽しそう」

「なら決まりだ。お礼としてマチエ君をあげよう」

「え？ ありがとうございます？」

摩子は訳も分からずお礼を言つて、それから訳が分からずに質問した。

「あのどういふ事ですか？」

そんな摩子の質問を無視して男は背を向けた。

「それでは第二の人生を楽しみたまえ」

高笑いを上げながら何処かへと去っていく。

後に残された摩子は訳が分からずに、同じく残されたマチエを見つめた。マチエも摩子の事を見上げていた。

「あなた本当に良いの？」

「何が？ ですか？」

「別に敬語なんか使わなくていいわよ。それで、魔法少女、本当に良いの？」

「え？」

「だからあたしを受け取るって事は魔法少女になるって事だけど本当に良いの？」

「え？ えーっ！」

摩子の悲鳴が町の中に響き渡った。

彼女は驚きの声を上げたが、それもつかの間の事だ。不思議な生き物と話をし、実際に魔法少女になれると分かった時、彼女は魔法少女になつてもいいかなと思つ様になる。そして流されるままに彼女は魔法少女となる。その場の雰囲気にもまれて自身の願望を形作る。それは不純で主体性の無い意志の現れだが、人間としては当たり前でもとても単純で、そうして理由が無い分だけ壊れにくい。壊れても失うものが無い。この流されて作られる願望は復讐によって作られる願望と並んで説話、伝説に極めて多く見受けられ、悲劇につ

ながりやすい復讐とは反対にとても楽観的で民衆の支持を受けやすい。英雄は時代の望む声によって生まれる。つまり流されて大事業の願望を抱く者は英雄たりうる資質を持っている。

「ほらあそこ早速襲われている子と魔物を発見。集中して」

屋根の上に立つ摩子は肩に乗せたマチエの言葉に頷いた。遠くに魔物に追われている女の子が見える。

「さっき教えた魔術を使ってみましようか」  
「分かった」

摩子が目の前の空間に円を描き、円周に七つの点を穿つ。

遠くでは女の子が押し倒され、魔物が押し掛かり、今にも惨劇が行われようとしている。

それを見て、摩子は慌てて魔法円に飛び込んだ。その魔法円を通り抜けた瞬間、摩子は加速して音速を超え、そのままの勢いで女の子に覆いかぶさる魔物に体当たりをくらわせる。衝撃はあったが、痛みは無かった。魔物は遠くに吹き飛んだ。

颯爽と女の子を救った摩子は魔物に背を向けて女の子に手を差し伸べた。

「怪我は無い？」

そう尋ねて微笑んだ。ヒーローの誕生だった。

彼女は明るく、快活で、人好きされ、才能に溢れ、善悪を知り、勇気を湧かせ、公正であり、固い意志を、愛すべき者を持ち、時に悩み、時に苛み、時に阻まれ、時に悲しみ、時に失い、最後には必ず勝ち、信念を全うし、世界を救う。まさしく説話の中の英雄である。

だがだからこそ、この物語の主人公たりえない。この物語は卑屈で信念を信じ切れず勝つか負けるか分からない、そんな普通の人間が英雄と肩を並べようとする物語だからだ。

彼女は英雄であって主役ではない。よって彼女の話はここで途絶

する。次からが本物の主人公が現れる本当の物語の始まりとなる。

## 主人公参上

頭上には空を埋め尽くす夥しい光が輝いている。少女は人を磨滅させんとする光群を見つめ、笑う。

眼前には天を摩す様な黒い巨体が居る。その怪獣映画にでも出てきそうな暴力的な姿を見つめ、少女は笑う。

私はここで死ぬだろう。代わりに英雄となれる。

少女は刀の柄に手をかけた。今迄の人生を振り返る。そして死を思う。何の感慨も無い。けれど顔には笑みが張り付いている。

頭上から破壊の力を込めた光が降り注ぐ。

それを合図に駆け出した。

孤独な魔法少女が英雄となる為に。

変身願望は誰もが持っているありきたりな願いの一つだ。誰かになりたい。何かになりたい。何かをしたい。何かを変えたい。現実への不満は多少なりとも変身に繋がる。

変えたい。変わりたい。努力の伴わぬそれらの願いは時に現実逃避と蔑まれるが、その愚かさが時に世界を変える。断じて言おう。何かに変わりたいと願うあなたの変身願望は崇高な物である。

ここにもそんな変身願望を持った者が居る。名を十八娘法子という。何処にでも居る中学生である。ごくありきたりの世界に囲まれてごくありきたりの生活を送っている。姓が些か特殊なのがコンプレックスの一つで、周囲の注目以上の注目を感じてしまつて怯えている。いつも苗字を呼ばれる度に小さくなる。名が地味なのも気にしていてもつと良い名前にしたいと思つている。

彼女は常日頃から自分を変えたいと願つている。名前もそうであるし、性格ももっと明るくなりたいし、小学生に間違われる事の多いこの顔や体ももう少し大人びたつていいんじゃないかと思つてい



るし、もつと周囲と上手く付き合いたいと思っているし、そして何より何だか満たされない。何か変わって欲しいと願っている。珍しくもない一クラスに一人はいる内気な少女だ。

前述した変身願望をこれでもかという位に持っている。それもまた珍しい事では無い。一つだけ違うのは、その変身願望を極端な形で叶える事になる、この一点に尽きる。

そう彼女は魔法少女となる。

町に魔物が出現した。そうニュースで報じていた。魔物は魔女っ娘を名乗る変身ヒーローに倒されて事なきを得たという。

法子は朝ごはんそっちのけてそのよくあるニュースに聞き入っていた。あまりにもテレビに集中しすぎて口に運ぼうとしたごはんが箸からこぼれて茶碗の中に落ちた。

「良いなあ」

一方、弟は目を輝かせて物欲しそうな顔でテレビに釘づけられている姉を見てうんざりと溜息を吐いた。

「そんなに魔法少女になりたい訳？」

聞くまでも無い。法子は常日頃から願っている。

「勿論なりたい」

「どうでも良いけどさあ。チャンネル変えない？ 俺、野球の結果知りたいんだけど」

法子はそんな言葉を無視して画面の中で丈の短いドレスの様な衣装を着て皆の喝采に頭を下げている女の子から目を離せずにした。

「私もなりたくないなあ」

「止めてよマジで。ガキじゃないんだから」

「小学生のあんたに言われたくないんですけど」

「精神年齢の方。俺、来年から姉ちゃんと同じ中学校に行くんだからさ、変な事して俺に恥かかせないでよ」

「あんたはなりたくないの？」

「変身ヒーロー？ もう卒業したよ」

「楽しそうじゃん。姉弟で魔法少女とか絶対に人気出るよ」

「ちよつとやめるよ。何で俺が女の格好しなくちゃいけないんだよ」  
テレビの画面には男性が着るには恥ずかしい衣装を着た少女が喝采の中去っていくところ映っている。

法子はしばらくテレビと弟を交互に見てから真剣な表情でごはんを飲み込んだ。

「いける」

「絶対嫌だからな！」

憤慨する弟を余所に、法子は魔法少女を夢見たまま、学校へと向かった。

学校へ行くと、教室の一角で女子達が盛り上がっていた。

法子はその様子に一瞥をくれてから、まるで興味の無い振りをしつつ席に向かい、未練がましく耳だけは傍だたせて自分の席に坐った。昨日から読み始めた小説を開いて文字に目を滑らせながら、聞こえてくる会話に集中する。

どうやら週末にサッカー部の練習試合があるという話らしい。何だそんな事かと、法子は聞き耳を打ち切った。下らないなあと思う。もう少しましな話は出来ないのだろうかと思う。けれど少しだけ羨ましく思う。あんなに他愛の無い話で盛り上がれて良いなあと思う。小説を読み、授業が始まり、授業を受けて、休み時間になって、小説を呼んで、授業を受けて、それを繰り返して、お昼ご飯を一人で食べて、また小説と授業を繰り返して、そうして学校が終わる。部活も何も所属していないので家に帰る。下校する時はなるべく沢山の人の紛れて、一人で帰っている事に違和感を持たれない様にする。

友達が居ないので、たった一人で帰る帰り道。特にこれといった用事も無いので、毎日真っ直ぐ家に帰る。時たまそれが寂しくなる。でもすぐにこう思う。それでも私はいじめられていないと。他のクラスではいじめがあるらしい。世の中にはいじめの話で溢れている。

法子は自分が一つ間違えれば容易にいじめの対象になる事を自覚していた。それでもいじめられていない自分は、いじめられている人々に比べてまともなんだと法子はそう思う。

けれど今日は学校で読んだ小説を思い出してしまった。主人公が学校で友達と仲良くしている場面を思い出して、少し落ち込んでしまふ。小説の主人公にはあんなに沢山の友達が居るのに、私の周りに友達が居ない。毎日毎日、家で本を読んで、漫画を読んで、テレビを見て、ゲームをして、学校に行けば早く終わって欲しいと願ってじつと本を読んで授業を受けて、中学校に上がる際に何かと入り様だろうと買ってもらった携帯は全く使う機会が無くて。そんな事をつらつらと考えて、最後にやっぱり自分は駄目人間なんだと結論付けた。嫌になって思考を打ち切って、顔を上げた。

道端で犬が輪を作っていた。何だか唸り声を上げている。良い雰囲気じゃない。

犬同士の喧嘩だろうか。遠くで良く見えない。もしかしたら小さな子供が襲われているのかも。そう思うと急に寒気がした。見過ごして帰った後に実は子供が襲われていたのだと分かって、それで子供が死んだと分かったら。そんな事を考えると怖かった。

追い払わなくちゃ。そう思って止めに入ろうとするが、どの犬も凶暴そうな顔をしている事に怖気づいて、結局法子は出来るだけ離れて遠巻きにして素通りする事に決めた。ただの犬同士のけんかである事を祈りながら。

法子が目を閉じながら逃げ去ろうとしていると、犬が吠えた。法子は怯えて立ち止まる。その脇を犬達が走り去っていった。犬達の居た場所を見ると、犬達は居なくなっていた。

そこに生き物が落ちていた。犬に隠れていた所為で見えなかった生き物。きつと犬にいじめられたのだろう。蹲って震えている。

法子は一瞬戸惑った。助けてあげたかったが、幾ら小さくても野良の生き物だ。怪我でも付けられて変な病気にかかったら堪らない。やっぱりこのまま通り過ぎようかと歩き出して、しばらく歩いて、

それからやつぱり見捨てる事が出来なくて駆け戻った。

蹲る生き物の傍で屈みこんで、その体に手を伸ばす。

ぐくと地の底から響く様な低音がその生き物から発せられた。

「え？」

法子が思わず手を離すと、生き物はその小さな身を起こして法子を見上げた。

紫色の目をした犬の様な生き物。唸り声をあげ、歯を軋らせ、法子の事を睨みつけてくる。

魔物だ。

咄嗟にそう判断して、法子が慌てて立ち上がって身を引いた。魔物は人を襲う。そのほとんどは風の悪戯の様な些細な事しか出来なけれど、偶に力を持っているのもいる。それこそ人を殺してしまえる様なものも現れると聞いていた。

魔物に出会ったらどうすれば良いのか。子供達は周囲の大人達に耳にタコが出来る程聞かされている。

逃げろ。

逃げて大人の居る所へ行け。

法子は親から言われている通りに魔物から逃げる為に駆け出した。それが子供達に教えられる対処法。根本的な解決ではないけれど一定の効果を上げる教えだが、今回はまるで役に立たなかった。

魔物の足は法子よりも早く、疾風のように法子へ襲いかかり、その身を倒した。地面に倒された法子はいずれながら、後ろを振り向く。目の前にゴムの様に伸びて大きくなった口が迫っていた。

殺される。しりもちをついたまま後ずさるが、当然逃げられない。魔物はまるでいたぶる様に少しずつその口を近付けてくる。

殺される。再度そう思った時に、力が湧いた。勢いよく立ちあがって、魔物から少しでも離れる為に、駆け出そうとして　すぐさま魔物に飛び掛かれて、また倒れた。何とか逃げようとする法子の頭を魔物は足で押さえつけて、今度こそ牙を法子へと突き立てようとした。

法子は背面に違和感が走ったのを感じて死を覚悟した。更に背中に熱が行き渡る。噛まれたのだと思つて、思わず振り返つた。

魔物が居なくなつていた。辺りを見回すと、離れた場所で魔物が横たわつていた。

法子は訳が分からずに呆然としてしていると、何者かが目の前にふわりと軽やかに着地した。丈の短いドレスの様な真白い衣装を着て、頭に奇妙な髪飾りを付け、肩に見た事も無い生き物を乗せた女の子が法子に向かつて手を差し伸べて笑いかけてきた。

「怪我はない？」

法子が呆けていると、女の子は法子の体を見回して、

「ああ、ちよつと擦りむいてるね」

そう言つて、手に持つていたステッキを振つた。たちまち法子は光に包まれて、一瞬後には傷が全て消えていた。

「これで大丈夫」

女の子は法子に背を向け、魔物を見据えて、そうして親しげに笑う。

「君も怖かつたんだよね。だからこんな事をしちゃつたんだよね」

諭す様にそう言つてステッキを構えた。

「今帰してあげるから」

ステッキが振るわれると、魔物の足元に光の円が描かれた。もう一度ステッキを振ると円の周りから光の蔭が伸びて、一瞬の内に複雑な模様を描き始め、それは中空へと伸びあがり、複雑な模様を

それは良く見れば異形の者達が行進する絵だつた。描きながら

魔物を包みあげ、再び少女がステッキをふるうと、一瞬爆発的に輝いて、光が収まつた時には魔法円も魔物も消え去つていた。

「あなたは誰？」

法子は思わずそう聞いていた。瞬く間に魔物を消し去つた少女は一体何者だろう。

「私？ 私は」

一瞬言葉が途切れ、顔を赤らめてから、

「名乗る程のものじゃございませぬ！」

大きな声でそう言い切って、少女は跳躍して民家の屋根の向こうに消えていった。

すぐに世界はしんと静まって、一瞬前の事が嘘の様に辺りは平穏な日常に戻っていた。空は暮れに向けて少しずつ熟れ始めていた。法子はしばらく少女の消えた先をぼんやりと見てから呟いた。

「魔法少女に助けられちゃった」

法子はゆっくりと立ち上がって、危なっかしい足取りですぐそばの小さな公園に向かった。そこは丁度生活圏の奥まった場所になって、人の通らない道に囲まれていて、余程何か無いと誰も来ない公園だ。ある時偶然見つけてからお気に入りの場所になっていた。

今日もまた古びたブランコに腰かけて、ノートを開いた。心の中が興奮で荒れ狂っていた。魔物に襲われ命を失いそうだった事。初めて見た変身ヒーローに助けられた事。何だかファンタジーの世界が自分の身近に迫っている気がしていた。

ノートを開いてそこに拙いイラストを書き入れる。魔法少女を見たのは一瞬の事で姿はほとんど覚えていない。だから想像で補って、先程の魔法少女を紙の上に起こしていった。

その横に思いついた設定を加えて、ほっと一心地付いた。こんなところは誰にも見せられない。ノートの中身なんてそれこそ親にも見せられない。でもこの誰も居ない世界で自分だけの世界を作るのがとても幸せだった。

頭の中に次々と妄想が湧いてくる。魔法少女。変身ヒーロー。喝采。人々の尊崇の眼差し。想像の中で法子は魔法少女になって先程の魔法少女と共に強大な敵を倒してみせた。その時、風が吹いて砂が舞った。舞った砂が目に入って、思わず目を閉じて瞬きをして、涙と共に流れ出したのを確認してから目を開くと、公園の隅の生垣の下に何かが落ちていている事に気が付いた。

刀　　の様に見えた。

でもまさかと思って、近寄ってみると、それは紛う事無き日本刀

だった。初めて見た刀は思っていたよりずっと大きかった。

何でこんな所に刀が落ちているのか。疑問よりも先に期待と好奇心が湧いて、そっと触れてみた。

金属の冷たい感触が伝わって来た。

「君が私の主か」

「ひえ」

頭の中に突然声が流れてきて、法子は思わずしりもちをついて、辺りを見回した。だが辺りには誰も居ない。普通の人であれば辺りをもっとよく探すところだが、法子は違った。今迄見てきたフィクションの知識からすぐさま声の正体は刀であると見当づけて、再び今度は勢いよく刀を掴んだ。

「どういう経緯で私を手に入れたのか知らないが、まずは自己紹介から始めよう。君は私の名を知っているかもしれないが、私は君の事をまるつきり知らないんだから」

再び頭の中に声が流れてくる。

「あなた刀なの？」

法子は試しにそう思い浮かべてみた。

「その通りだけれど、もしかして君は私の事を良く知らないのかな？」

「まるつきり」

刀が笑った。そんな印象が法子の頭の中に流れ込んで来た。

「まるつきり知らないのに、そんなに慣れた様子で私と話しているのか。時代は変わったな。魔術が開陳されたとは聞いていたが、ここまで慣れ親しんでいるとは」

「多分、私が特殊なだけ。漫画とかであなたみたいな存在には慣れているから」

「ほう。良く分からないが、君は何か特殊な役職にでもついているという事かな？」

「そういう訳じゃないんだけれど」

「そうなのか？ とにかく説明の手間が省けるのは助かる。では早

速だ。誓いを交わそう」

法子の思考よりも先へ話を持っていかうとする刀に驚いて、法子は刀を強く握り、頭の中で必死に刀を押し止めた。

「待って。私が知ってるのは、あなたみたいに無機物が頭の中に語りかけてくる可能性だけ。あなたがどんなものなのかは、さっき言った通り何にも知らないよ」

「なら説明しなくてはならない訳か？」

「うん」

「そうか。私はどうにもこの最初の邂逅が苦手なんだが」

何やら愚痴りつつ、刀は面倒そうに聞いてきた。

「何から話せばいいかな？」

そう聞かれて、法子は考える。こういう時漫画とかだと過去の話が入ったりする。あるいは突然魔物に襲われて分からないまま闘ったりもする。

とりあえず辺りを見回してみても、不穏な気配も人の姿も見えない事を確認してから、法子は頭の中で言った。

「それじゃあ、あなたの目的とあなたが私に何を求めているのかとそれに対して私が何をすればいいのかを教えてください」

一体どんな事を要求してくるんだろう。何か無茶な事を言われるかもしれない。魂を差し出せと言われたらどうだろう。でも今の底なし沼にゆっくりと沈んでいく様な生活よりも刀の無茶な要求に身を破滅させた方が幸せかもしれない。不安半分、期待半分、でもどちらにせよ絶望的な想像を抱きながら刀の返答を待つが中々返ってこない。どうしたのだろうと訝しんでいると、刀が驚いた様子で賞賛をあげた。

「素晴らしいな。こういう時、大抵の人間は混乱して面倒な事になるんだが、君はとても冷静に事態を把握しようとしている」

素直な賞賛に法子は何だか恥ずかしくなった。考えてみれば褒められたのは久しぶりだ。歯がゆかった。照れ隠しにぶっきらぼうな口調になる。



「そんな事より、私の質問に答えてよ」

「ああ、そうだったな」

刀の言葉が頭に流れてくる。

「目的は、何となくだな。君に求めているのは魔女になって貰う事だ。君は魔女になってくれればいい」

「魔女？」

「魔女だ。抵抗があるかね？ まあ、そうだろう。迫害される身だ。だが本来魔女というのは人を救う身であるという事だけは知ってほしい」

刀の言葉は法子の頭の中を素通りしていった。法子はまさかという期待で一杯になっていた。まさか。まさか。だが早とちりはいけない。そう、まだ分からない。まだ魔法少女になれるとは限らない。ちなみに魔女という言葉には、現在三つの意味がある。一つが人を誑かし、陥れる悪役としての魔女、そこから派生して不気味さや妖艶さや超越性を持った女性。もう一つが近世魔術の実践者として自ら名乗る魔女。だが、この二つの意味は実際に魔法が存在する様になった現在では急速に衰退している。現在最も使われているのは三つ目の意味、魔術に依って世界に多大な影響を与えた者に与えられる称号として魔女。未だ七名にしか授けられた事の無いその称号は、急速に発展を遂げる魔術界での一種のシンボルとなって燦々と輝いている。

閑話休題。

「魔女って言うのは、魔女？」

「何を良いたのか分からないが、強大な魔力を持つ女性くらいのイメージで良い」

「魔女になるって言うのは、もしかして悪魔と……そのエッチするの？」

「いや、そんな事はしない。どうも魔女はあの暗黒時代に作られたイメージが強くていけないな。魔女になるのはとても簡単さ。私を携えて、魔女になると願えばそれだけでなれる」

法子の心臓がはねた。これは。

「魔女になって何をさせたいの？」

「それは君の勝手だけれど、そうだな、人助けでもしてくれれば言う事は無い」

まさか。

「魔女つて黒いローブを着た？」

「それは君のイメージに因る。もっと言えば、私の来歴と君の魔女に対する想像が混ざり合った形になる」

「変身するって言う事？」

「まあ、そうだね。そんな劇的な変化はしないけど。精々髪型や服装が変わる位だな。絶世の美女にはなれないから期待はし過ぎないでくれ」

何となく失礼な事を言われた気もするけれど、法子にとってはそんな事もうどうでも良かった。

「やっぱりだ！ やっぱり変身ヒーロー、魔女っ娘、魔法少女になれるんだ！」

「変身ヒーローか言い得て妙だな」

法子の思考を読み取って刀が答えた。確定だ。魔法少女になれる。「その魔法少女というのは良く分からないな。今の時代は皆魔法が使えると聞いていたが」

「そういうんじゃないの。魔法少女は魔法少女なの。変身して人を助ける正義の味方なの！」

法子の興奮した思念に刀は当てられた様だった。しばらく黙り込んでから、ようやくと喋る声音は弱々しく辟易していた。

「まあ、良い。喜んでくれたのならね。どうだい？ その魔法少女とやらになる為にも、私と誓いを交わさないか？」

「交わす交わす！」

法子が大きく首を振ると、刀から笑う様な気配が伝わって来た。

「では誓ってもらおう」

「誓います！」

「早いよ。良いかい？ 魔女とは迫害される存在だ。それでも君は魔女となり魔女として生きる事を誓えるかい？」

何だそんな事か。刀は今の世の中をあまり知らない様なので勘違いしている。そう今の魔女は、魔法少女は皆から好かれ愛され望まれる人気者なのだ。全くもって迷う必要が無い。

法子はそう考えてにんまりとして答えた。

「勿論誓います」

「そうか」

刀がぽんという炭酸を抜いた様な音を立てて法子の指先に乗る位に小さくなった。

「私が大きいままだと何かと不便だろう。小さくなったから常に肌身離さず持つて置く様に」

法子は刀を握りしめて口を尖らせる。

「それより、どうしたら変身できるの？ 早く変身したい」

そう思念を伝えた時、

「なあ、そこで座り込んでる奴」

背後から声が掛かった。

慌てて振り向くと、そこに背の高い男子が居た。法子の見たところ、年頃は法子より少し上。整った顔立ちで、少し冷笑的な表情を浮かべている。

刀が何か言っているみたいだが法子には聞こえない。

法子は絶望的な表情を浮かべてじつと男子が手に持つノートに視線を注ぐ。

「これ、あなたの？」

男子から差し出された鞆とノートを受け取って、自分の体中から冷や汗が噴き出ているのを法子は感じた。

「もしかして中を見た？」

このノートの中には恥ずかしい設定やキャラや物語や絵や台詞や技名が詰めに詰め込まれている。

まさか見ていないだろう。そうだ。きつと見つけてすぐに、近く

に居た私へ渡しに来てくれたに違いない。だから中身は見えていない。そう願って願って願いつけた。

男子は問いには答えずに背を向けて公園の出口へと向かって言った。

法子は安堵する。ああ、やっぱり見ていなかったのだろうか。

それは次の瞬間に打ち砕かれた。

「ああ、一つ良いか？」

男子が振り返った。

「技の名前とかキャラの名前とか国の名前とか、それから説明とかとにかく全体的に長いし、意味もちぐはぐなのが多いから、短く簡潔にした方が良いと思うぞ」

そう言って笑った。

法子は何も言えずに硬直して、再び男子が背を向けて公園の外へと出て行く様子を見送った。男子が消えて、その足音も聞こえなくなつてから、しばらくして法子はいそいそとノートを鞆に入れると、「にぎやあー！」

夕闇の中に悲鳴を木霊させながら家へと猛ダッシュした。

## 魔法少女の相棒は苦勞する

「さつきから何を転がっているんだ？」

「ノート見られたからに決まってるでしょ！」

心の中で怒鳴りながら法子はベッドの上を転がり続けた。その手には小さくなった刀が握られている。

「にぎやあ、ちくしょー」

「たかがノートを見られたくらいで、そんな車に轢かれたヒキガエルみたいな声を出さないでも」

「猫の方が良い！ ヒキガエルは嫌！」

「まあ、猫でもヒキガエルでもどっちでも良いが。そんな事より君には多大な力が与えられたのだよ？ 君の言でいくと、魔法少女だったか？ それに対する喜びや慄きはないのかな？ ほら、変身できるぞ」

「今は、魔法少女なんかよりもあのノート」

ノートを指差してから、また法子は転がり始めた。転がる事によって思考は途絶し空白化し、まるで物事を忘れた様な気になってくる。疲れてくると止まる。止まると途端に思考が回復して、また忘れたい記憶がよみがえってくる。だからまた回る。それを繰り返している。

「なあ、一つ良いかな。そこまで恥ずかしがっているのを見ると、とてもノートの中が気になるんだが、どうだろう。私にも中を見せてくれないかな」

「嫌に決まってるでしょ！ 大体目も無いのにどうやって見るつもり？」

「目も鼻も口も耳も皮膚も無いが、ちゃんと知覚は備わっている。恥ずかしいなら、君が私に触れながら、見せても良い部分だけを君が見てくれ。私が君の知覚を借り受けながら読んでいくから。上手く隠しながら読み進めば君が見られたくない箇所を見てしまう事も

無い」

「絶対嫌！ 一字一句どれもこれも見られたら嫌！」

「それならどうしようも無いだろう」

「だから嫌だつて言ってるでしょ！」

法子はごろごろし始めて、刀がまたこれが続くのかとうんざりしている。突然法子の動きが止まった。ぴたりと止まって、呼吸も止まる。刀は動かなくなった法子を感じて、まさか恥ずかしさの所為か、あるいは転がり過ぎた所為で死んでしまったのではないかと心配になった。

「どうした？」

「今、知覚を借り受けるとか言っていたよね？」

生きていた事に刀は安堵する。いきなり主に死んでしまわれてはかなわない。

「ああ、言ったな。君が触れている間はほとんど一心同体みたいなものだ」

「じゃあ、さつき私がトイレに入った時も？」

「ああ、君の知覚は全て受け取っていた」

「にぎやあ！」

刀は投げ飛ばされて天井に当たり跳ね返って床に着地した。フロアリングにぶつかって硬質な音が響いた。それを追って法子はベッドから跳ね起きて、床に落ちた刀を拾い上げる。

「あ、あんた」

「何をするんだ一体。痛くはないが、良い気はしない」

「このエッチ！ 変態！ 馬鹿！ 死ね！」

矢継ぎ早に浴びせられた罵詈に刀は訳が分からずに混乱した。

「いきなり何を？ 酷く悪い意味に聞こえるが、もしかして最近はその謝罪の言葉になったのか？」

「うるさい！ 馬鹿！ あんた、ホントに最低」

法子の怒りは収まらない。だが刀にはその怒りが何に端を発したものか分からない。

「ちょっと待ってくれ。どうしたんだ急に」

「トイレ、覗いたでしょ？」

「は？」

「だからトイレ、私の体に移り移って覗いたでしょ！」

刀はまずまず意味が分からずに混乱した。

「待ってくれ。私は体に移り移るのではない。知覚が流れこんでくるといった表現に近い。恐らく君は自分の体が私に乗っ取られてしまうのではないかと危惧したのだろうか？ なら大丈夫だ。主は君。従が私だ。だから」

そこで刀の言葉が途切れた。正確には尚も思念を伝えようとしたのだが、投げ飛ばされて体を離れた事で法子へと思念が伝わらなくなった。床に落ちた刀を再び法子は拾い上げて問い質した。

「あんだ、女？ 男？」

「え？ いや、私は刀だし、子を為す必要も無いし、性別は無いが」  
「それでも精神的な性別があるでしょ？ どっち？」

目が据わっている。口調も出会った当初と比べれば酷く乱雑になっている。これは心して答えないと押し折られるなど覚悟して、刀は慎重に言葉を選びながら答えた。

「私はさつきも言った通り、性別は無いが」

ここで刀を持つ法子の指にくつと力が込められた。

「と、とにかく私は精神的な性別という概念が分からない。それは生物、いや人間の考えた概念であろう。だから、男か女かは君が決められ」

「私が？」

「そうだ。私には男と女を判断する基準が分からない。君は人間だから知っているのだろうか？ だから君が決めてくれ」

沈黙が下りた。沈黙と言っても、外から見る限りさつきから二人は一言も発していないが、つまり思念のやり取りが一時的に途絶えた訳である。

その時ドアの向こうから声が入って来た。

「なあ、姉ちゃん、さつきからどすんどすん死ぬほどうるさいんだけど」

「ああ、ごめん」

「どうせまた何か落ち込んだんだろ？　いつも言ってるけど気にしすぎだつて」

「うるさい。あっち行つてて」

法子がドアに向かって冷やかな声を浴びせると、ドアの向こうの気配は何処かへと立ち去っていった。続いて隣の部屋のドアが音を立てた。

「で？」

弟が自室に戻った事を確認してから、法子は刀に聞いた。

「で、とは？」

「だからあなたの性別に関する事を聞かせてもらわないと判断できないでしょ？」

思念は少し柔らかくなっている。弟の横やりで一呼吸入った事で幾分怒りが収まったらしい。だが目は据わったままだ、

「そうは言っても、先程も言った様に、私に性別の事は分からない。性別に関する事と言ったって何を話せばいいのか」

法子はしばらく考えてから言った。

「じゃあ、あなたはどうかやって生まれたの？」

「おお、私の素性が」

それはこんな事にならなければ、刀が話したい事であった。ひいては何故法子が魔法少女となったのかにも繋がっている。

「では話させていただけこう。だがそれにはまず私を作った魔女の話から始めなければならぬ」

そうして刀は流れる様な思念を送り込んできた。

ある所に魔女が居た。場所をあまり詳しく言ってもしょうがないのである所と言っておく。知りたい？　そうは言っても君はその地名を知らないだろう。国だけでも？　分かった。グレートブリテン



に魔女が居た。グレートブリテンが分からない？ ちょっと世界地図持ってきて。日本は分かる？ よし、そこからずっと左に行って、そこ、そこで上へ。そこだ。そこがグレートブリテン。違う。イギリスではなく、グレートブリテンだ。私もかつて魔女に向かってグレートブリテンとはエグレスの事ですかと質問したが、近くの柳に向かつて思いつきり投げられた。

でだ、魔女は別に他者からそう呼ばれていた訳ではなく、自分でそう名乗っていた。魔女狩りが衰微していた時ではあったが、まだ魔女への弾圧は根強かった。それを承知の上で名乗っていたのだ。何らかの信念を持った名乗りであったのだろうが、残念ながら私に教えてくれる事は無かった。

魔女は人助けを生きがいとしていた。例えば日本に滞在中、畑仕事を手伝う際に人助けの為ならえんやこらと歌っていた事からもそれは十二分に推し量れる。他にも例えば魔女は良く「私は本当に人助けが好きなのです」と言っていた。この事からも 何を言う。本人がそう言ったのだからそうに決まっているだろう。

まあ、とにかくだ。かつて魔女は人助けをせんと日々グレートブリテンのとあるど田舎で一所懸命に尽くしていた訳だが、ある時近隣集落の態度が一変する。人々は魔女を白い目で見える様になった。教会が主導していた魔女狩りとは違うが、似た様な事があって魔女に批判が集まった。お前が魔物を呼び寄せているんだらうとね。確かに魔物は魔力が多ければ多い程生み出されやすくなる。だが今迄尽くして来たのに、さっさと出て行けではあんまりだ。魔女は意地になって挺子でも動かないと宣言した。

それが悲劇を生んだ。増大する魔物、それに抗して闘うも日々衰退していく集落。魔女がそろそろ出て行った方が良いかしらと思いはじめた時には何もかも手遅れになっていた。魔王が現れた。

魔王は分かるか？ 一応説明しておく、魔物が生まれる事で場が汚染されていき、魔導師が生まれる。魔導師が生まれる事で場が聖別されていき、魔王が顕現する。魔導師は魔物よりも強力で、魔

王は魔導師よりも強力。魔王ともなれば弱くとも、片手間の一つの城砦を滅ぼせた。まあ、現代程魔術の発達していない時代の事だが、それでも強力な事は分かるだろう。

魔王に敵う等、ましてそれが田舎の村人達ともなれば敵としてすら認識されなかつただろう。辺りは壊滅した。魔女はその時夢まどろんで、集落の者から浴びていた過日の喝采を心地よく受けていた。つまりは眠っていて気付かなかつた訳だ。だから目を覚まして外に出て驚いた。夢から覚めたら喝采どころか、集落の者まできれいさっぱり無くなっていたのだ。遠くで巨大な魔物達が辺りを踏み締めていたのですぐに何が起こつたのか分かつた。

だが罪悪感に悲しむ暇も無い。魔王を倒さんと教会から派遣された戦士達が既にやって来ていた。勿論魔女などと公言している身だ。出来れば教会の連中には見つかりたくない。なので魔女はこっそりと抜け出して、国すらも抜け出して世界を巡る旅に出た。

目的はただ一つ。人々を助ける事。選んだ手段は変身。誰かが困っている人を救うんじゃない、困っている人が自分を救える世界が魔女の目標だ。

知っているとは思うが、変身というのは酷く難しい。存在の変質だからな。魔力を帯びていない無生物を変身させる事も難しいのに、魔力を帯びて抵抗力のある生き物を変質させるなんてとても繊細で強力な魔術が必要だ。常人にはまず出来ない。

誰もが変身ヒーローになれる世界を作る為にはその強力な魔術を誰もが使えない様にする必要がある。どうすれば良いか？

その強力な魔術をもっと簡便にして世界中の全ての人に広めるといふのは、理論上は可能だろうが実際は出来る訳が無い。社会が混乱する事は必至だし、何より魔術は個人の資質に多大な影響を受けるので、万人が使える魔術を作り出すという事が難しい。

その為に魔女は外部装置を造る事にした。それさえ持てば誰でも変身できる様な、魔力の供給と魔術の実践を行う外部装置を造ろうとした。

後は話さなくても分かるだろう。試行錯誤の中で生み出された外部装置の一つが私だ。どうだ分かってくれたかな？

「え？ えっと、あ、うん。良く分からな、あ、いや、ちょっとは分かったかな？」

法子が呼んでいた漫画を閉じて慌てて答えた。

「っていうか、話が長いよ。もしも漫画だったら、今の回想まるまる流し読みだよ？」

「ぐ、聞いておいて、何を無礼な。そもそも漫画というのは何だ。前にもそんな事を言っていた気がするが」

「あなたっていつの時代の人？ いつまでの知識なら持ってるの？」

「生まれは寛政だな。知識は今の知識もいくらがあるが、はっきりした知識は太平洋戦争の途中までだ」

「思ったよりも最近だね。じゃあ、漫画って言葉知ってるんじゃないの？」

「知らん」

「何で？ まあ、いいや。漫画ってというのは、これ」

そう言って、読んでいた漫画を開いて見せた。

「絵と文章で作られた物語」

「ああ、それが存在は知ってるよ。……ちょっと待て。じゃあ、さっきの私の話を聞いている間中これを見ていたのは、私の話を聞き流していたという事か？」

「あ、うん」

「おい！」

「だって、長いし難しいんだもん」

刀が怒りの念を伝えてくるので、法子は矢継ぎ早に弁解した。

「それにさっきの話は魔女さんの話で、あなたの話じゃないでしょ？ 私は刀の話が聞きたかったのに」

一応、最後まで聞いていたらしい。

「成程な。一理ある。では、続いて私の話を」

「手短にね」

「幾らなんでも失礼だろ！」

みしりと刀から軋む音が鳴った。法子が持つ指に力を加えた為だ。「覗いた事、まだ怒ってるんだけど」

「ぐう。わ、分かった。手短に話すから」

法子の手が緩む。

「今までの持ち主はみんな大事にしてくれたのに」

一つ落ち込んでから、刀は気を取り直して朗々と過去を語り始めた。

魔女は日本に来て、剣士からこんな話を聞いた。

刀には魂が宿る。刀に己を乗り移らせて初めて剣を扱う事が出来る。

それを聞いて魔女は外部装置に刀を使う事を思いついた。魔女は幾多の試作の中、外部装置に人格を宿らせる事で魔術を行わせる方法が最も簡単で強力だと実感していた。

そうして私が作られた。魔女は製鉄から研磨まで全てを自分の手で行って、私を作って下さった。その為、言つては何だが不恰好だ。だがそのお蔭で魔術的な素地は他の刀剣とは比べ物にならないと自負している。

さて魔女は私を作り、貴重な意見をくれた剣士に渡そうとした。

だが剣士が理由あつて断つた為に、たまたま差し入れを持ってきた村の子供に渡される事になった。

清次郎と言つてな。それは美しい少年であつた。

「あ、そこから先は良いです」

「な！」

「よし！ 決めた！」

法子が勢いよくベッドを転がって、そのままベッドの外へと跳ね出て立ち上がった。

「何をだい？」

「タマちゃんは女！」

「誰？」

「なに言ってるの。あなたの事だよ、タマちゃん！」

「いや、は？　もしかして私の名前とか抜かす気じゃないだろうか？」

「あなたの名前だよ、タマちゃん！」

「やめろ、連呼するな」

「だって忘れそうで。タマちゃん」

「私は今迄無銘で通して来たんだ。名前だつて要らん！」

「駄目！　呼びにくいし、タマちゃんて決定」

刀は一步も引く気が無い法子に愕然として、しばらく黙り込んだ。そうして考えに考えあぐねた末、とりあえずこれから関係を築いていく相手なのだから多少の譲歩は必要だろうと一步位は譲ってやる事にした。

「分かった。良いだろう。受けて入れてやる。だが何でタマちゃんなんだ？」

「可愛いでしょ？　魔女さんが製鉄から作つたつて言うから、玉鋼のタマ」

「訳が分からない。嫌な予感がするんだが、ちゃんはまさか敬称のちゃんだとのたまう気じゃないだろうか？」

「その通りですよ？」

「嫌だ！」

「何で可愛いのに」

「嫌だ、嫌だ。私はこれでも」

ぐつと法子の指に力が入り、再び刀、改めタマはみしりと鳴った。

「はい、すみません。タマちゃんて結構です」

「そうこなくっちゃ」

法子が笑顔を浮かべた。タマはかつての持ち主たちの顔を思い出しながら、その幸せだった日々を思いを馳せて現実逃避し始めた。

「おーい、聞いてる？ ねえねえ」

「すまない。少し呆けていた」

「だから、これで問題も解決したし、変身させてよ」

問題？ とタマは今迄の経緯に思いを巡らせた。そもそも何でこんな話になったんだっただか。しばらく考えて思い出す。

「ああ、私の性別がどうかという話か」

「そうそう。それも女だったし」

「そうなのか？ 何を基準にそう判断した？」

「うん、考えてみたらね、私覗かれた訳だし、それが男だったら嫌でしょ？ 女でもやけど。でもマシだから、タマちゃんは女」

呆れすぎたタマの思考に霞がかかった。人間であれば脱力のしすぎで崩れ落ちていただろう。そんな理由なら、最初から昔話などする必要が無かった。何もかも無駄だったという事だ。聞いてくれなかつたし。

「ねえねえ、早く変身させてよ」

甘える様な法子の思念にタマは苛々としながら答えた。

「駄目だ。私の魔術は君の生命エネルギーを使うんだ。使いすぎれば寿命が縮む。無駄な時には使わない様にしなければならい」

「えー」

法子が不満げに呻いた。

「君は魔女になる事の意義が分かっているのか？」

「全く。そもそもさっきの話だと変身は魔女に限らないみたいだったけど、魔女に変身するの？ その魔女さんになるの？」

「違う。それは、まあ、私の願望だな。私を作ってくれた魔女の様に人々を救う存在であってほしいという願望だ」

「成程ね。大丈夫！ 私、悪用なんてしないから。明日から魔物をバンバン倒して人助けをするよ！」

タマは大げさな溜息を法子へ伝える。この少女は分かっている。敵を打ち倒す事と人助けの違いすらも分かっている。だがそういうものかも知れない。初代である清次郎も最初は敵を倒す事に執心

していた。子供というのはそういうものなのかもしれない。ならばそれを良い方向へ進めるのが私の役目だ。そう自分を納得させて、とりあえず甘い考えを矯正してやる事にした。

「君は分かっている。人々を救う為には強くなければならない。体も心もだ。それなのに、君の先程の醜態は何だ。たかだかノート位で喚き散らして」

「ぎにゃああ！」

法子がタマを頬り投げて、耳を塞いで唸りながら、またベッドの上を転がり始めた。隣からドアの開く音が聞こえて、法子の部屋にノックの音が響き、その向こうから

「ちよつと姉ちゃん、何時だと思ってるんだよ。好い加減にしろよ」  
弟の怒りを含んだ声が聞こえてくる。

「うるさい！」

法子はそれに一喝してまた耳を塞いで唸りながらベッドの上を転がる。ドアの向こうで弟がうるさいのはそっちだと言い返して隣の部屋へと戻っていった。

唸り声だけが聞こえる部屋で、ごろごろとベッドの上を転がる法子。それを見て、今更ながらようやくタマは気が付いた。

今回の主はかなり厄介だ。

## ご主人様は一人ぼっち

魔法少女はその正体を隠す。魔術は隠秘を旨とするから　といふ訳ではなく、多くは恥ずかしいからだとか、生活に支障をきたすからだとかの理由でその正体は隠されている。中には公言して憚らない者も居るが、その数は少ない。変身ヒーローのほとんどは正体不明である。

魔法少女は系譜を魔女に辿る為か、使い魔、あるいはそれに類するお供を連れている事が少なくない。魔術が広まり一般人が使い魔を連れる事が技術上可能になったとはいえ、一般人で連れている者はほとんど居ない。未だに使い魔というのは、魔女の、あるいは魔法少女の連れるものだというイメージが強い。当然普段から使い魔を引き連れていれば正体はばれる。使い魔が常人に見えなければ良いが、そうでないのも多い。その為、使い魔が居る事を隠す為に、ある者は使い魔を家に留め、ある者は使い魔をアクセサリーに変じさせ、ある者は使い魔の人形の様な外観を活かして人形として押し通す。

使い魔は魔法少女に出会うまで長年封じられていた者も少なくない。その為、会話に飢えている者が多く、お喋りな事が多々ある。その為、魔法少女が使い魔を大衆の居る場所へ連れて行く時には、喋ってはならないと厳命する事が多々ある。その約束が破られ一騒動起こる事もある。

とかく魔法少女という者は自己の正体を秘密にする為に細心の注意を払う事が多い。

「分かった？」

「ああ、分かったよ。学校では」

「うん、私に喋りかけてきてね」

紐を通され簡易なブレスレットになったタマは、法子の髪を梳かす手の動きに合わせて揺れながら、疑惑の念を送っている。



「でもどうしてだい？ 普通正体を知られない為にも人前でのやり取りは禁じるものだろう？」

「だってタマちゃんと話すのに声に出したりしないでしょ？ ばれる訳無いもん」

「まあ、そうだが、何があるか分からないだろう？ 学校と言えば四六時中人と関わる場所だ。うっかりという事もある」

「大丈夫だから安心して」

妙に断定的な法子の言葉をタマはどうしても信じられなかったが、それでも、今迄会話に飢えていたので、話をして良いというのは嬉しかった。

法子が黒い髪を二つ縛りにする手の動きに合わせて、タマは揺れ動く。法子の目を通してセーラー服を眺めながら、先代の通っていた学校を思い出して、タマは何だかわくわくとした。

「無い！ 絶対に無い」

「ちょっと生々しいですね」

「えーそんな事無いって。やっぱり古来から伝わる伝統的な」

「おはよー、どうしたの？」

「あ、摩子さん、おはようございます。何だか辛そうですね」

「うん、昨日ちょっとね。色々あって筋肉痛で」

「その猫みたいなのストラップと関係が？」

「んー、まあね。でも秘密」

「摩子、そんな事より聞いてよ。こいつさ、キスの事を接吻とか言うんだよ」

「だから、キスなんていう外来語を使わないで、もっと美しい日本語を」

「だから、接吻は美しくないっつってんだろ」

「じゃあ、口吸いで」

「止める」

「摩子はどう思う？」

「日本語でつて言うなら口づけかチューで良いんじゃないの?」  
「それだ!」  
「ええ! そんな単純で良いの?」  
「いやあ、でも私はキスが良いと思うよ」  
「そんな事無いよ、絶対口づけ」  
「どつちでも良いんじゃないかな? 人それぞれだと思うよ?」  
「違うんだよ、摩子。そう言う事じゃなくて、どれが一番男受けが良いかって話な訳だ。やっぱりキスが無難だと思うんだよね。チュ  
ーはどうだろう」  
「だから男は大和撫子が良いの。だから日本語で言うべき」  
「そんな訳で二人はさつきからずっと喧嘩しているのです。面倒な  
ので早く結論付けてもらいたいのですが」  
「うーん、しょうがないなあ。じゃあ ちよっと! 武ちゃん、  
武ちゃん!」  
「あ? 何だよ。武ちゃんて呼ぶな」  
「良いじゃん、幼馴染なんだし。でさ、ちょっと男子の意見を聞き  
たいんだけど」  
「何の?」  
「キスと口づけとチューと接吻、どれにときめく?」  
「ぶっ」  
「ねえ、どつち?」  
「お前、何をいきなり」  
「どつちが良い?」  
「……口づけ」  
「だってさ、みんな。あ、武ちゃん、もう行って良いよ」  
「は? 意味が」  
「報われないね。武ちゃん」  
「可哀そうだね、武ちゃん」  
「お前等は武ちゃんて言うな!」

そんな騒がしい会話の近くの席で、法子は本を読んでいる。昨日は半分まで呼んだので、今日はその続きからだ。黙々と読書をする法子にタマはおずおずと思念を掛けた。

「向こうで賑やかに話しているけど、君は会話に入らないのかい？」

「うん、だってあの友達友達じゃないし」

法子の顔はほとんど表情が抜け落ちている。昨夜タマを押し折ろうとした顔よりも余程恐ろしい。朝の喧騒に包まれた教室は温かいのに、法子の周りだけは空気が違った様に冷え切っていて、何だか寂しかった。

「そうか……なら友達の所へ行ったらどうだね？ 本なんていつでも読める。今は交友を厚くすべきだろう」

「私、友達居ないから」

「友達が居ない？ そんな事は無いだろう」

学校と言えば同年代の子供達が沢山集まる場所だ。法子位の年齢であれば、学びの場としてだけでなく、仲間を見つげる場所でもあるはず。少なくともタマが今迄見てきた学び舎は全てそうであったし、タマの主人やその周りで友達が居ないという者は居なかった。

「普通居るものだ」

言ってからタマは気付いた。あくまでそれは普通の場合で合ったらの話だ。普通でなかった場合にはその限りではない。長年魔女という概念に振られていながら何故そんな事も思いつかなかったのか。

友達が居ない。孤独である。それはとりもなおさず、法子が出生や身分等の理由で迫害を受けているという事だ。

「タマちゃん」

「な、なんだね、御主人」

タマが思わず改まった口調の思念を送ると、法子は冷徹に言った。「私とあなたは繋がってるんだからね」

「分かっているさ。安心してくれ、私は君を見捨」

「だからあなたが伝えようとしなくても、はつきりとした言葉としてじゃなくても、なんとなくあなたの考えは伝わって来るんだから

ね

「ん？ ああ、そうだよ。今更言われなくても」

「あのね、多分あなた、私がか特殊な生まれで、その所為で無視されていると思ってるでしょ？ そう同情してるでしょ？」

「う……ああ、そうだ。確かに同情されるのは心外だろうが」

「全然見当外れだから」

「何？」

「あのね、私はふつつうの生まれで、別に何にもおかしい所は無くて、周りの人達もわざと私の事を無視してるんじゃないから」

「どういう事だ？ なら何故君は周りと話そうとしない」

タマは本気で困惑していた。そんな事有り得るはずが無いと信じ込んでいる。人はすべからず他者と交流をするべきだと信仰している。話をするものだと思ってる。法子はちくしようと思った。怒りや悲しみを始め、恥ずかしさや笑い等様々な感情が湧いたが、突き詰めればそれはただ一つの言葉、ちくしように収斂された。

「私が話せないから」

「何故？」

「何故も何も私が人と話すのが苦手だから」

その言葉は益々タマを困惑させる。

「私とはこうして話しているじゃないか。思念のやり取りだが」

「そうだね。自分でも何でこんなに普通に話せているのか良く分からない。あなたが人じゃないからなのかもね」

「しかし、話すのが苦手とは、分からない。見た所、礼儀は欠けていない。礼を失さなければ人と話すなど特段技術が要るものでもないだろう」

そんな言葉を言われたら、法子は自嘲するしかなかった。そんな普通の事さえ出来ないのが自分なのだと。

「何話していいのかわからない。話しても嫌われそうで怖い。上手く話せるかどうか分からない。だから話せないの！」

段々と法子の思念が荒くなってくる。

「そうは言ってもだな、友達との会話なんて話す内容はそれこそ話す内に作っていく物だろう。嫌われるなんてよっぽどの事だ。話の得手不得手なんて人それぞれ、別に下手だからって恐れる事は無い。気にする人なんて居ないよ。案ずるより産むが易しだよ。話してみれば良いのさ」

「無理だよ！ だつてもうみんなグループ作つて固まつてるもん。今更私が話しかけたつて何こいつつてなるに決まつてるし」

「そんな事は無いだろう」

「なる！ 絶対なる！ タマちゃんは学校を知らないからそんな事が言えるんだよ！」

「確かに今の学校は知らないかもしれないが」

法子の息が荒くなる。それを近くで談笑している内の一人が気にして、法子へ視線を送つて来た。それに気が付いて、法子は俯く。見られた。一人でせえぜえ息を荒くしている所を見られた。気持ち悪い奴だと思われた。法子は途端に恥ずかしくなつて、興奮していた自分を戒めて、思念を沈ませる。

「それにさ、私、話が下手なだけじゃなくて、皆が知ってる事も知らないし、流行なんて特に分からないし、むしろそういうのつまりないつて感じるし、人と一緒に居るのが嫌だし、気持ち悪くなるし、むしろ私が気持ち悪いし、変な匂いがするし、肌も汚いし、油っぽいや気がするし、体も曲がつてるし、顔も体も貧相だし、運動とか出来ないし、得意な事も無いし、卑屈だし、すぐ落ち込むし、心が汚くて人の悪い所ばかり見ちゃうし、本当に良いところないし」

「ほとんど法子の自虐が重なつていく。その自虐の大部分が法子の頭の中で形作られ発酵した妄想に過ぎなかった。だが法子はそれを本気で信じている。タマはそんな自虐が出る度に、そんな事無いさと否定していくのだが、法子は聞いていないかのように自虐を続け、タマは聞いていて気が滅入つてきたので、それを止めた。

「分かった。分かったから止まつてくれ」

「あ、ごめん。本当にさ、私、話しててもこんなだし、いっつも

こんな事考えてるし」

「分かった。君が自分をどう思っているのかは十分に分かった」

「本当にごめんね。嫌だよ、こんなのと四六時中に一緒にさ。そもそも何で私が選ばれたの？」

法子の質問にタマは答えあぐねた。法子はどんと沈み込んでいる。恐らく学校でいつも感じていた苦しみがタマと会話した事で爆発したのだろう。それを止める為に、何とか法子が駄目ではないと伝えたいのだが、今の質問の答えでは励ます事が出来ない。とはいえ嘘を吐いたところで思念が繋がっている以上ばれてしまうので論外だ。意図的に送る思念を選別する事も出来るが、こんな事で手に隠し事みたいな事はしたくない。仕方なしに、タマは正直に答えた。

「理由は無いよ。君が私を見つけた。運命が噛み合ったからさ」

「多分私よりももっとふさわしい人、居るよ。だから」

法子が続けようとした思念の上に、タマが思念を覆い被せる。

「私は君が気に入った。私は君を魔法少女にする。だから君から離れるつもりは無い」

「え、な……べ、別に勝手にすれば。でもきつと直ぐ嫌になるよ」

法子の思念は言葉上、未だに頑なな自己卑下であったが、ほんのりと嬉しそうな思念も伝わって来た。よしよしとタマも嬉しくなる。とりあえず沈み込むのは止まったし、これで良しとしよう。これ以上、言葉を重ねると逆に心を閉ざしてしまう可能性もある。でもその前にどうしても言うておきたい事があった。

「君は自分の事を駄目だ駄目だと言っていたがな、私からすれば決してそんな事は無い。この世の何処にもいない完全な人間でも目指しているのかい？ 君は何処からどう見ても可憐な女の子だ」

「嘘ばかり」

言葉ではそう言っているが、やはり喜びの感情が流れてくる。タマはとりあえず言いたい事は言ったので思念を伝える事を止めた。法子から混乱した思念が流れ込んでくる。多分、褒め言葉をどう受

け取って良いものか迷っているのだろう。やがて法子がおずおずと思念を伝えてきた。

「ありがとう」

「いや、事実を伝えたまでだ」

「タマちゃんが男の子だったら良いのに」

「性別は君が下らない理由で決めただ。今からでも男に換えたらどうか？」

「ううん、無理。もう私の中でタマちゃんは完全に女の子だから」

「そうかい。まあいいけど」

「タマちゃんが沢山居たらな。百本位居たら賑やかで楽しいのにな」「やめてくれよ。自分が沢山居るなんて悪夢だろう」

タマがぼやいていると、教師が入って来た。皆が一齐に自分の席へと戻り始める。やはりいつの時代も学び舎は統率がとれているなあとタマは感心した。一方、法子は初めて楽しい朝の時間を過ごせたので満足していた。

その日は法子にとっていつになく早く時間が過ぎた。いつもであれば休み時間の間は早く時間が過ぎると祈り続けていたが、今日は違った。タマとの他愛の無い会話が楽しかった。いつもなら授業の時間が終わらない様に祈っていたが、今日は違った。早くタマと話したくて 授業中に話しかけるとちゃんと勉強しろとタマは取り合ってくれないから 授業が終わるのを待ち遠しく思った。会話の話題は主に本の内容で、それはタマが気を使って法子の生活の話題を意図的に避けた為であった。法子もその気遣いは気になったが、それ以上に初めて自分の趣味に耳を傾けてくれる友人を持った為に家族に話すよりも饒舌に語った。今日という日はあつという間に過ぎた。

帰り道、法子は相も変わらず本の内容を語っていたが、それをタマが遮った。

「ちよつといいかな」

というのも、流石に今の状況を続ける訳にはいかないとタマは思

つたからだ。段々でも良いから、少しずつ法子と周囲を関わらせていきたい。やはり友達が一人も居ないと言うのは歪んでいる。

タマの見た所、今の法子は外から拒絶されているというよりは、外を拒絶している。それは外への恐れと外への無関心の二つに起因している。だから少しずつでも外に目を向けさせて、興味を持ってもらえば治っていくはずだ。

だからタマは今日、別の学生の話聞き耳して得た情報を開示してみた。

「最近、この近くに大きな店の集まりが出来たそうだよ。アトランと言ったかな？ 何でもそこに国内最大の魔術専門店があるそうだから、出来れば後学の為に行ってみたいのだが」

何でもそこには人が沢山集まるらしいし、学校が終わった後は学生が多いそう。まずは人に慣れる所から始めた方が良さそう。

そんな意図での提案だった。だが、

「嫌」

「どうしてだい？」

「目的が透けて見える。その気持ちは嬉しいけど。でも嫌。人ごみは苦手だし」

「そうか」

思念から迷いが読み取れた。脈無しという訳ではなさそう。ならばここで無理を言っただけで拒否感を持たせてはいけない。そう思ってタマはあっさりと退いた。

「なら一先ず帰って魔法少女の訓練をするか」

「え？ ホントに！ 変身できる」

「ああ、勿論だ」

「うん！ じゃあ、早く帰ろう！」

法子が元気に走り出した。そんな姿を感じてタマは現金な主だなと苦笑する。

「それじゃあ、家まで駆け足だ。魔法少女は体力が無ければならぬ」



「う、もう無理。吐きそう」

少し走って法子は立ち止まり、息も絶え絶えにそう言った。ほとんど進んでいなかった。苦しそうな姿を感じてタマは、今回の主は本当に難儀しそうだかと嘆息した。

## 変身！ 魔法少女！

「それじゃあ、変身をしてもらおう」  
「はい！」

鞆を投げ出してベッドの上に勢いよく座り込んだ法子はタマを目の前に捧げ持つて嬉しそうに笑った。

「それで、どうすれば良いの？」

「簡単に言えば、変身したいと願うだけだ。それが変身において、いや魔術において基本であり、奥儀でもある」

「でも、前に学校で習ったけど、頭の中だけで魔術をするのってとっても難しいんですよ？」

「その通り。それが出来れば一流どころか稀代の魔術師だ。でも安心して欲しい。私が補助するからそこまで難しい事は無いはずだ」

「うんうん、じゃあ早速」

法子が勢いよく立ち上がって、気合を入れた。だがそれをタマは押し止める。

「焦らない焦らない。良いかい。そうは言っても、君にはまだ出来そうにない。今日学校で拝聴した授業のレベルを考えるとね。君が学校で習う事よりも遥かに先を独力で学んでいるのなら別だけれど」

法子が口を尖らせる。

「じゃあ、どうすれば良いの？」

「普通の魔術の様に精神統一の為の補助行為を重ねれば良い。魔法円や詠唱、踊り等々、道具を使っても良いし、とにかく変身しやすい状況を作るんだ」

「例えば掛け声とか？」

「ああ、そういうのだ。そんなに難しくしなくて良いし、難しく考える必要も無い。君が変身できそうって思える様な事を何か」

「分かった」

法子は立ち上がって放り投げた鞆を拾い上げて中からノートを取

り出した。見知らぬ男子に見られて悶えたあのノートだ。

「えーっとね」

ページをめくりながらその中を改め吟味していく。

「ふむふむ、これが件のノートの中身か」

「ああ！ ちょっと」

「ふむ、別段おかしくは無いと思うが」

「そ、そう？」

法子が恐る恐る疑わしげに尋ねてくる。タマはそれが不思議でおかしかった。

「当たり前じゃないか。うん、やっぱり出会いは正しかった」

「何が？」

「君は英雄になりたかったんだらう？ そのノートに書かれた武器や人物を見れば分かる」

「う、うん、まあ、そんな感じ」

「だらう？ 力とはすなわち願望さ。君がそれだけ英雄になりたいと思っいてくれたなら、それだけ才能があるという事さ」

「そうなの……かな？」

「そうさ！ うん、先行きは明るいぞ」

タマが明るく言うので法子も釣られて笑った。

「それで変身はどうする？」

「え、えっとね、じゃあ、この、」

闇は沈み、光は昇り、世界を落とし、我は浮かぶ。大逆の徒は浅はかに流れを鎖し、我は剣を持って循環を創る。肉体を聖別し、心を開錠し、敵を殲滅し、勝利を獲得する。我は神域の生成者。今一度の覚悟を得て、我は害意を滅す太刀となる。

で、どう？？」

「で、どうって言うのは、もしかしてこれを」

「うん、変身の呪文に。和風テイストで刀の入ったの選んでみたんだけど、どう」

承服しかねた。まず呪文が何かに裏打ちされた技術的なものでは

なく本当に雰囲気だけの何の効果も持たないものであったし、あくまで雰囲気作りの為と目を瞑っても、その呪文は幾らなんでも、「ちょっと長いんじゃないかな」

「そうかな？」

「ああ、咄嗟に変身する機会もあるだろうしね。出来れば一二動作、長くとも四五動作で終わってくれないと対応が出来ない」

「成程」

「とはいっても、あんまり簡単すぎると暴発する可能性もある。その意味で、先程の君の呪文は日常生活で絶対に口に出さないから良かったけれど」

「んー……もしかして馬鹿にしてる？」

「いや、そんな事は」

少しは馬鹿にしていた。それを感じ取った法子は怒った様子で目を瞑り、布団に勢いよく腰を下ろした。

「私はあなたと契約する」

「確かに契約と言えなくも無いね。そんな堅苦しい物には考えて欲しくないけど」

「そうじゃなくて、呪文。私はあなたと契約する！」

「え？」

「悪い？」

「いや、悪くは無けれど」

渋るタマに苛立って法子は勢いよくノートを閉じた。

「とにかく、変身させて！」

「本当に後悔しないかい？」

「しない！」

タマはしばし悩み、

「まあ良いか。いつでも変えられるんだし」

吹っ切った。

「分かった。じゃあ、立ち上がって」

言われた通り法子は立ち上がる。

「深呼吸をしてみて」

法子が何度か息を吸って吐く。

「それじゃあ、呪文を唱えて」

「えーっと、私は」

途端に法子は何か不思議な体の中が渦を巻く様な感覚に襲われた。悲鳴を上げようとする法子をタマは叱責する。

「声を上げない！ 集中！ 続きを！」

「あなたと」

その後と共に法子は自分の体が溶け崩れた様な錯覚に陥った。自分の肌がどろどろに溶けていく。そんな気がした。でも後には引けない。

「契約する」

その瞬間、法子の髪が解かれ、色が根元から次第に金色へと変わっていった。制服の色が黒く変じて、その形も少しずつ変わっていく。法子の手に握られていたタマは元の刀へと戻る。黒い衣装の上には黒いローブを羽織って、法子は魔法少女になった。

「はい、終了」

「え？ 終わり？」

「ああ、無事に変身できたよ」

「ホントに何だか実感がわかないけど」

そう言いながら、法子は自分の体を見回して息を呑んだ。

「服が変わってる」

「服だけじゃないよ。鏡を覗いて見な」

言われるままに鏡を覗くと、二つ縛りの黒髪だった自分が金色のストレートな自分に変わっていた。

「おわう！」

奇妙な叫びを上げて後ずさり、また足を踏み出して今度はしげしげと自分の姿を眺めはじめた。

「本当に変身してる」

「そりゃあね」

「でも、顔とか体は変わっていないんだね」

その言の通り、鏡に映った法子は服や髪の色は変わっているものの、その幼い顔立ちと体つきは全く変わっていないかった。

「だから絶世の美女になる訳じゃないと言っただろう」

「そうだけど……でも他の人に見られて私が魔法少女って知られるのが恥ずかしいんだけど」

「安心しなよ。正体はバレない様になっているから」

「そうなんだ」

法子は変身した自分をしばらく眺めて、顔を赤らめた。

「どう？ 変身した感想は」

「うん、実際に着てみるとこつという衣装って恥ずかしいね」

「この期に及んでそんな感想？」

「だって」

恥ずかしそうに体を小さくする法子に、タマは呆れた溜息を送る。

「まあ、良いけどさ。じゃあ、行こうか」

その言葉に法子が慌ててタマを見た。

「何処に？」

「何処につて魔物の気配を察知したからそこにさ。君は変身したら魔物を倒して人々を救うと言っただろう？」

「そ、そうだけど」

「今更怖気づいたのかい？」

「そうじゃなくて、恥ずかしいんだよ！ この恰好！ ほら今日はもう変身できたんだし、魔物退治は明日からって事で」

「アホか！ さっさと行く！」

「えー」

「文句言わない！」

タマに促されて法子は渋々と部屋から出ようとして、廊下から弟の足音の如き音が聞こえたので、回れ右をして窓を開けて、夜の闇に躍り出た。

魔法少女となった法子が民家の屋根？を踏み締めながら飛び越えていく。月明かりに照らされて仄かに見えるその表情はいつになく明るい。

風切りの音がびょうびょうと耳に木霊する。夜の冷たい空気が気持ちいい。視野は何処までも遠くを見渡せた。何百メートルも先に猫みたいな生き物を肩に乗せた女の子の後姿が見える。

「それで、何処に行くの？」

「体の赴くままに進めば大丈夫。勝手に魔物のところに着くから何が居るの？」

「伝わる魔力からすると大した事無い魔物だよ。練習にぴったりのはずだ」

「楽しみー！」

一際大きく跳ぶと、そんな気はまるで無いのに、糸に操られる様にして、公園へ着地した。タマと出会ったあの公園だ。少し離れたブランコの上に、綿毛の様なものが居た。猫の様な目がついている。可愛いんだか、気持ち悪いのだから分からない。途端に頭の中に情報が流れ込んで来た。

『ミスト』

実体を持たない霧状の魔物。一時間周期にその外見を変える。

出来る悪事は目の前に現れて人を驚かせる事。

魔力：微弱

生命力：E

可愛らしさ：特殊』

突如として浮かんだデータに法子は驚いた。

「な、何これ！」

「ふむ、どうやら君の能力の一つは解析らしいね  
「能力？」

「そう。私の力で变身するとその者に合わせて幾つか特殊な能力が付与されるんだ。多分、变身とは別に元々の才能を引き出しているんだと思うけれど、正確な所は私にも分からない。それで君の能力

の一つが解析な訳だ」

「へえ。何だかカッコ良い」

法子はうっとりとして虚空を見つめた。

「他の能力は？」

「それは発現してみないと分からない」

「早く知りたいなあ」

「まあ、とにかく相手が弱い事は分かっただろう？ 練習にもってこいだ」

「オツケー。それでどうすれば良いの？」

法子は刀を構えた。何だか舞い上がっているのが自分でも分かる。はしゃぎたくてたまらない。

「基本は私を使って相手を切れば良い。刀の使い方は分かるかい？」

「持った事も無い」

「大丈夫。触れれば切れる」

「おお！ 心強いよ、タマちゃん！」

嬉しそうに叫んだ法子は、刀を握る手に力を込めて、駆けた。一歩で距離を合わせ、二歩でミストの目前に迫り、右手を柄に添えてふわふわと浮いているミストに向けて見よう見まねで抜刀した。刃先はミストへ吸い込まれ、その身を切り裂く。

切った。確信を持った法子は笑みを浮かべて、ミストの居た場所を見つめ、

「え？」

そこで相も変わらず何て事も無い様子で浮いているミストを見て呆然と呟いた。

そんなはずは無い。そう思って、法子は刀を振り上げ、ミストへと振り下ろす。刃は過たずミストを通り抜け、変わりのないミストはふわふわと浮いている。

「何で？」

「いや、何でって霧状だからだろ」

言われてみればその通りで、霧を切れるはずが無い。



「でもさつき触れば切れるって」

「切れるよ。ただ魔力を込めなくちゃ」

「魔力を込める？」

「そう。刃先まで力を行き亘らせないと、魔力で出来た物は切れな  
いよ」

「そう言われても」

魔力を込める方法何て分からない。

「もしかして出来ない？」

「……だって習った事無いし」

「ま、まあ、大丈夫だよ。教えるから。難しい事じゃない」

タマは励ます様にそう伝えてきた。

「まずは目を瞑ろう」

言われた通りに法子は目を瞑った。

「次に自分の手の先に私が居る事を感じて  
柄をぎゅつと握る。」

「君の延長に私が居る」

私の延長。

法子は自分の体の中にまた渦の様な感覚が立ち込めて来るのに気が付いた。

「それが君の魔力。それを私のところまで届かせて」

渦の先は意のままに動いた。腕を通り、手の先、刀へと流れ込んでいく。

「よし、目を開けて。それを維持」

目を開けると刀は鈍く光っていた。

「そのまま刀を魔物に！」

法子は刀を正眼に構えて、振り上げ、勢いよく振り下ろした。

「あ、駄目だ」

タマの声が響いたが、気にせず刀をミストへと振り下ろす。だがやはりミストは切れなかった。刀の光は消えていた。

「むー。切れない」

「力を込めた時に気を散らしたね」

「難しいんだけど」

「練習あるのみ」

その時、風切り音が鳴った。続いて土を噛む音がする。地面に映るミストの影に一本の矢が突き立っていた。何かと思う間もなく、風切り音は数を重ね、ミストの影の周りに新たな矢が四本突き立った。矢は甲高い音を発して光り輝き、ミストの影は光りの中に消え、光が収まった後も、影は消えたままだった。ミストが消えていた。

「帰したか。法子、後ろ！ 上！」

「分かつてる」

ひしひしと背中に圧力を感じていた。振り返ると、遙か頭上、公園の隣にあるマンションの屋上に黒い人影があった。ひたすら黒い黒い鎧に黒いマント、口元だけが晒されて真一文字に引き結ばれていた。

「あれは」

「同業者、かな？」

黒い影は背を向けて飛び退り、マンションの向こうに消えた。

残された法子は街灯の薄暗い光に照らされた公園の真ん中で呆然と立ち尽くし、やがてぼつりと漏らした。

「何だか助けられたみたい」

「そのつもりだったんじゃないかな。苦戦しているみたいだから助けてくれたのかもね」

苦戦なんてしていなかった。次の一太刀で倒せたはずだ。

失敗した。折角魔法少女になったのに。早速失敗してしまった。

その上、赤の他人に助けられた。これじゃあ、いつもの自分と変わらない。

法子は悔しくなって大きく叫んだ。

「何なのよ！ もー！」

町の犬達が呼応して吠え声を上げた。

## 謎の転校生、来襲

民家の屋根を飛び移る。金色の髪を月明かりに晒し、闇に夜色のロープをはためかせながら。その顔は行きの明るい笑顔とはまるで違った沈んだものだった。

「まあ、そう落ち込むな。まだ始まったばかりじゃないか。これからだよ、これから」  
「うん」

法子は黙り込んで屋根から屋根へと飛び移っていく。タマもそれ以上何も言わなかった。繋がる今、法子はその胸に様々な感情を抱いて折り合いを付けようとしているのが分かったから。自分から立ち上がるうとするのなら、タマが何かを言う必要は無い。

やがて法子は沈んだ調子ながらも力の籠った意識でこう言った。  
「ねえ、私はどうすれば強くなれるの？」

法子が悔しさを感じているらしい事はタマにとって良い兆候だ。法子の日常に対する接し方を見ると、悔しさを感じても押し殺してしまいそうな気がしたけれど、悔しいと感じてそれを打破したいと思う、そんな気持ちがあるのならそれは良い事だ。出来れば打破をする手段を人に聞く前に自分で探すまでになつて欲しいが、それはおいおいで良いだろう。

「そうだな。とにかく鍛える事だな」

「具体的には？ 魔術の授業をちゃんと受けるとか？」

「魔術もそうだが、体もだ。明日からは毎日走り込みだな」

「そっか。ちゃんと私自身が強くないといけないんだ」

「当たり前だよ。私の変身は持っている力を引き出すものだからね」  
「分かった」

丁度家に着いた。器用に窓枠へ着地した法子は、そつと窓を開いて自室へと戻る。部屋の中に入った法子は一度鏡を見てその中の普段の自分とはかけ離れた自分を見て、タマに尋ねた。

「ねえ、元に戻るにはどうすれば良いの？」

「戻りたいと思えば良い。また呪文を設定しても良いけど、変身する事に比べれば大分簡単だから、戻りたいって思うだけでも戻れるんじゃないかな？」

法子が戻りたいと思うと、ローブは消え、服は制服に戻り、髪は黒く戻って二つ縛りになった。タマも掌に乗る大きさに戻る。

突然、法子の体が沈む。急激に身体に疲労が来て、体が思う様に動かせずに倒れ込んだ。

「何これ」

「そりゃあ、私の変身は君の魔力を使うからね。要は生命エネルギーの消耗だ。変身してるだけでも疲れるし、力を使えばもつと疲れる。特に今回は初めてだったし」

「あれ？ でも授業で自分に宿る魔力は使いすぎると危ないから使っちゃいけないって」

「まあ、使いすぎれば死ぬからね」

「な！」

法子が驚きに身をすくませた。逃げようとするが体は動かない。

倒れたままで怯えながら手の中のタマを見つめた

タマが笑う。

「安心しなよ。普通は使ったって寝れば戻るから。それに命に関わる程の魔力は使おうとしても私が使わせないよ。そもそも死んでしまっただけ使ったらこの星を滅ぼせるよ。そんなに使わないだろう？」

心臓が凍り付いた法子はしばらく頭の中を空白に吞まれていた。

やがて気を取り戻した法子は、とりあえず自分の取り越し苦労だった事を知り、その上でタマが幾分かかってきた事とそれに引っかけた事が悔しくて、一発タマにデコピンをしてから、何とか体を起き上がらせた。

「訓練を……」

「止めときなよ。今日はもう無理だ。訓練は明日から」

「そう？ でも……」

「無理したって良い事無いよ。ゆっくり寝る事も訓練の一つ。それにもう今日は十分に鍛えられたよ」

「本当？」

「本当。だから寝な。さあさ、ベッドはすぐそこだ」

「うん、分かった」

法子は箆笥を開けて、タオルとパジャマを取り出して、部屋のドアへと近付いた。

「ちょっと、何処へ行くんだい？ まさか外へ？ これ以上鍛えるなんて」

法子は左手で制服の首元を引つ張って、自分の鎖骨を反対の掌に乗ったタマに見せつける様にした。

「この汗まみれの体でお風呂にも入らずに寝る位なら、死んだ方がマシ」

その意味を計りかねてタマが考え込んでいる間に、法子は部屋を出て風呂場へと向かった。

翌朝、地響きの様な唸り声が部屋に満ちた。布団がゆっくりと動く。枕に掛かっていた黒い髪の毛がゆっくりと掛布団の中に引き込まれていく。そうしてしばらくもぞりもぞりと布団が波打って、布団の横から腕が現れ、頭が現れ、体が現れて、そのままベッドの端から落つこちた。床にへばり付いた法子が唸るように言った。

「体が重い」

法子は這ったまま枕元のタマを掴み揚げる。

「軽い筋肉痛だよ」

「全然軽くない」

頭の中にくすくすという笑いが響いてくる。それに苛立って法子は思いつきり立ち上がった。

「だっしやー！」

気合一閃。だが閃いた気合はすぐに立ち消え、法子はベッドの上に倒れ込んだ。

「無理。今日学校休む」  
「ほら、さつさと用意する」  
無慈悲なタマの言葉を法子は渋い顔で受け止めて、もぞもぞと動き始めた。

「ねえ、転校性来るって!」  
「マジで? いつ?」  
「今日! さつき居るの見た!」  
「それは来たって言うんですよ」  
「男? 女?」  
「男子!」  
「そんな嬉しそうな顔をしているって事は」  
「そう、ものっそいカッコ良いの!」  
「マジで!」  
「転校生が来るってホントか?」  
「あ、武志君。残念だったね」  
「何だよ、残念で」  
「転校生が女子じゃなかった事と、転校性がカッコ良かった事。きつと摩子取られちゃうよ」  
「取られるって何だよ、別に俺の物じゃねえし」  
「でも好きなんですよ?」  
「は? 別に好きじゃねえし」  
「あ、噂をすれば登校してきた。摩子!」  
「聞いてください。何でも転校性が来たとか」  
「へえ」  
「どうしたの? 辛そうだけど」  
「うん、ちよつと全身筋肉痛で」  
「また? どんな運動したんだよ」  
「ちよつとってレベルじゃないでしょ」  
「突っつかないで」

「大丈夫か、摩子」

「ああ、武ちよん。全くもって大丈夫じゃない」

仲が良さそうに話しているグループから摩子と呼ばれていた少女が抜けて法子の席の丁度真ん前に座って、ぐったりとした様子で机にへばり付いた。同じ様にぐったりとした法子は目の前で同じ格好をしているクラスメイトを見つめながら、でも私の方が疲れてるしという無意味な対抗心を抱いた。

転校生か。法子は机に頬を付けながら、聞き耳を立てていた話に思いを馳せる。

季節外れの転校生は何か秘密を持っていると相場が決まっている。何かの組織の一員だったり、特殊な能力を持っていたり、あるいは前の学校で暴力沙汰を起こしたとか。一体どんな秘密を持っているんだろ。そんな風を楽しい空想にふける。けれどふと自分の方が余程秘密めいていると気が付いてにんまりと笑う。そう法子は人々がうらやむ魔法少女なのだ。

転校生か。話してみたい。法子はにやつきながらそう考えたが、すぐにその笑顔が引っ込んだ。話してみたいけれど、でもカッコ良いやと言っていた。そんな人が私と話す訳が無い。いやどんな人であっても私は話す事が出来ないか。

話せる人。そう例えば同じ魔法少女だったら。他の人と違った秘密を抱える者同士話が合うんじゃないだろうか。あるいは私と同じ様にあんなノートを書いている人だとか。いや、そんな人居る訳無いが。

法子は時々体の痛み在眉を顰めながら、ぼんやりと様々な空想に耽った。顎を支える腕の先ではブレスレットになったタマが黙りこくっていた。

教室の一角に人だかりが出来ていた。転校生に群がる人々だ。法子は振り返ってそれをちらりと見て、餌に群がる犬の様だと思った。

転校生は盛大な歓迎と若干の妬みでもって迎えられた。鋭い目つき、高い背丈、最初に入って来た時はクラスの十中八九がとっつきにくそうな威圧感を覚えた。だがその表情には薄い笑みが漂っていて、自己紹介で朗らかに元気よく挨拶を行った瞬間、ほぼ全ての後ろ向きな評価は覆され、後は好意と妬みだけが残った。

法子はと言うと、秘密を持っている（持っていなければならぬ）転校生よりも一等高い秘密を持った自分に酔いしれる心と、人と話せない自分を情けなく思う気持ちと、重い痛みに捻り潰されそうな思い、詰まる所、外の異変よりも内に対する心に惑っていた為に、外界の転校生などにはまるで興味を持たなかった。それどころか顔すら上げずに俯いて、内に渦巻く三つの障り、中でも強烈な疲労感に抗う事が出来ず、苛まれ怠惰な脱力感を覚えて、顔を上げずに一切転校生を見ないどころか、耳すらもまともに働かせる事が出来なかった。何とか得た転校生に関する情報は下の名前が将刀という事と、季節外れの転校の理由がありきたりな親の仕事の都合という事だけだった。

今も人垣に囲まれてその向こうに居る転校生の姿は見えない。顔を戻して机に突っ伏し、どうでもいいやと眠りに入る。だがどうしても耳は後方の人だかりに向いてしまう。

その時ふと嫌な言葉が耳に入った。

「あそこで寝ているのは？」  
え？

途端に嫌な汗が全身ににじみ出た。まさか私の事かと法子は焦りつつ、必死で心を落ち着けようとする。

そつだ、目の前の何とかっていう子も寝ているんだ。だからそつちかもしれない。そりゃそつだ、私になんて注目するはずが無い。

高鳴る心臓が嫌な予感を告げ続けている。

また声が聞こえてくる。

「ああ、摩子の事？」

誰かの言葉に転校生らしき声が答える。



「あのおさげの子」

法子は自分の髪型を改めて考えて、数秒思考を巡らせて、ようやくおさげだという事に気が付いた。

私おさげだ。

でも分らない。まだ私と決まった訳じゃない。他の子かも知れない。

他の子であります様にと法子は祈りながら耳を澄ませ続けた。

「ああ、あれは、えーっと名前なんだっけ？」

私じゃありません様に。私じゃありません様に。

「なんだっけ？ えーっとね、ちよつと待って、あー、えーっと、

あ、法子だ。何とか法子」

私だー！

「十八娘とかいう変わった苗字の」

「いつつも本読んで誰とも話さない」

やめてー！

「何かいつもここそしてるよね」

「休み時間本読んでばっか」

「たまににやにや笑ってるし」

やめて。

「そついや話してる所見た事無いな」

「前に話した時ずつと俯いてて感じ悪かった」

本当に止めて。

法子はタマが自分の心を読む事を思い出して、そつとタマを肌から離してポケットの中に入れた。

陰口をたたいているのはごく少数だった。転校生の周りに集まっていた内のほとんどはクラスメイトに対するあからさまな悪口に眉を顰めて、その内の半分はその場を離れていった。けれど陰口を止めはしない。止めれば次に何かを言われるのは自分だ。

俯いて背を向けている法子にはその光景が見えなくて、あたかもクラス中が自分の事を馬鹿にして居る様な気がしていた。

「あの子、前に風呂敷持ってきた時あったじゃん」

「あったあった。何かおばあちゃんが持ってきたそつな古い感じの。お弁当包みだっけ？」

「そうそう。しかもそのお弁当の中身が煮物と梅干とごはんと焼き魚だったの。婆じゃねえんだから」

「あれは笑ったね」

だって、丁度お母さんが入院してて、おばあちゃんに来てもらって、いつも通りじゃなかったんだもん。それにあのお弁当はおじいちゃん用のお弁当を私が間違っって持ってきたからだし。そのお弁当だつて忙しくて夕飯の残りをそのままお弁当にしたものだし。おばあちゃんは上手だから料理はとつても美味しいし、あの日の私と弟の為のお弁当はフレンチ風の豪華なので。

そんな言い訳を心に思い浮かべながら、法子は必死にじつとしていた。何か反応すれば、更に陰口を言われる事は目に見えていた。

「うちのクラス、みんな結構仲良いけどさ、あの子だけ何か浮いてるんだよね」

「ね。壁作つてるよね」

「しい。それ以上大きな声出すと聞こえるよ」  
もう聞こえてる。

法子は俯きながら心の中で力の無いつつこみを入れた。

やっぱり私、みんなに嫌われてんだ。

クラスに溶け込めていない事は法子自身分かっていたし、多分良い思いをされていないだろうとも覚悟していたけれど、実際に周囲の心を聞かされると覚悟なんて易々と貫いて、酷い悲しみが法子の中に突き抜けてきた。

鼻の奥が痛くなつて思わず鼻根に指先を持つていく。当然、そんな事をして痛みが取れる訳が無い。鼻根に添えた指の先に目から流れてきた液体が触れて、法子はいたたまれなくなつて更に顔を俯かせた。

「そつといえばいつもノートに何か書いてるよね」

「前見たらへたつくそな絵が」

「なあ、そんな事は良いからさ」

転校生が話を遮った。

法子はようやく自分に対する陰口が終わった事に安堵しつつ、同時に転校生が自分に対して何の興味も持っていない事が分かって、嬉しい様な悲しい様な気持ちになった。悪目立ちするのは嫌だけれど、見られないのは寂しい。普通の人は簡単に両立して自分を主張しているのに、自分にはそれが出来ないと思うとやはり悲しみの方が大きくなった。

転校生が次の言葉を接ごうとした時に、丁度教師が入って来て、同時に予鈴が鳴る。授業の始まりに当たって、クラスメイト達は各々の席に戻り、法子は自分の席についたまま俯いて震え続けた。

その日一日、法子はずっと顔を俯かせて過ごした。顔を上げればまた泣いてしまう。そんな気がして顔を上げる事が出来なかった。時間はいつもの通り、時に遅く、時に早く進み、やがては下校時刻となつて、真つ先に教室を出た法子は俯いたまま、あの公園へと足を向けた。

誰も居ない公園。四方を囲むマンションが影を作りだして、その影によって辺りが閉ざされる気がして、法子はほっと安堵した。こならば誰も来ない。ゆっくりと、昨日ミストが浮いていたブランコに歩み寄つて、勢いよく坐り、思いつきり漕ぎ始めた。筋肉痛の痛みすら、嫌な事を忘れる為の清涼剤に換えて、法子は漕ぎに漕ぐ。「なあ、パンツ見えるぞ」

「ぴぎゃ」

思いつきり地面に靴を突き立てて、何とか急停止し、恐る恐る後ろを振り向くと、そこには一昨日ノートの中身を見て失礼な事を言つた男子が居た。

「ああ！」

法子が叫びながらその男子を指した。指された男子は溜息を吐い

た。

「なあ、あんた、十八娘法子だっけ？ もうちよつと周りを見て行動した方が良いよ」

余計な御世話だと沸騰しかけたのは一瞬で、すぐに相手が自分の名前を知っている事に引つかかかって何も言えなくなった。

何処で名前を知られたか思いを巡らせても一向に分からない。何処かで会っただろうか。美形、背が高い、プラス失礼。会ったら忘れそうにない相手だ。けれど一昨日会った以外に覚えがない。まさか小さい頃遊んだとか？ それで結婚の約束をしていたり？ と段々脱線し始めた思考は、記憶の引っかけが現れた事で躓いて止まった。

この男子の声、何だか聞いた事のある声だ。一昨日じゃなく、もっと最近。法子の行動範囲は限られている。すぐに自分の関わった人々が頭の中に網羅され、そうしてすぐに思い当たった。

「あ、転校生」

「ああ、そうだけど」

変な事言っちゃった。法子は自分の口走った言葉を反省した。今日一日、ずっと俯いていた為に、転校生の顔すら見ていなかった。しかし転校生からすれば、あの時クラスに居た全員が自分の事を見知ったと期待しているに違いない。その期待を裏切ればどんな逆恨みをされるか分からない。

とりあえず、ここは何とか和やかなムードにして退散しなければならぬ。法子は必死に会話の方法論を頭の中に思い浮かべて言った。

「えーっと、将刀君」

相手の名前を呼ぶ事が仲良くなる第一歩。いきなり名前も失礼かと思ったので、苗字で呼ぼうと思ったが、残念ながら苗字を知らないで仕方が無い。

「ああ、野上将刀っていう。よろしく」

「よろしく」

とりあえずの挨拶を済ませ、法子は次の会話を考える。

だが既に万策は尽きていた。

話題も何も持たない法子に会話を接ぐ力はない。興味のほとんどをフィクションの世界に向ける法子にとっては、天気の話すらも困難だ。今日が雨だろうが何だろうがどうでも良い。だからそれに対する感想も言う事が出来ない。

会話が出来ずに、法子が心の中で右往左往していると、先に将刀が口を開いてくれた。

「学校、嫌いななの？」

「え？」

「楽しそうにしてなかったから」

何で急にそんな話題を？ 今日来た転校生に言われる程、楽しそうではなかったのか。まあ、その通りではあるけれど。

法子は恥ずかしい気持ちで一杯になって、口すら満足に開けない。黙っている法子を見て将刀はふっと笑った。

「まあ、分からなくてはいいよ。俺もあんな陰口を言うクラスは嫌だ」

「ち、違うよ！」

思わず法子は叫んでいた。

「あれは私が悪いだけだから」

そう、誰もがしている当たり前の事をまともに出来ない自分が悪いのだ。言われるだけの理由がある。自分がもつとちゃんとしていればあんな事は言われない。それなのにこの転校生はクラスの人達を悪く言うなんて。転校してきたばかりで何も知らないくせに。

そう考えるうちに、本当に自分は駄目な奴だなと嫌な気持ちになった。

きっとこの転校生は孤立した私に同情して気を使ってくれたのだ。それなのに、その優しさを不快に感じてしまった。もう私は他人の優しさすらまともに受ける事が出来ない。

どんだんと思いの泥沼にはまって、法子はいたたまれなくなって、その場を後にする事に決めた。

「とにかく違うから。悪いのは私だから」  
ぼそぼそとそれだけ言って、法子は背向け、公園の出口へと向かう。

その背後に向けて転校生が言い放つ。

「だったら笑って話せば良いだろ。そうすればあんな事は言われないし、あんなだってそっちの方が幸せなはずだ」

それを聞いて、法子はもうその場に居られなくなって、走り出した。

そんな事は分かっている。そんな事は分かっているけれど、それが出来ないから苦しいんだ。それが出来れば苦労しない。それなのにあの転校生は無神経にもあんなことを言った。

走って走って。

ああ、分かっている。あの転校生にとってそれは当たり前前で、至極簡単な事なんだ。だからそれが出来ない私がやっぱりおかしいんだ。

家の前まで来て、玄関を開けて、自室に飛び込んで、ベッドの上に転がって、ポケットからタマを取り出して、そうして強く握りしめた。

「今日は災難だったね。まあ、あまり思い詰めるなよ」

「良いから変身させて」

「は？ どうしたんだい？ 随分と焦っているね。今日の事なら」

「良いから変身させて。私はあなたと契約する」

タマはしばし沈黙していたが、やがて法子の服装が変わり、髪の色が変わり、法子は魔法少女になる。魔法少女になった法子は煮えたぎる様な薄気味の悪い悲しみの猛るままに、窓の外へと飛び出した。

ライバルを打ち倒せ！

「魔物は？ 居る？」

ひとときわ高く跳び上がり、夜の風に吹かれながら、法子は辺りを一望した。住宅地には仄かな温かみを持った光が灯っている。それがむかつく。太陽の様な輝きがあるでもなく、常世の様に暗い訳でも無い。もっと輝けるのに、人の為という名目でその力を抑えている。その実に中途半端な様が気に食わない。

遠く行く先には、爛々と照る輝きがある。ビルや繁華街の強烈な明かりが灯り、昼とまでは行かないが、文明を持つ身として精一杯に輝いている。その光に誘われる様に法子は跳んでいく。

「ああ、微弱だけれど感じる。行く先そのまま」

法子は頷いて見知らぬ屋根の上に着地して、また跳んだ。

「嫌な気分になってるのは分かるけれどね、八つ当たりは感心しない」

「うるさい」

法子は民家の屋根を跳び次ぎ跳び次ぎ、やがて駅を中心とした繁華街に辿り着いた。一際高く跳んでビルの屋上へと上り、縁に立つて駅前の広場を見下ろす。

人々はあちらへこちらへ勝手気ままに歩き回っている。遊び歩く姿、駅へと向かう姿、待ち合わせをしている姿、誰も彼もが我が物顔でのし歩いている。だが屋上に立つ法子には気が付いていない。

自分が立っている事を誰も知らないのだと思うと、法子には目の前の光景がどうにも愚かな気がして、とても嬉しくなった。

「それで魔物は？」

「視界の右端、五階建ての建物の五階」

言われるままに視線を右に滑らすと、五階建ての駐輪場があった。窓や隙間から見るに、一階から四階までは人の往来があるのに、五階にだけは人が居ない。

「何かあったのかな？」

五階に人が居ないのと魔物の存在は関係があるのか。もしかしたら五階に居た人々を丸々消し去ったのかもしれない。だとしたら相当凶悪な魔物だ。

法子は屋上の縁を蹴り、そのまま駐輪場へと飛び降りた。一度、駐輪場の屋上へと降り立ち、無駄に後方宙返りをしながら再び宙に躍り出て、壁に沿って頭から落下し、大きく開かれた五階の窓枠に手を掛けて、五階へと滑り込んだ。

誰も居ない駐輪場、ずらりと並んだ自転車の合間に一匹の犬が見える。

犬、では無い。魔物だ。

『犬もどき』

犬っぽいけど犬じゃない。どちらかと言えば、いるかに近い。

マーキングした縄張りに、人は近づけなくなる。

魔力：微弱

耐水性：MAX

息継ぎ：ちよっぴり苦手

犬らしさ：秀

法子が見つめている前で、犬もどきは突然法子に吠えたてて、かと思うとお尻を向けて、その後唐突に振り返り、俄かにぐるると喉を鳴らし、いきなり跳びあがって自転車の影に隠れた。法子にはその行為の意味がまるで分からなかったが、歓迎されていない様だと思った。何て生意気なんだろう。

「さてと、憂さ晴らしに付き合ってもらいましょう」

法子は酷薄な笑みを浮かべて刀を抜き放った。殺す。そんな凶暴な思いが湧いた。殺す。学校での会話を思い出す。笑われ、馬鹿にされ、嫌われ。殺す。頭の中に浮かんだ嫌な映像を切り裂き、暴れだしたくなる気持ちを手を持った白刃に込めて、横一文字に構えた。辺りに気を配る。隠れた犬もどきはすぐに見つかった。いつの間にか背後に回っている。



即座に振り返る。犬もどきは自分の尾を追って回っている。法子は刀を両手で振り上げて、明確な殺意を持って切り下した。犬もどきの腹に切れ目が入る。悲痛な声を出して、犬もどきは自転車の影へと逃げ込んだ。

追う。追っている法子の胸に、後味の悪い後悔がわだかまり始めた。犬もどきが何をしたというのだろうか。ただ人を遠ざけただけ。確かに迷惑をこうむった者も居るだろう。だがそれが追われ、切られ、殺される程の罪だろうか。

そんな当たり前の疑問が法子の胸に湧いてしまった。だがもう後戻りは出来ない。全てへの反感が強く？しこりとなつて容易には取り除きようがない程膨らんでしまった。これをどうにかしなくては生きる事すらままならない。そう犬もどきを殺さなくちゃいけないんだ。心の中でそう叫ぶと、ふつふつと怒りが湧いた。犬もどきを殺そうとする自分は間違っている。そんな当たり前の感情に流され、後悔し、投げ出そうとする自分すら憎らしく、目の前が暗く赤く染まっていく。自分を含めた全てが気に食わない。

今日の学校での陰口、いつも一人で居る自分、暗澹として生きつづけている自分、そんな見たくも無い光景が頭に浮かぶ。これをどうにかするには切るしかない。切つて殺すしか、私は生きられない。法子は犬もどきを見失つて、跳びあがった。体を上下反転させて、天井に着地して、隅の方で震えている犬もどきを見つけて、足に力を込める。刀を鞘に納め、殺気を漲らせる。そして天井を蹴りだし、犬もどきへと跳んだ。

震えている犬もどきに迫る。法子は刀の柄に手を掛けて、刀身にありつたけの魔力を込めて、目の前の犬もどきへと抜き放った。しかし止められた。

必殺の意志を込めた刀は、横合いから出された杖を弾き飛ばしただけで終わり、犬もどきには届かなかつた。

何が起こつたのか。咄嗟に法子は判断できなかつた。だが犬もどきを殺す。その凶暴な意志に支配された法子は、突発的な事象にま

るで関心を払わずに、杖に当たって軌道の逸れた刀を、上段に構え直して犬もどきへと振り下ろそうとした。

再びそれは失敗に終わる。

突然横合いから衝撃を受けて、法子はふつとばされて転がった。その体には少女が一人抱きついていてる。

攻撃を受けたと思った法子は、全身総毛だつて、必死になって体に巻き付いた何かを引き剥がす。引き剥がした何かと目が合った。良く見ればそれは先日助けてくれた魔法少女だった。丈の短いドレスの様な白い衣装を着たその魔法少女は、悲しげな顔をして法子の事を見つめていた。

「駄目だよ」

魔法少女が、そう諭す様に呟いた。法子にはどういう意味だか分からない。だが言葉に込められた切実な響きに何かしらを感じ取って、法子は魔法少女の話聞く事にした。

「どういう事？ 私はあの魔物をやつつけようとしたのに、どうして邪魔したの？」

それは本心からの言葉だったが、一方で既に法子の中にはその疑問に対する漠然とした答えも持ち合わせていた。

「駄目！ あの子は悪い子じゃないんだよ！ それを殺そうとしちゃ駄目！」

ああ、やつぱり。視線を逸らすと、犬もどきが震えている。

「でも、あれは魔物で」

「そんなの関係ないよ。あの子だつて生きてるんだから。痛みも感じる普通の生き物なんだから」

あの魔物が何をした。殺されるだけの謂れがあったのか。

そう問う魔法少女に法子は心の中で必死に反論した。

ある。魔物は悪だ。人を害する事しかない。放っておけばさらに強力な魔物を呼んで、放っておけば世界が滅びる。魔物は悪だ。だから、だから殺さなくっちゃいけないんだ。

法子は何度も何度も心の中でそう繰り返す。だが声には出さない。

結局八つ当たりでしか無い事など自分でも分かっていたから。だが反論は出来ないものの、止めると言われておいそれと従える程、法子のやるせない感情は軽くない。魔法少女の悲しげな目を睨み返した。

法子が魔法少女へ抱いた感情を読んで、タマが慌てた様子を伝えてきた。

「法子、君は一体何をやる気だ」

「決まってるでしょ」

法子の親指が刀の鍔を押し上げる。魔法少女を敵と見定める。

『白焰の魔法少女

純白の衣装を着た可憐な魔法少女。

その正体は、ある、ある、な。

生き物、心、は、理解、示す。

魔力：程々

美う：にほご

目銅：：？』

「何これ？」

「妨害されたね。実力が同等かそれ以上なんだろう。ここは退こう。これ以上衝突すると戦いになる」

「戦いは望むところだよ」

「目的を忘れたのかい？ 君の目的は魔物を倒して人を救う事だろう？」

「その魔物を庇うなら、排除して目的を遂げるだけ」

「このままじゃ本当に殺す事に」

「だから何？」

完全に頭に血が上った法子には、タマの言葉も届かない。ただ魔物を殺す、邪魔者を排除する、二つの事にしか意識が向かない。

法子が唸る様に言った。

「魔物は悪だよ。痛みを感じようと、生きていようと、悪さをするなら排除するだけ」

そうして刀を構える。

魔法少女は驚いた様子で、一度振り返り、背後の震える犬もどきを見てから、再び法子を見て懇願する様に言った。

「それなら帰してあげれば良いでしょ？ 何も殺す事は」

その必死な姿に向けて法子は思いつきり刀を抜き放った。だが刃が届く前に魔法少女はまるでバネに弾かれた様に後ろへと跳びあがり、犬もどきの前に着地した。

「どうしてもこの子を殺そうとするの？」

魔法少女が幾分冷めた口調でそう尋ねてきた。それに対して法子が怒鳴る。

「当たり前でしょ！ そいつは悪い奴なんだから！」

言い終わると同時に、法子は地面を蹴った。目にもとまらぬ速さで、一気に距離を詰める。と、魔法少女は杖を掲げて応戦する気配を見せた。

もしも立ち向かってくるなら相手よりも早く切る。もしも避ける様なら、そのまま素通りしてあの犬もどきを切る。そんな単純な作戦を立てて法子は魔法少女へと突っ込んだ。

突然、目の前が爆発した。強烈な熱気に晒され、思わず立ち止まると、今度は煙が襲ってきて、法子は咳き込んだ。

煙で辺りが見えない。何処からいつ攻撃されるか分からない。恐怖を感じながら、とにかく煙から脱出しようと、法子は焦って横に跳んだ。幸い煙の量は少なく、すぐに煙から抜け出せた。そうして辺りを見回すと、フロアの反対側に魔法少女が立っているのが見えた。その頭上に光で出来た人の頭大の魔法円が四つ並んでいた。

「魔法陣……あれは」

「とても基本的な魔術だね。そういえば今日の授業でもやっていたな。ただ魔力を飛ばすだけのお手軽魔術。でも込められた魔力が強大だね」

「どうしよう」

「もう一度言うよ。退きな。これ以上続けても何も良い事が無い。」

魔物はあの同業者に任せて、君はこの場から離れるんだ」

「嫌！ それだけは絶対に嫌！ それじゃあ、私の負けじゃない！」  
絶叫して再び駆ける。折角魔法少女になれたのに、魔法少女の世界でも自分は駄目なのか。そんな思いを振り払いたくて、法子は必死に駆けた。

遙か先の魔法少女の頭上には今や四つの光球が現れて、ぎちぎちと辺りに嫌な音をまき散らしている。

「避けなきゃまずいよ」

もうタマの言葉には答えずに、法子は刀に手を添えてじつと光球を見つめ続けた。

光球が一つ飛んでくる。拍子抜けする程ゆっくりとした速度。法子はそれを横に跳んで回避した。そこに二つ目の光球が飛んでくる。今度は物凄い速さ。横に跳んで体勢を崩した法子へと狙いを済ませた一撃だった。

迫って来る光球に驚いた法子は、無理矢理地面を蹴って何とか上へと逃げる。その際に避けきれず右の足に光球が当たった。激痛が走ったが、不思議な程動揺が無かった。痛みを顔に顰めつつ、体を反転させて、傷ついた右足で天井を蹴り、更に距離を詰める。

三つ目の光球が跳んでくる。避ければまた同じ事になる。そう判断して法子は刀を抜いて、光球を切った。魔力を込めた一撃で光球は霧散する。そこに四つ目が襲ってくる。無理な体勢から何とか刀を返して光球を切る。力はまるで入っていないが、魔力だけは込めた一撃で、触れた瞬間に光球は砕け散った。安堵して、着地し、更に床を蹴る。

もう光球は無い。魔法少女はがら空きだ。今度こそ切る。法子がそう思った瞬間、目の前にいきなり壁が出現した。止まり切れずに壁にぶつかり、全身に衝撃が走る。壁は砕け、突き破った法子は壁の残骸と共に床に転がり、何とか立ち上がった時には既に魔法少女は遠くに退き、再びその頭上に四つの光球を作っていた。

忌々しい思いで胸が一杯になる。法子は歯ぎしりしながら再び魔

魔法少女へ向かった。ゆっくりと一つ目の光球が。法子はそれを刀で切った。そこに二つ目の速い光球が。法子は何とか刀の先をその光球へ触れさせた。光球は砕けた。触れさえすれば防げる事に気が付いた法子は刀を前に構えて、そのまま駆けた。そこに三つ目の光球がやって来る。触れて壊れる。四つ目がやって来る。触れて壊れる。今だとばかりに力強く踏み出そうとして、足をもつれさせて転んだ。床に擦れて皮膚がそぎ取られるが、すぐに治っていく。見れば先程光球が当たった足から痛みが無くなっていた。体の傷が治っていく。そのくせ体は動かない。

「限界だね」

タマの声が伝わる。法子がそれを無視して弱々しく立ち上がると、魔法少女の頭上には既に四つの光球が用意されていた。

「初めての本格的な戦闘にしては良く動いていたよ」

一つ目が飛んでくる。法子は何とか刀を掲げて光球に触らせ打ち破る。

「でも疲労が極まった」

二つ目が飛んでくる。法子は刀を触れさせて、だが光球に変化はなく、そのまま突っ込んできて、法子は衝撃を食らって後ろに飛んだ。

「残念ながら君の負けだ」

三つ目は飛んで来ない。代わりに魔法少女が近付いてきて、腹這いになって何とか顔を上げる法子の鼻先に杖を突き付けた。魔法少女の目は驚く程冷たい。

殺される。咄嗟にそう思って、法子は後ずさるうとした。だが動けない。手足を微かに動かしただけ、惨めな姿をさらしただけだ。

魔法少女の杖に光が灯る。魔力が込められていく。それが放たれれば、死ぬ。

殺される。再びそう思って、法子は目と鼻から液体を流して、手足を少しずつ動かし逃げようとする。だがそれすらも次第に出来なくなつて、体は完全に床へ這いつくばり、顔も上げる事が出来ず、

顔面をくしゃくしゃに歪めながら法子は助けてと心で願いつづけた。

## 落ち込んだ日の帰り道

法子が心の中で必死に助けると繰り返していると、やがて頭上から優しい声がかけられた。

「どう？ 殺されそうになるのがどれだけ嫌な事か分かった」

その声音に、自分の命が救われる可能性を見出して、法子は顔を上げようとした。だが上げられない。体が言う事を聞かない。口から涎が垂れるだけ。

「ね？ もう二度と酷い事はしようとしなくて、約束して」

最後の言葉だけ妙に底冷えしていた。動かないはずの法子の体が動いて、何度も頷いた。

「分かってくれてありがとう。それじゃあ、ばいばい。あ、そうそう、あの子は大丈夫。私がちゃんと帰しておくから」

足音が離れていく。それから何か音が聞こえて、しばらくして止んだ。後には外からの喧騒が聞こえてくるだけだ。

魔法少女は居なくなった。命の危機が去って安堵した法子は、急に悔しくなった。流れていた涙が更に多くなる。何かにすがりたくて、法子はタマに尋ねた。

「ねえ、タマちゃん。私間違ってたの？」

「押し通せない正しさなんて存在しないよ。でも、私はあの同業者の言葉も間違っていると思うね」

「どういう事？」

「理由は二つ。」

一つ目は授業で習ったかもしれないけれど、魔物は向こうの世界の概念に守られているからそう簡単に死なない。首を切るうが真つ二つにしようが時間をかければ元の状態に戻る。だから君がさつき何をしようかあの犬もどきを殺す事は出来なかった訳だ。だからあの同業者が魔物を殺す罪で君を糾弾したのは間違っている。起こりえなかったんだからね。



二つ目に、魔力を有するものは魔術に対する抵抗が備わっている。魔物だって魔力を持っている。だから魔物を向こうの世界に帰す送還の魔術を行っても、魔物の抵抗力が働いて上手くいかない。だから抵抗力を少なくしないといけない訳だけど、その一番簡単な方法が肉体を痛めつける事だ。君やあの同業者程度力量じゃそれしか選択肢が無い。つまりあの同業者だって抵抗力を落とすには結局暴力に頼る必要がある。君がやろうとした事と、意識の差はあれ同じだ。

あの同業者が君の心を読んで、その上で送還の為に傷付ける自分と、憂さ晴らしの為に傷付ける君との、意識の差を説いたなら分かるけど、そういった様子も無かったし。結局あの同業者は目の前で行われる残虐性のみに着目して、それを批判しようとする理屈を付けただけだ。だから間違っている、と私は思う」

「そっか」

タマの長々しい説明は法子の頭にほとんど入って来なかった。けれどその言葉が法子を励ますためのものである事は分かった。だからこそ、それに法子は感謝して、同時に悔しい思いが強くなった。

魔法少女になれば変われると信じていた。魔法少女になれば自分は何か豪い人間になれて、学校生活にだって変化があるって信じていた。でも現実はこのだ。学校では前にもまして居心地が悪くなり、外では自分勝手な八つ当たりで魔物を殺そうとして同じ魔法少女にそれを諷められ、更にその魔法少女に楯突いて完膚無きにまで叩きのめされた。

魔法少女になったから酷い目に遭ったんじゃないで、魔法少女になっても変われなかった。それが悔しくて悲しかった。テレビでは日夜魔法少女の活躍が採り上げられ、その華々しい戦果を誇っている。一方で自分は地面にへばり付いて惨めな姿を晒している。その差が悔しかった。魔法少女になって変わる人間が居る一方で魔法少女になっても変われない自分が居る事が悔しかった。

惨めな自分の中に縷々として残っていた最後の希望、魔法少女に

なれば自分も変われるという幻想が取り払われ、後にはいつも通りの無力な自分に対する悔しさだけが滲んでいる。それが虚しかった。法子はうつ伏せになったまま唇を噛んで、涙を袖で拭いた。だが涙は後から後から流れてくる。

「法子、君が悔しいと感じるのは分かるよ」

タマの優しい思念が法子の心に響いた。

「でもね、前にも言ったけれど、まだ始まったばかりだ。これから幾らだつて強くなれるし、これから幾らだつて豪くなれる。勿論、魔法少女だけじゃないさ。君はまだ子供だよ？　これから幾らだつて良い方向へ向かえるんだ」

優しい言葉が胸に沁みた。鼻の奥が痛くなって、とうとう法子は泣き声を上げ始めた。

それに対してタマが更に励まそうとした時、遠くで人の声が聞こえた。犬もどきが帰った事で人払いが解かれたのだ。

「人が来るみたいだ。もう体は回復している。辛いだろうけれど、立ち上がって。すぐにここから立ち去ろう」

法子は言われるままに立ち上がり、人目を忍ぶようにこそこそと窓枠に足を掛けて、跳んだ。

屋根の上を伝いながらの帰り道。出来るだけ人に見られない様に帰る自分の姿がまたも惨めに思えて、法子は嫌になった。

「星が綺麗だよ」

唐突にタマがそんな事を言ってきた。

星空なんてどれも同じ、ただ暗い背景に白い点が散らばっているだけ。常々そんな事を思っ取らたてて感動をした事が無かった法子は、今回もだからどうしたのだろうと投げ遣りな事を考えながらぼんやりと上を見上げて、そこにある星空の美しさに打ちのめされた。それは本当に初めての事で、法子はあまりの衝撃に跳び移る屋根を踏み外しそうになった。

法子はしばらく夜空の美しさに見惚れていたが、それも長くは続かず、これは今日の惨めさの所為で心境が変化したからだろうと分

かって、また涙が出てきた。けれどそれは悲しいばかりの涙では無かった。

「もう泣くのはお止しよ」

「うん」

法子は涙を拭う。

そして、でも、と思う。確かに魔法少女になっても私は何も変わらず惨めな思いをしただけだった。でも一つだけ変わった事がある。それはタマの存在だ。初めての友達。いつも一緒に居て落ち込んだら励ましてくれる友達。タマの方は私の事を友達だなんて思っていないのかもしれないけれど

「友達だと思っっているよ」

モノローグに横やりが入って少し興が削がれたけれど、とにかくタマという友達が出来た。それだけは今日の惨めさを全部覆して余りある収穫だ。

法子はそう考えて、そこでふと気が付いた事があって、不安げにタマへと尋ねた。

「タマの目的は何なの？」

「だから何となくだよ。誰かを魔女にして世界を救うっていう使命があるにはあるけど。結局私が何となく人を変身させたいから……かな？」

「そうなんだ。それで、その」

「ずっと一緒に居るよ」

タマが法子の言いたい事を読み取って先に答えた。

「本当に？」

「ああ」

「見捨てたりしない？」

「君がどんな状況にあっても見捨てたりしない。ずっと一緒に居る。約束するよ」

その言葉で今日の苦労は全部消え去った。十分だ。私は幸せだ。そう考えて法子は方向転換をして、一際大きく跳ねた。

あの公園へとやって来た法子にタマが尋ねた。

「どうしたんだい？ 帰るんじゃないかったのか？」

「ううん、ちょっと修行をしていこうかと思って」

「動ける位に回復したとはいえ、まだ疲労は強いだろう。帰った方が良いと思うけれどね」

「もう今日みたいな思いはしたくないから」

「そうか。なら何も言わないよ」

法子は空を見上げた。先程美しいと感じた星空はいつもの無機質な夜空に変わっていた。

さて修行をしようと気合を入れた時、背後に気配を感じた。続けて声が投げられる。

「何だ。魔物かと思ったら同業者か」

振り返ると、昨日の騎士が居た。全身を黒い鎧で覆い、黒い兜で顔を隠し、黒いマントをはためかせている。その口元には皮肉気な笑みが浮かんでいた。

「あなたは」

「あなたの同業者だよ。魔物が居ないなら」

そこで騎士の言葉が一瞬途切れる。

「あんたやけに傷ついているな。魔物との戦いで消耗したのか？」

法子は自分の体を見回した。だが何処にも傷は見当たらない。もう治ったはずだけれど。

不思議そうにする法子にタマが言った。

「きっと魔力が減っているのを見てそう言っているんだよ」

成程、そういう事かと思って、騎士の問いに答えようとして、それが敗北という自分の恥部に当たる事だと気が付いて口を噤んだ。

「どうした？ まさかまだ辺りに居るのか？」

騎士の声音が段々と真剣味を帯びたものになっていく。法子は慌てて首を振った。

「違います。もう魔物は居ません」

「そうか、やっぱり魔物が居たんだな。それであんたが追い払ってくれたのか」

「いえ、別の人が」

騎士はしばらく黙って法子を見つめてから、やや声を落とした。

「あんた負けたのか」

痛いところを突かれて法子の顔が歪む。それが答えとなる。

騎士は少し申し訳ない気持ちになって（自分では）優しい（つもの）言葉を掛けた。

「みたところ、まだ変身出来る様になってから日が浅いだろうか？  
一つの負け位で気にする必要は無い。闘っていれば嫌でも敗北は付きまとう」

そう言われても悔しいものは悔しいのだ。先程までの法子なら反発を抱いていたかもしれないが、タマとの絆を感じて穏やかな気持ちになっていた法子は、その言葉を素直に受け取った。

とはいえ、やはり続けたい話題ではないので話を変えようと、法子は昨日自分を助けてくれた事について尋ねようとして、やっぱり止めた。相手は法子の事を憶えている様子は無い。昨日の事は本当にただ魔物を退治しようとしただけなんだろう。そう考えて、何故だか法子は残念な気持ちになった。

「敗因は？」

「え？」

唐突な騎士の言葉に法子は聞き返した。

「負けた理由」

何だか遠慮のない人だなと思ったが、不思議と不快感は湧かなかつた。相手の方が同じ変身ヒーローとして遥かに格上の様子だからかもしれない。

「負けた理由と言われても、相手の方が強かったから？」

「それじゃあ、何にもならないだろう。自分がどうして負けたのかを冷静に分析しなくちゃ」

法子は駐輪場での戦いを思い出す。思い出しても圧倒された記憶

しかない。力の差がありすぎたからとしか言いようがない。

そこにタマのつつこみが入った。

「いや違うだろう」

そう言われてもどうしてだか分からない。考えあぐねる法子に騎士は助け船を出した。

「なら、どんな戦いだったか教えてくれ。第三者の目から見れば分かる事もあるだろう」

そう言われても、負けた事を話すのは恥ずかしい。まして同じ魔法少女に負けた等とは言いたくなかった。でも負けた原因というのは確かに気になる。

どうしよう。

「話してみれば？」

何故だかちよつと怒っているタマの言葉に促されて、法子は迷った末に駐輪場での戦いを騎士に話した。ただし戦った相手は魔法少女ではなく、あくまで魔物という事にして。

法子が話し終わると騎士が一つ頷いた。

「成程な。どうやら相当強力な魔物だったみたいだな。あるいは魔導師か。聞けば初めての戦闘だったんだろう？ それにしては良く戦ったと俺は思う」

「えっと、ありがとうございます」

ちよつと上から視線ではあるけれど、褒められたのは確かで、何だか法子は気恥ずかしくなった。

「でだ。肝心の敗因だけど、それは接近戦にこだわった事だろうと思っ」

「接近戦……」

「そう、不用意に近付いた結果、相手の魔術にしてやられた。遠くから攻撃する手段があればもつと慎重に闘えていたはずだ」

騎士の発言にタマが法子の心の中で噛み付いた。

「そんな風に慎重に闘ったらずくに魔力が尽きただろうけれどね」  
勿論騎士には聞こえない。法子にはどちらが正しいのか分からない

いので、おろおろとしながら成り行きを待った。

「どうやら遠方に届く攻撃は持つていない様だな」

騎士がそう言っつて、離れた場所にある砂場を指差した。

「見ててくれ」

すると砂場から柱がせり上がってきた。それに対して騎士は剣を抜き、体を半身にして、剣を持った腕を体に巻き付かせるようにして一呼吸置く。構えた剣に魔力が蓄えられていく。そしてその貯めた力を、剣を振ると共に解放した。風切り音が鳴って、再び静寂が訪れる。一拍遅れて、柱の中心が横一文字に砕け散り、弾けて、柱は真つ二つになった。

「おお」

法子の口から思わず感嘆の吐息が漏れる。

騎士は法子に向き直つて、口元を微笑させた。

「魔力を剣に込めて放つ。単純だけれど、その分使い勝手が良い。遠くにあるとはいえ、切る事に違いは無いから魔術として意味づけもし易い。だから簡単に出来る」

法子はしきりに頷いた。その様子に騎士は笑みを強くした。

「そんな大した助言じゃない。ま、役に立つと良いな」

法子はまた頷いて、ふと首を傾げた。

「あの、教えてくれるのはありがたいんですけど、どうしてこんなに優しくしてくれるんですか？」

法子が疑問をぶつけると、騎士は背を向けて歩き始めた。

「ヒーローだからさ」

そう呟いて、騎士は剣を納める。

「それじゃあ、君に世界の祝福があらん事を」

騎士は何故か無駄にマントを翻して高く跳んだ。そしてすぐに夜の闇にまぎれて消えた。

「何だかきざつたらしいというか恥ずかしい変な奴だったね」

注意を騎士の消えた闇夜に向けながら、タマは法子へそう思念を送った。

「カツコ良かったね」

法子がそれに対してぼーとした様子で答えた。

「は？」

「ヒーローか。私もあんな風になりたいなあ」

「いやいやいや。あんな気取ったのが良いの？」

タマの否定に耳を貸さずに法子はしばらく騎士の消えた方角をうつとりと眺めてから、やがて砂場に立つ柱に目を向けた。

「それでさ、タマちゃん」

「どうしたの？」

「さつき教えてもらった技、どう思う？」

法子としては直ぐにでも覚えて使いたかったが、タマが騎士に対して良い感情を抱いていなさそうだったので、遠慮してそう聞いた。それに対してタマはちよつと不機嫌そうに答えた。

「まあ戦術の幅が広がるし、覚えて損は無い」

「そっか！」

法子は早速刀を構える。

「それでどうすればいいの？」

「それぞれの感覚によるから何とも。とにかく対象を切りたいたいと思えば良い。あの騎士も言っていたけれど、とつても簡単だから、やってみればすぐに出来るんじゃないかな？」

「分かった」

法子は刀に魔力を込めた。そうして砂場の柱を見定め、体をゆっくりとねじって、思いっきり解放して刀を振り回した。勢い回って一回転して倒れ込み、しりもちをつく。

目を回しながら砂場を見ると、柱に切り込みが入っていた。

「やった！ 出来た！」

「お見事。でも、あそこを狙ったの？」

切り込みが入っているのは端の方である。法子が狙ったのは柱の中央だ。

「ちよつと違うかも」



「百発百中で当たる様にしないとね」

「むっ」

法子は立ち上がって刀を構え、それから何度も刀を振った。柱の傷がどんどん増え、時に切れて柱がどんどんと短くなっていく。

しばらく経って、ようやく狙い通りに切れる様になった頃に、タマが言った。

「はい、そろそろ止め」

「ええ！ ちょっと待って。ようやく当たる様になってきたんだから」

「気付いてないのかな？ また倒れるよ？ 間違いなく、明日は今

日よりも体が重くなるからね」

「うっ」

「帰る為の力も残しておかなくちゃいけないし、今日はもう切り上げ」

「はい」

法子は渋々刀を納め、公園の時計を見上げた。

「あ、もうこんな時間！」

「どうしたの？」

「夕飯の時間だよ！ 早く帰らないと」

法子は急いで跳びあがり、屋根の上を渡りながら、家を目指した。その途中で法子が嬉しそうに言った。

「何とかあの技をちゃんと使える様になりたいなあ」

少し前の落ち込み様など無かったかの様な嬉しそうな声にタマは少し不思議に思う。どうしてこんなに元気になったのだろう。あの騎士の影響か、あるいは新しい技を身に付けたからか。良く分からない。

「やる気を出してくれたのは嬉しいけれどね。自分の体は大事にしてよ」

「分かってるよ。でもね」

「でも？」

「私はヒーローだから多少苦しいのは我慢するよ」

「そういうもの？」

「そういうもの。今はまだ未熟かもしれないけど、これから沢山の人を救って、みんなの笑顔を守る立派なヒーローになるから」

タマには法子の語る言葉が何処となく子供っぽく思える。実際に学生と言えば大人から見れば子供なのだし、当然と言えば当然かもしれない。

とはいえ、子供っぽいかもしれないが、法子の明るい言葉がタマには嬉しかった。傍に居る者が明るくなれば自然と嬉しくなるものだ。

## 休日だけ外に出る

「か、体が……動かな」

法子は立ち上がったから体を硬直させて今さっきまで寝ていた布団へと倒れ込んだ。

布団が浮き沈み、跳ね上げられて、それから仰向けになって大字になる。

「だから今日はもう起き上がらない」

そう厳かに宣言した法子に対して、タマが呆れて呟いた。

「昨日もそんな事を言って、一日中寝ていたよね」

「うん、でも今日も無理」

「はあ、若いのが何て様」

「タマちゃん、おばさん臭いー」

法子は体を丸めて掛布団に絡みつくと、二度目の睡眠に入ろうとする。

そこへ外から声が掛かった。

「法子ー、起きてー。昨日も一日寝っぱなしだったんだから、今日  
はもう起きなさい！」

「う」

「法子、ちよつと頼みたい事があるんだけど」

母親の声が聞こえてくる。それは亡者を駆り出す狩人の声。聞けば抗う事は出来ない。

そうして面倒なお使いを頼まれる。

「おや、母君からだよ？」

「もう！」

法子は不満を込めて起き上がった。

「おや、今日は起き上がらないんじゃないのかい？」

「行くしかないでしょ」

法子が痛みに耐えるきこちない動きで用意をしている姿に、タマ

は笑った。

「大変そうだね」

「本当に動きたくないのに。お母さんの馬鹿」

「私としては中に籠られるよりは外に出てもらった方が嬉しいけど」  
苛立つ法子と笑うタマ。そこにまた母親の声が届いた。

「ねえ！ 法子ー！ 起きてるー？」

「今行く！」

法子は大きな声で答えてから、部屋の扉を開けて、体を引きずりながら下へと降りていった。

「全く、何で私があいつのお弁当を届けなきゃなんないの？」

「まあまあ。可愛い弟君の為だろう」

「全然可愛くない！」

「そうかねえ。良い弟君だと思っけれど」

休日の河川敷、法子は土手の上を歩きながら愚痴りつつ、下で行われているサッカーに目を向けた。

今日は河川敷でサッカー大会をやっている。幾つかあるコートに小学生、中学生、高校生、社会人と分かれて、大声を張り上げながらボールを追っている。法子の弟も小学生の部に参加しているはずだ。法子はサッカーにまるで興味が無かったので、どうでも良さそうにわらわらと動く選手や、わやわやと野次っている観客を眺めてから、視線を逸らし、そして凄い勢いで視線を戻した。

見れば土手の下、座って観戦している人々の中に見知った顔があった。同じクラスの生徒だった。何人かで固まって時折はしゃぎながら、中学生のコートを眺めている。名前も分からないが確かにその顔を毎日の様に見ている。

見つかりたくなかった。元より学校の人と喋るのは怖い。もし取り囲まれたらどうしていいか分からない。一対一で話す事も無理なのに、複数人に話し掛けられたら、それこそ地獄を見る事になる。例え、相手にいじめの意志が無く、端から見てもただ単に話しかけ

ているだけでも、それは法子にとってこの上ない苦痛になる。

まして昨日の事がある。法子は出来るだけ見つかる事の無いようにこそそそとした滑稽な足取りで、コートに熱い視線を送るクラスの他人達の後ろを通り過ぎた。

小学生達のトーナメントが行われている場所では法子よりも幼い子供達が掛け声を上げ、ボールを追っている。ボールが高く飛んだ選手も観客もその行方を追うが、法子だけはコートを見回して弟の姿を探す。辺りから喚声上がる。俄かに色めきたった観客達の間には視線を這わせていると、ようやく弟の姿を見つけた。

ようやく面倒なお使いから解放されると安堵して、法子は重たい体に鞭打って弟の所に向かおうとして、足が止まった。

弟が何だか楽しそうにはしゃいでいる。その隣にあの転校生が居た。転校生はサッカーボールを器用に操り、体の至る所でボールを跳ね上げ受け止めている。弟はそれを尊敬の眼差しで見つめている。何であの転校生がこんな所に？ 疑問よりも先に、嫌だなと思っただ。会いたくない。喋る事になったらどうしよう。不安がどんどん膨らんで、その不安に押しつぶされそうになったから、法子は踵を返した。渡せなかったけれど目的地までは来れたんだから上出来だ。そんな自分勝手な事を考えてその場を去ろうとして、けれどそれは許されなかった。

「あ！ 姉ちゃん！」

法子の体が大きく震えた。続いて、湿っぽい汗が体中から吹き出し始めた。

「お姉さん？」

転校生の尋ねる声が聞こえる。益々汗が強まった。

「良かった、弁当持ってきてくれたんだ」

背を向けたまま固まる法子に、二人は近付いていく。

「悪い、姉ちゃん！」

そう言って、弟が法子の前に回って、お弁当を引っ手繰った。

「そっぴや、将刀さんって知ってる？ 姉ちゃんと同じ中学校に転

校してきたみたいなんだけど」

全力で首を横に振りたかったが、後ろに本人が要るのでは出来ない。肯定も否定も出来ずに法子はただ固まった。

「さつき偶然知り合っただけどき。凄いんだぜ。部活とかクラブとかに入ってる訳じゃないのに、サッカー滅茶苦茶上手いの」

弟の言葉なんて聞いていられない。今、法子の中はどうしたら当たり障りなくこの場を去れるかという方策を練るのに一杯だ。

「どうした？」

「いや、その、じゃあ、私帰るね」

「いや、姉ちゃん、ちよつと待ってって」

一刻も早くこの場を去りたいという法子の願いは一向にかなえられない。むしろ弟の所為で更に深い泥沼にはまっていく。

「将刀さん、これ、うちの姉ちゃん」

「ああ、さつき聞いた」

「まあ、弟の俺が言うのもなんだけど、結構美人だと思うよ」

途中で吹き出しつつ弟が言った。

ハードルを上げるなど叫びそうになる。それをぐつと堪えてこの場を立ち去る方法を探す。だが思いつかない。法子は恥ずかしさと怒りと、ついでに情けなさに苛まれながら、弟を殺して自分も死ぬと少しだけ真剣に考える。

「多分、将刀さんと同じ学年だと思っただけど」

「一緒だな。それに同じクラスだ。話もした」

「え？」

法子は振り向きざまに、弟と同時に間の抜けた声を出した。

弟の驚きは、将刀が姉を知っていた事に対する驚きが半分に、根暗な姉が他人と、しかもまだ出会って間もないはずの転校生と、その上容姿とサッカーに秀でた将刀と話していた事への驚きが半分。

法子は他人が自分に言及した事に対する驚きが半分に、将刀の言葉が法子に対する棘を含んでいなかった事への驚きが半分。

驚き呆けている二人の視線に晒されて、将刀は少しばつの悪そう

な顔をした。

「えっと、法子さん」

将刀の口調が唐突に真面目くさったものに改まる。

「昨日は悪かった」

そう言つて、頭を下げた。

頭を下げられて法子は混乱に混乱を極めた。謝られる所以なんてまるで無い。昨日というと公園でのやりとりだろうが、あれは完全に自分が悪かった。何か悪い事があつた場合、その原因はまず間違ひなく自分なのだから。そもそも法子の中で昨日の出来事は既に消えかけている。覚えてるのは、学校で嫌な思いをした事と公園で転校生と話して恥ずかしい思いをした事と魔法少女と闘つて悔しい思いをした事とタマの励ましで嬉しい思いをした事だけ。詳しい事はほとんど思い出せない。日々の鬱屈とした思いを忘れる事に困つて自己防衛してきた法子はいつもの通り昨日の事もほとんど忘れてしまつていた。それなのに謝られてはこちらの方が申し訳ない。

法子はどう返したものが分からなくて、つられて頭を下げた。

「こちらこそすみません。ごめんなさい」

こうなるともう訳が分からない。

将刀としては部外者のくせに下手に踏み込んだ事を言つて不快にさせてしまつた事に対する謝罪をした訳で、将刀は全面的に昨日の事は自分が悪いと信じている。しかも昨日のやり取りの中で法子から能動的な言動は受けていない。つまり謝られる様な事どころか、法子から何もされてない。だから何について謝られたのか分からない。将刀は少し考えて、世の中には反射的に謝つてしまう人種がいて、法子はその類なのだろうと、すぐさま見当付けたが、ではそれに対してどう返答したものかというのがまるで分らない。

一方、法子は法子で、謝つた後になつて、さっきのタイミングで謝つたのは変だったし、謝罪した理由も理解してもらえなかつただろうと反省するものの、もう一度、今度は理由も添えて謝るとするのは、どうにも気恥ずかしく、滑稽にしかならないだろうと二の足

を踏んで、押し黙る。

弟はというと、これこそ完全に蚊帳の外で、ただでさえ姉が他人と交流を持った事に驚きを隠せなかったのに、それが突然謝られ、その上謝り返すという訳の分からない状況に、とにかく呆然としてやがて世の中つて不思議だなと良く分からない感銘を持つに至る。

三人共が黙りこくり、端からは歓声。法子は形容しがたい和やかな居心地の悪さを感じた。

将刀が話題を転じた。

「お弁当持ってきたんだつたよな」

「は、はい」

「料理出来るんだ」

「え？」

出来ないとは言わないけれど、得意と断言する程の腕でも無い。

ついでに持ってきたお弁当は全て母親が作った物だ。そんな意味の事をオブラートに包んで言おうと法子が頭を捻っていると、横から弟が口を出してきた。

「出来るよ！ 無茶苦茶上手い」

「ちよつと！」

「今日の弁当も全部姉ちゃんが作ったしね」

当然嘘だ。これ以上下手な事を言うのは止めると焦る反面、何で弟はこんなに馬鹿な事を言うのだろうと疑問に思った。からかうにしてもいつもはもう少し違った角度で、端的に言えばあからさまに馬鹿にしてくるのに。

「へえ、凄いな」

弟が開いた弁当箱を覗き込んで、将刀が感じ入って呟いた。その感嘆は法子に向いているが、当の法子は幾ら褒められても罪悪と羞恥しか感じない。

その時、危ないという声が聞こえた。良く分からないまま見上げると、ボールが見えた。法子達に向かって近付いていた。

ぶつかりそうだなあと法子はぼんやりと考える。当たらないと思



つている訳じゃない。当たるとは思っているが、それを避けようとしていない。法子は危機に鈍いところがあって、咄嗟の出来事を真剣に捉える事が出来ない。

どんどんとボールは向かってきて、それにつれて法子の視界に映るサッカーボールの影も大きくなり、そろそろ当たるなと法子が思った時、突然視界一杯に影が射した。

将刀が法子の前に立ち塞がって、ボールを胸で受け止め、落ちるボールを器用に足で操って静かに地面へと下ろす。

試合に向いていた視線の内のいくつかは、将刀に驚嘆の視線を向けた。

将刀はボールを蹴り上げて手荷物と、ボールのやって来た方向へ歩いて行った。

去っていく将刀を見送って、法子が息を吐いた。

「凄いんだね」

「何が？」

「ボール受け止めたの」

「あれくらいは普通だよ」

「あんた、出来るの？」

「守るのが姉ちゃんじゃなかったらね」

弟が憎まれ口を叩いて笑った。だが法子は反応せず上の空。

「どうした？」

「今、守ってもらったから」

その法子の眩きは問い尋ねられたから答えただけの、何の感慨も籠っていない言葉であったが、弟はその言葉の中に拙い恋心を読み取った。

「へえ、成程ねえ」

「何よ」

「いや、別に？」

弟は一頻り笑ってから、尚も笑顔で、

「まあ、安心してよ。ちゃんと応援するからさ」

「応援つて？」

「姉ちゃんの恋に決まってるじゃん」

「恋つて誰との？」

「将刀さんの」

「はあ？」

法子は思わず、遠く、サッカーボールを少年達に手渡している将刀を見て、すぐに視線を逸らした。

「なんで私があいつと」

「だって、気になってるだろ？」

「そんな事無い」

そこで法子はまた将刀を微かに眺め、そしてまた視線を逸らした。法子の中に恋心と呼べる様な感情は無い。それは法子自身自覚していた。だが弟がはつきりと断言してくるので、まさかという思いが頭をかすめる。

「それに将刀さんも姉ちゃんの事、気に入ってるみたいだし」

「どこが？」

法子の目が三度将刀へと向く。将刀はこちらに戻ってくるところで、目が合いそうになって法子は目を逸らした。

「こっつのは理屈じゃないんだよ」

「はあ？」

「あのさー、姉ちゃんと喋る男なんて稀少だよ？ 他に居るの？」

「居ない……けど」

「でしょ？ そんな姉ちゃんに話しかけるって事はそれはもう惚れてるんだよ」

「訳分かんない」

「だから理屈じゃないんだって。見た目も良いし、性格もよさそうだし、運動も得意。悪いところないじゃん」

「だから？ こっちが幾ら思ったって所詮片思いでしょ？」

「だーかーらー、少なくとも無関心でも嫌ってる訳でも無いじゃん。つーことは、これから幾らでも好きになってもらえるって事でしょ

「？」

「意味分かんない」

「つまりやって見なくちゃ分からないって事だよ」

「私にはそういうの無理だよ」

「それで自分が好きで、その上自分を好きになっってくれる人を待ってる訳？」

「凶星なので、一瞬法子の言葉が詰まる。それを弟は嘲笑って、そしてふと真面目な顔になる。」

「ま、そんな訳でさ、将刀さん、良いと思うよ、俺。マジで、姉ちゃん頑張るって言うなら、俺も応援するし」

「何か心細いけど」

「おい」

「でも、何で？ 別に関係ないのに」

「将刀さん気に入った。将来、俺の兄になる男に申し分ない」

「いやいやいや。何にせよ、私はそんな気ないから」

「えー」

何故か弟と一緒にタマまで不満の声を上げる。

「なんだか腹が立って、さてどう叱ってやろうかと考えあぐねていると、将刀が帰ってきた。」

「法子は意識してしまっただけで喋れない。顔が火照るのを感じてまさか本当に好きなのかと、自分の心にどきまぎしてしまう。弟はそんな姉を見てほくそ笑みながら、どうやって二人をくっつけようかと思案する。将刀は戻ってきたばかりで、どう話をしようかと考える。」

しばらくして、三人が同時に口を開いた時、遠吠えが木霊した。

「会場中の視線が発声源へと向く。人よりも二回り大きい獅子の様な獣が二つ足で立ち上がり、大きく凶暴な顔で辺りを睨みつけていた。」

「あれ？ 法子さんじゃん」

「法子さん？」

「あんたの後ろの席の」  
「ああ、法子さん」  
「どうしたんだろう、こんな所に」  
「私達と一緒にじゃないの？ サッカー部に好きな人でも居るんじゃない？」  
「そんなキャラじゃないと思ってたけど」  
「小学生達の方に行かれますね。ご家族でもいるんでしょうか？」  
「きつとそうだよ」  
「しかし一昨日のは胸糞悪かったな」  
「一昨日の？」  
「ほら転校生の……ああ、そういえば摩子はあの時、寝てたっけ」  
「野上君だっけ？ それがどうかしたの？」  
「いや、あの転校生は別に何も。ただその周りを囲んでた、江木さんとかがさ」  
「どうしたの？」  
「いや、なんつーか、急に法子さんの悪口言い始めて」  
「マジで冷めた」  
「ね」  
「へえ、そんな事があつたんだ」  
「まあ、そんだけ。関係ないっちゃ無いけどさ」  
「あんまり気にしてもしょうがないです。今はこっちの事を……あ、抜きましたね」  
「あ！ ああ！」  
「ちよつと落ち着いて」  
「攻めてるねえ」  
「行け！ 行けえ！」  
「あ、外した」  
「あああ！」  
「うるさいです」  
「もうちよつと落ち着いて観戦しろよ」

「落ち着いてられないでしょ？ 三木君が！ 三木君の！」  
「知らないよ。あたしの目当てじゃないし」  
「摩子さんのお目当てさんはどうなんですか？」  
「えー？ 私の？ 特にいないけど」  
「ん？ だって、最近ずっと高橋君、高橋君で」  
「そうなんだけどさー」  
「ああ！ また外した！」  
「うるさい。さっき見かけたんだけど、すごい馬鹿っぽくてさ」  
「ああ」  
「やっぱり外だけ良くてもねえ」  
「そりゃそうだ」  
「いい加減決めてよ！」  
「いい加減座れよ。何にせよ、じゃあ、ついでの武志君を応援して上げなよ」  
「んー、そう思ったんだけど、さっきから全然活躍してないんだよね」  
「武志君はディフェンスで、チームがずっと攻めているのですからしょうがないのです」  
「でも折角応援しようと思ったのに……あれ？」  
「どうしました？」  
「なんだか向こうが騒がしい」  
「ホントだ。どうしたんだろう」  
「あれ、多分魔物です」  
「あ、摩子、何処行くのお？」

## 目と目をつきあわせて考えよう

「へえ、あれが魔物かあ」  
弟が背伸びをして遠くの魔物を眺めながら、酷く気楽な様子で呟いた。

獅子の頭に、人よりも二回り大きい筋肉質な肉体、両手両足には鋭く長い爪が生え、如何にも危険な様子を漂わせている。唸り声を張り上げながら、敵意を漲らせて、辺りを睨みまわしている。

魔物の周りには囲む様にして沢山の人が集っている。遠巻きにして眺めている。何処か不安そうに、されど楽しそうに、猛る魔物を囲み、ある者は語らい、ある者は感嘆し、ある者は写真を撮り、ある者はある者は笑っている。余裕に満ちた顔で不安げに楽しそうに魔物を眺めている。

彼等が魔物よりも強いなんて事はない。魔物が爪を掛ければ、それだけで命は掻き消されるだろう。それなのに彼等が逃げ惑う事は無い。

それは偏に魔物の非現実性に起因している。魔法が世界の常識となり、魔術が単なる技術に成り下がり、溢れる魔力に因って魔物の出現頻度が以前とは比べ物にならない程上昇した現在でも、実際に魔物を見た者は少ない。あくまで一般の人々にとって魔物は物珍しげなニュースでしかなく、しかもその大半はヒーローに倒されて終わる痛快な劇である。

彼等が魔物の危険を知らない訳ではない。実際に彼等は思考の片隅で、人を殺す魔物の恐怖を思い、胸を弾ませている。ただ彼等は出来ないだけなのだ。被害者が自分になる可能性をひたすら想像出来ないだけなのだ。

そんな群衆を見ながら法子は呟いた。

「あいつ等、馬鹿じゃない？ 危ないのに」

それは孤独な法子が良くやる、何の気兼ねも無い、誰に聞かれる

ともない呟きだったが、悲しい事に今日は久しぶりに家族以外の人間が近くにいた。

言ってから数瞬経って、初めて自分が暴言を吐いた事に気が付いて法子は身を固くする。法子の目が恐る恐る将刀に向くと、それを待っていたかのように将刀が笑った。

「じゃあ、弟を連れてあんたも逃げれば良いんじゃないか？」

その皮肉な言葉に苛立って法子は顔を背けた。先程ちよつと良いなと思ったらこれだ。侮蔑の籠った言葉は法子にとって馴染みの言葉である。けれどいつまで経っても慣れる事は無い。恥ずかしさと悔しさの混じり合ったひたすら不快な思いが胸に湧く。やっぱりは人と関わるのは嫌いだ。そう思って不満げな顔で俯いた。

一方、将刀はほんの軽い気持ちの言葉が何だか法子を気落ちさせてしまった事に気が付いて当惑した。

二人が押し黙る。傍から見えていた弟は、空気の悪くなった二人の間を取り持とうとして、明るい声を掛けた。

「なあ、もっと近くであの魔物を見ようよ」

その途端に二人は顔を険しくさせて諫めの言葉を吐く。

「駄目！ 危ないって言ったでしょ」

「駄目だ。危険すぎる」

息の合う二人を前に、弟は微笑して、尚も明るい調子で言った。

「そんな事言ってもここだって十分危ないよ。そんな事言うなら早く逃げようぜ」

弟としては二人を連れだして、後は自分がかくれるなり何なりして、二人つきりにしてしまおうという作戦だったのだが、

「え？ ……つと」

法子は気乗りがしない様で言い淀む。弟は残りたそうにしている法子を不思議に思った。

逃げてしまつては闘う事が出来ない。

「ねえ、タマちゃんどうしよう」

タマに頼って尋ねると、タマは少し考える気配を見せてから、答

えた。

「はぐれば良いんじゃない？」

「はぐれる？」

「だから一緒に逃げるふりをして途中で抜け出せば良いんじゃないかな？」

「そつか。それもそうだね。流石タマちゃん！」

「ちよつとは自分で考えなさいな」

頭の中で会議を終えた法子は、途端に笑顔を二人に向ける。

「分かった。じゃあ逃げよう」

気乗りのしない様子だった法子が突然笑顔になった事で、二人は不審がり、特に弟の方は久方ぶりに見た姉のあまりにも晴れやかな表情に気持ち悪さを感じた。硬直している二人を置いて、法子は早速土手の上へと上がる。遅れる二人は一瞬顔を見合わせてから、不思議そうな表情で見つめ合い、それから法子の後を追った。

土手の上にも沢山の観客が居た。こちらの観客達は、魔物から離れているし、暴れ出してもまず殺されるのは土手の下で魔物を遠巻いている人々だろうと信じて、あからさまに余裕の表情を浮かべている。

法子は何となくそれらの顔が鼻についたが、それよりもはぐれる事の方が大事だと、機を見計らう為に集中し始めた。

一方で弟の方は法子と将刀のちよつと後ろを歩きながら、自分のはぐれる事で法子と将刀を二人つきりにする機会を窺っていた。それは直ぐにやって来て、人口密度の高い場所に差し掛かった拍子に、弟は勢いよく別方向へと駆け出した。人にぶつかるのも構わずに駆け抜けて、しばらく経ってから振り返る。二人が一緒に歩いている所を見たかったのだが、視線の先には乱雑に立ち並ぶ人ばかりだけで、姉と兄予定の姿は見えなかった。

「ま、いつか。上手くやってくれよ、姉ちゃん」

弟がそう呟いた時、全く別の場所で法子もまたはぐれていた。

「もう無理。もう走れない」



「うん、もう止まって大丈夫」

タマの言葉を合図に立ち止まった法子は、肩で荒く息をしながら、上手くいった事にほくそ笑む。丁度、人だかりの多い場所に差し掛かったのは運が良かった。弟の事が少し気になるが、将刀がきつと家まで送り届けてくれるだろう。そんな事を考えて、安堵すると、まだ息も整わぬうちに、タマへと尋ねかけた。

「それじゃあ、早速変身しよう」

「それは良いけど。良いのかい？」

タマが尋ね返してきた。法子にはその意味が分からない。

「何が？」

「辺りに結構な数の人が居るけど、魔法少女だってばれて良いのかい？ 流石に変身するところを見られたら正体がばれるよ」

「あ」

法子が辺りを見回すと、確かに多くの群衆が居る。そのほとんどが魔物を見つめて、目を逸らす様子は無いが、中には別の場所を向いている者も居るし、いつなんどき注目されるか分からない。

「どうしよう」

「自分で考えなっつて」

「でも」

法子はまた辺りを見たが、人目を阻めそうな、変身に適した場所は無い。

「どうしよう。人に見られない場所なんて無いよ」

「いやいや、あそこに丁度良い建物があるだろう」

タマの意志に促されてそちらを見ると、確かに小さな建物がある。だが法子はその建物をあえて無視していた。

「やだよ、あれトイレだもん」

「ああ、そうなのか。でも別に良いじゃないか」

「いやー。汚い！」

「そんなに汚く見えないよ。うん、大丈夫」

「トイレで変身する魔法少女なんて嫌！」

「そんな事を言っただって他に無いだろう。減るものでもないし大丈夫」

「プライドが減る！」

「文句があるなら代案を出してくれ」

「うう。でもさ、例えば私がトイレに入って、その後に変身した私が出てきたら、それを見ていた人にはれちゃうかもよ？」

「その点は安心してくれよ。前にも言っただけだけど、変身さえすれば、例えどんなに怪しい状況だろうと変身前と変身後が結び付けられる事は無い」

「むう」

遂に退路は極まって、法子は渋々と言った様子でトイレへと歩み始めた。

「魔法少女がトイレ……か」

「嫌なら魔法少女を止めるかい？」

「やだ。続ける」

法子がトイレに入って十数秒、トイレの中から魔法少女が現れた。突然の魔法少女の出現に人々は好奇と期待の視線をその魔法少女へと注ぐ。沢山の視線に晒された魔法少女の表情は晴れやかな笑顔だったが、少しだけ悲しげだった。

法子が恰好を付けて跳び上がり、人々の頭を越えて再び魔物の居るコートへ戻ると、事態は全く変化していなかった。

相変わらず魔物は唸り声を上げるだけ。観客達は楽しそうにそれを取り巻き、写真を撮っている。凄惨な様子はまるで無い。

「何だかほのぼのしているんだけど」

「そうだね」

「襲つたりとかしないの？ あの魔物」

「まあ、魔物の考えは一つじゃないからね。あいつは別に人を襲おうと考えている訳じゃないんじゃないかな？」

法子の表情に微かに困惑が浮かぶ。

「じゃあ、良い奴なの？」

「良いも悪いも無いけれど。何にせよ、魔物は追い返さなくちゃいけない。前にも言っただろ？ 魔物って言うのは居るだけで場を汚染する。それが魔導師を呼び出して、魔導師が場を聖別して、最後に魔王が出現する。とにかく居るだけで悪い影響を及ぼすんだ」

「そついえば言ってたね」

「これ位、魔術に携わる者なら知ってて当然だと思っただがね」

「だって学校で習ってないもん」

溜息を吐いたタマを無視して、法子は剣を抜いた。周囲からおおという歓声上がる。

ちよつと気分を良くした法子をタマがたしなめる。

「気を付けるよ法子。あれは魔導師だ。どうやらこの辺りは大分汚染が進んでいたらしい」

「魔導師って強いのか？」

「少なくとも普通の魔物よりは。周囲の汚染された魔力を吸い上げるから、魔力の量は桁違い。それにほとんどが固有の力を持っている」

「成程ね。一筋縄じゃいかないんだ」

「ああ、けど今は出現したばかりでまだまとまと動けないはずだ。だから倒すなら今」

「そうなんだ。じゃあ」

「その前に、とりあえず君の力で解析してみたらどうか？ それで大体分かるだろう」

促されて法子は魔物を見た。敵として認識する事で、解析が始まる。

『ウォークキャット』

魔界のキュートな子猫。今流行のレトロなガールースタイルは女の子必見。

ちよつと長いこの爪で遠くの彼を引き裂いちゃいます。

Style：ガリー&キュート

性格：おちゃめ

彼氏：遠距離恋愛中

基本：正統派女の子<sup>『</sup>

解析が終わった法子は呆然とした。

「何これ？」

「いや、そう言われても」

「意味は分かるけど、意味わかんないよ。っていうか、女の子なの？ あれ」

「それはそうだろ。どう見ても。法子は異種族の性別はあまり分からないのか？」

「分かんないけど。それより今のは何？ また妨害されたの？」

「とりあえず意味は分かるんだろ？」

「分かる事は分かるけど。でも今のは絶対に変だった」

「なら中途半端に妨害されたんだろう。前の魔法少女みたい滅茶苦茶な情報にならなかつたって事は、恐らく君よりやや格下の実力なんだろうな」

その言葉で法子の顔が輝いた。

「じゃあ、あいつ私より弱いのか？」

「ああ」

「よっし！ そうと決まれば」

法子は剣を腰に据えてウォークキャットへと向かう。

「あ、おい、ちよつと待て」

諫めようとするタマの言葉も聞かずに法子は走る。

ウォークキャットは腕をだらりと下げて、尚も雄叫びを上げている。法子を見る様子すら無い。

行ける。と確信した法子は剣を力強く握り、ウォークキャットの目前で力強く大地を踏み締め、その刃に魔力を通し、

「防げ！」

タマの思念に反応して法子は咄嗟に刀を止めた。刹那、巨大な衝撃

を受けて法子は跳ね飛ばされた。

着地した法子は理解する。法子がウオークキャットの目前に迫った瞬間に、ウオークキャットが垂れ下げていた腕を振り上げて法子を跳ね飛ばしたのだ。刀が先に当たったお蔭で飛ばされるだけで済んだが、そうで無ければ爪によって切り裂かれていた。

「大丈夫か？」

タマの言葉に法子は頷いた。

周囲から喝采が湧いた。どうやら法子とウオークキャットの戦いを面白がっているらしい。法子は自分に注目が集まる事を嬉しく思う反面、危険な戦いなのに楽しむ観客を忌々しく思った。

法子が苛々としてしていると、頭の中にタマの小言が響いた。

「あのな、幾ら相手の力量が下だからって、攻撃してこない訳でも攻撃をくらわない訳でも無いんだ」

「分かってるよ、そんな事」

法子はタマの換言に不機嫌な調子で答える。

「分かっているなら良いんだけどね。それでどうするんだい？」

「どうすれば良いの？」

法子が更に不機嫌な調子になって尋ね返した。

「は？」

流石にタマも啞然とする。

「私は戦いの事なんて分からないもん。タマちゃんの方が詳しいでしょ？ どうすれば良いの？」

「いや、もつと自分で考えてくれよ」

「分かんないよ。良いから教えてよ。どうすれば良いの？」

タマは一度溜息を吐いて、

「甘やかしすぎたかな」「うるさい」

沈んだ調子で答えた。

「良いかい？ 今度だけだよ」

「はいはい」

「まあ、見た所、相手は接近戦が得意みたいだ」

タマがそう言った途端、ウオークキヤットが腕を振り上げた。嫌な予感がして、タマの思考が止まる。

続いて、ウオークキヤットは腕を振り下ろした。タマの中の嫌な予感が加速する。

「とにかくこの場から離れる！」

タマの叫び声が法子の頭に届いた後、一拍遅れて法子はその場から飛びのいた。法子が一瞬前に居た場所がひずんだ。何も無い空間に爪痕状のひびが入り、まるでガラスでも割れるみたいにはじけ割れた。

「何？ 今の」

「おそらくあの魔物の能力、というか技だろうね。離れた空間に自分の爪を届かせるんだ」

ウオークキヤットがまた腕を振り上げた。法子は狙いを定めさせない様に動き回りながら反撃の機会を窺う。

「それで？ 向こうは接近戦だけじゃなかったみたいだけど」

「ああ、そうみたいだね」

「どうすれば良いの」

「はあ、ホントちょっとは自分で考えてくれないかな」

「良いから」

「君さ、昨日覚えた事も忘れたの？」

「昨日？ あ」

昨日教わった遠距離まで届く剣撃。確かにあれを使えば近寄る事無く相手を切り裂ける。

「でも相手も同じ様な事やって来るけど勝てるかな」

「実力は君の方が上なんだ。同じ事をすれば勝てる」

「そっか」

法子は笑って刀身に魔力を込め始めた。昨日覚えたての新しい技。新技のお披露目だ。出来れば派手に、カッコ良く決めたい。そう、漫画で良くある様に見開きの大ゴマを使う位のど派手さで。

「良いかい？ 狙いは正確に。辺りには人が居る。絶対に当てちゃ

いけない」

「分かつてる。昨日たくさん練習したもん。はずさないよ」

法子は尚も笑って魔力を込め続ける。だがほんの僅かに緊張がよぎった。当てる自信はある。はずすとは思えない。けれど失敗してはいけないと思うと、何だか薄ら寒い気持ちになった。

法子は走り回り、跳び回りながら機を窺う。しばらくして狙いをつけ損ねたウオークキャットの腕が止まった。好機とばかりに法子が込めた魔力を斬撃に換えて、ウオークキャットへと打ち放った。

「馬鹿！」

斬撃は過たずウオークキャットを切り裂いて、法子はほつと安堵する。ウオークキャットは完全に切り裂かれ、胸と腹が分かれたれ、体の右端が辛うじて繋がっているだけとなった。

安堵した法子の視線の先で、ウオークキャットの体はずれ落ちながらゆっくりと倒れていく。

「やった！」

「良い訳あるか！」

「な、何で？」

困惑する法子の視線の先で、ウオークキャットはゆっくりと倒れ伏す。倒れた瞬間に土埃が舞い。すぐに風に運ばれていく。土埃が消えた向こう、血を噴き出して倒れるウオークキャットの向こうに、観客が居る。

「強く打ち過ぎだ、馬鹿者」

観客の中に子供が居る。血を流して倒れている子供が居る。

「あ」

倒れた子供の血だまりはどんどんと広がっていく。泣き声が聞こえる。母親らしき人物が泣きながら子供の傍らに座って何かを叫んでいる。周りの人々が子供の元へ集まっていく。

やがて子供は担架に乗せられた。緊張した空気の中、群衆が割れて、子供は輪の外へと運ばれていく。まだ救急車は来ていない。どこかで応急処置をするのだろう。生死の境は時間に依って区切られ

ている。

運ばれていく子供の傍を母親が泣きながらついていく。そのまま子供と共に群衆の向こうに消えるのかと思いきや、ふと母親が顔を上げて法子の事を見た。燃える様な目付きだった。怒りと悲しみと悔しさと恨みの籠った母親の痛々しい視線に晒されて法子は思わず目を逸らした。

逸らした先の観客達もじっと法子の事を見つめていた。

視線を逸らす、その先にもまた目が。目が。目が。目が。沢山の目が法子の事をじっと見つめていた。



そして誰もいなくなる

人通りの無い道に法子は着地した。そこで力尽き変身を解く。闇夜に溶ける様な衣装は、私服となる。法子は汚れる事も構わずに道の上で跪き無念そうに項垂れた。

結局あの後、子供を切った法子は再び戦う気力を湧かせる事が出来ず、魔物の方もまた深手に動く事が出来ず、膠着したまま、ただ周囲だけがざわついていて。そこにあの法子を負かした魔法少女がやって来て、魔物を送還して喝采を浴びながら帰っていった。

法子は、魔物と魔法少女が消えてからしばらくの間動けずに呆然と何処でもない何処かを見つめ続けていたが、タマの言葉に促されて立ち上がり、取り囲む群衆の頭を越えてその場を離れた。

離れる際に、悪罵の声が響いたが、心あらずの法子にはその言葉は聞こえず、されど悪罵は法子の耳に届いて確かに心を抉った。

そうして帰る途中、精神と魔力をすり減らし切った法子は遂に力尽きて変身を解いた。誰も居ない闇夜の中で、街灯の頼りない硬質な光に照らされて、法子は呆けた調子から立ち直れずにぼんやりと呟いた。

「何でこうなっちゃうんだろう」

誰にともなく吐き出した呟きは風に紛れて消えていったが、タマだけは聞いていた。けれどタマは答えない。今は傍観に徹し、法子に成長してもらおうと考えていたからだ。自分で答えを見つけて自分で先に進む。法子はまずその当たり前の事が出来る様にならなければいけない。タマはそう考えていた。

今迄タマが変身させてきた者達は皆耐え難い情動を変身の核に据えていた。ある者は復讐の為に、ある者は友を助ける為に、ある者は一族を再興する為に。だからこそその目的の為に皆必死になって変身し目的に邁進した。一方法子の情動はと言えば、きつい言い方をすれば子供の気まぐれの延長である。その理由が悪い訳ではない

が、必死になれないのであれば、やはり問題がある。

このままいけば、法子はタマが支えていなければ歩けない人形になっってしまう。

「結構さ、頑張ったんだよ。私にしてはかもしれないけどさ。魔法少女になれて嬉しかった。だから一所懸命頑張つてさ、でも全然上手くないんだもん。なんでだろうね」

法子が引きつった笑いを浮かべる。タマはそれに何も答えない。

「今日なんてあの子を」

一瞬言葉が途切れた。法子の目から涙が零れ落ちる。

「どうしよう、人切っちゃったよ」

法子が必死に目を擦る。泣きじゃくる。

「死んじゃったらどうしよう」

法子は自分の手を見つめた。直接切った訳ではない。それでも何故だかその手には切った時の感触が残っていた。生温い柔らかい物を切る感触。それは単に料理の際に包丁で鶏肉を切った感触を思い出したものでしかなかったが、今だけは確かに子供を切った感触でそれを感じ続けている内に、自分の頭が狂っていく様な気がした。法子は思わず頭を振って、手の感触を払いのけようとする。

タマは何も言わない。法子が人を殺したとしてもどうこう思わない。今迄の契約者の中にも人殺しは幾人か居た。法子がどんな事をして、どんな法律を破り、どんな倫理観を蹴り飛ばしても、タマはそれを悪い事だとは思わない。

「ねえ、タマちゃん、私どうすれば良い？」

ただこれだけはやめてくれと思う。法子はどうしてこんなにも頼ろうとするのだろうか。今迄一人ぼっちだったから、それを埋めた相手に殊更依存しているのだろうか。それなら下手に励まそうとしてきた事は失敗だったのか。

悶々としつつ、タマは答えた。

「さあね。それは君の問題だろ？」

「冷たい」

法子の沈んだ言葉に苛々してタマは怒鳴った。

「勝手にしろよ！」

法子の呼吸が止まる。

「何でそうなんでもかんでも私を頼ろうとするんだ！」

言い切ってからタマは言っちゃったなあと思った。多分法子は傷ついただろう。それでも自分の欠点に気が付いてくれれば。そう期待してタマが法子の言葉を待っていると、やがて法子が言った。

「……ごめん」

そう謝った。まだ何か言いたそうにしている。タマはもうしばらく待つ。これから頼りつきりにならない。もつと自分の頭で考える。そう言ってくれるだけで良い。そんな言葉を待っている。

けれど法子の言葉はタマが期待したものとまるつきり違うものだった。

「……私、魔法少女辞める」

「は？」

「だって、私、何やつても上手くいかないし、これ以上続けても良くなるなんて思えないし、自分で考えてなんて出来ないし、それに……それに人……切っちゃって、何だかやになっちゃった」

タマは絶句した。本気か？ 一瞬、何か意志伝達の魔術に不具合でもあるんじゃないかと疑う位に、信じられなかった。

「だから魔法少女辞めたい。……あ、勿論、ずっとって訳じゃないと思うけど、多分またやりたくなるだろうし。でも……しばらくの間は魔法少女……辞めたい」

法子が遠慮がちに伝えてくる。その思念を受けて、タマは駄目だと思った。

こいつは駄目だ。

「ね？ だからしばらくの間だけ」

「分かった」

「ホントに？」

「ああ。君との契約は打ち切ろう」

「うん！ ありがとう」

嬉しそうに言った法子へ、タマは溜息を伝える。

「やっぱり甘やかしすぎた」

申し訳なさに身を縮こまらせる法子へ、タマは尚も伝える。

「あんまり甘やかすのは良くないみたいだね。次の参考にさせてもらおうよ」

「う、うん。きっとまたすぐに元気になると思うから、その時に、ね」

タマが不思議そうに尋ねた。

「その時？」

「え？」

「どうして君は次があると思っているんだい？」

「だって……タマちゃんが次の参考につて」

「私の次つて言うのは次の契約者つて意味だと思わないのかい？」

法子の思考が止まる。

「何か勘違いしてないかな？」

「勘違いつて……」

「私は人を変身させる使命を持っているんだ。変身しない人間の傍に居続けるなんてあると思う？」

法子が手に握るタマを驚愕の目で見つめた。

「で、でもタマちゃん」

「君が私の事を友達だろうと何だろうと思うのは勝手さ。私だつてそういつた関係になる事にやぶさかではないよ。けれどね、いの一  
番はまず契約なんだ。一緒に居る者は契約者じゃなきゃ意味が無い  
んだよ」

「タマちゃん待つて」

「それで君が私との契約を止めると言うのなら」

「違うよ。ほんの少しの間だけで」

「同じ事だよ。君は契約者じゃなくなるんだから」

「タマちゃん、分かった。私が間違つてた。魔法少女辞めないから、

だから」

必死に縋る法子をタマは冷徹に振り払う。

「君はヒーローになる事を望んでいたね。けれど今の君の姿はヒーローから掛け離れすぎている」

「ごめん、タマちゃん、ごめん」

「君の言葉にも一理あるよ」

皮肉気な笑いを伝えながら、止めの言葉を放つ。

「これ以上続けても良くなるなんて思えない。全くその通りだ」

タマと法子の繋がりが途切れた。意志伝達の魔術が途絶え、今迄伝わって来ていた相手の精神が伝わらなくなって、法子は狂わんばかりに剣の形をしたアクセサリーに縋る。

「ごめん。ごめんタマちゃん。待ってよ。嫌だよ」

その時、忍び笑いが聞こえてきた。

振り返ると、二人の女性が法子を横切る所だった。いつのまにか現れた通行人は法子の奇態を見て不気味さ半分おかしさ半分で、気味の悪い物を見る様な目をして笑っていた。目だ。また目が法子の事を見つめている。

法子は恐ろしさに駆られて、その場を逃げ出した。

しばらく走って公園に着いた。あの四方を取り囲まれた誰も来ないはずの公園だ。まさしく、今その公園には誰も居なかった。

ブランコに座って、法子はまた剣の形をしたアクセサリーに目を落とす。

許して欲しい。また話して欲しい。けれど幾ら謝っても答えてくれない。タマちゃんは完全に怒ってしまった。ならどうすれば良い？ タマとの最後のやり取りを思い出す。タマちゃんが望んでいたのは、私がヒーローになる事だ。私がヒーローになればきっとタマちゃんは許してくれる。

一瞬湧きかけた希望は、すぐさま、けれど、と沈められた。けれど私はヒーローになれなかった。強くなろうと頑張った。人を助けよう頑張った。けれどそれをした結果が、今なんだ。ヒーローに

ならうとしてもなれなかつたんだ。ならどうすれば良い？ どうすればヒーローになれる？

「分かんないよー」

法子が情けない言葉を吐きだして、ブランコをこぎ始めた。

出来れば誰かに教えて欲しい。けれどいつも教えてくれたタマちゃんはまだ居ない。相談出来そうな友達だっていない。

ふと最近話しかけてくれた人の事を思い出した。そうしてどうして自分がこの公園に来たのか何となく悟った。いつもこの公園にやって来る転校生。けれどその転校生も来る気配は無い。

思い出してみれば、あの将刀という転校生はいつも憎まれ口ばかり叩いてくる。今日だって私の事を軽蔑していた。そう考えると話しかけてくれては来たけれど、きつと本当の所は私の事を嫌いなんだろう。当たり前だ。私に好意を持つ人なんて居る訳が無い。

後は家族。けれど家族だって、もし家族じゃなければきつと私の事を相手にはしないだろう。特に弟なんて私の事を特に嫌いそうだしと家族は、家族という繋がりでしか繋がっていない。いや、もしかしたら、辛うじて繋がってはいるものの、いつも私の事を邪魔だと思っているのかもしれない。

そう考えていくと、誰も居なくなつた。法子が相談できる相手は居なくなつた。

法子はブランコを強く漕いで、流れる涙を風で堰き止めようとした。勿論、そんな事で涙が止まる訳が無く、後から後から流れてくる。

一人ぼっちなのはずっとだった。だからいつもの日常に戻つただけなのだ。今迄だって一人ぼっちを寂しいとは思いつながらも、嫌だと思いつながらも、それでも何処か慣れた自分が居て、一人ぼっちでも平気だと思つ自分が居た。

だからおかしかつたんだ。私に話し相手がいるなんて。タマちゃんとお会つたこの数日間だけが異常だつたんだ。また元に戻るだけなんだ。昔と同じになるだけなんだ。けれど、それでも、その異常

な数日間が　この上の無い幸福感を感じた数日間が、確かに法子  
を変えていて、一人ぼっちな自分を思うと死にたくなるくらいに、  
嫌になった。

## 誰も見えない孤独な日常

朝起きて、いつもの通り用意をして、剣の形をしたアクセサリーを手にとって、アクセサリーから流れて来るはずの精神が感じ取れなくて、そこでようやくはつきりと覚醒した。昨日の事を思い出して、朝の清々しい気持ちから急転直下、鬱々しくなる。

幾ら話しかけても答えてくれない。何度謝ってもうんともすんとも言ってくれない。悲しくなって目に涙が浮かんだ。

昨日、あの公園からどう帰ったのかあまり覚えていない。泣きながらブランコを漕いでいたところまでは憶えているのだが、それ以降は曖昧だ。多分放心しすぎて、無意識の内に帰ってきたに違いない。

結局、タマは法子と繋がってくれなかった。タマはただのアクセサリーになった。

憂鬱な気分を強くして外を見ると、晴れ晴れとした青空が広がっていた。外はあんなにも明るいのに、自分の心はなぜこれほどに暗いのか。

溜息を吐いて、昨日の事に思いを巡らせて、子供を切った事を思い出して、吐き気がした。近くのビニール袋を急いでとって、その中に口を突き出す。幸いにも涎が少し垂れただけで、吐瀉する事は無かったが、何だか酸っぱい味が口の中に広がって、気持ち悪くなった。

切った。人を切ってしまった。大きく広がった血だまりが思い出される。慌ただしく運ばれていく子供が思い出される。自分に向けられた恨みがましい目が思い出される。

殺してしまった。人を殺してしまった。そう思うと更に気持ち悪くなった。涙は出ない。ただ吐き気が酷い。頭が痛い。壁にぶつかりたくなった。体を傷つけたくしょうがなくなった。我慢できなくなつて、思いつきり頭を後ろに引いて壁にぶつける。ぶつけると



後頭部に最初は生暖かい張り締める様な感覚。それがやがて鈍い痛みに変わっていった。けれどそれで何が変わる訳でもない。心も全く晴れない。

虚しいだけだった。

部屋を出て一階に下りる。この期に及んで日常生活を送ろうとする自分が浅ましく感じられた。制服を着た自分が何だか許せない。けれど日常生活を捨てる勇氣は、法子に無かった。

リビングに入ると、弟は既に朝ごはんを食べ終わっていた。

「おはよう、姉ちゃん。昨日はどうだった？」

弟の質問は姉が将刀と上手くやれたか気になつての言葉だったが、法子には人を切った記憶が喚起された。顔を俯かせる。答える氣力は無い。

弟はそんな姉を見て、どうやら将刀と上手くいかなかったらしいと早とちりして、話題を変える。笑顔を向けて、楽しそうに語る。

「そっぴや、あの魔物騒ぎ大変だったみたいだよ」

だが法子の反応は無い。その事に焦つて、弟は更に朗らかに言った。

「何だか、怪我人も出たらしくてさ。幸い生きてるみたいだけど、やっぱり姉ちゃんの言った通り、危ないんだな。姉ちゃんが止めてくれて助かったぜ」

そこでようやく法子はのろのろと顔を上げた。

「生きてるんだ」

「え？ うん、意識も取り戻したとか何とか、さっきニュースで言ってたよ。もしかしてその場面、姉ちゃん見てたの？」

「うん、ちよつとね」

法子が元氣無さそうに答えるので、弟はそれ以上話題にするのを止めた。きつと姉は怪我人が出たところを見てしまつてショックを受けているのだろうと思ひ、無神経な話題を反省した。

「じゃ、俺もう行くから」

弟は氣まづくなつて、法子の脇を通り抜け、出て行つた。

残された法子はほつと安堵した。どうやら一命は取り留めていたようだ。人殺しにならなくて済んだ。応急処置を施した人や病院の人達に感謝する。

だがすぐに自分を戒めた。切った事には変わりない。命が助かったとはいえ、傷付けたのは確かなのだ。罪が軽減される事は全く無い。一步間違えれば死んでしまっていた以上、人殺しの称号が晴れる事は無い。

「いやー昨日は怖かったな」

「ねー」

「そういや、あの切られた子、どうなったんだらう?」

「助かったみたいですよ」

「そうなんだ。良かったな」

「おっす」

「お、武志、おはよー、残念だったね。試合中止になって」

「別に大した大会じゃなかったから。楽勝過ぎてつまんなかった。

それよりお前等は大丈夫だったのか?」

「ああ、あたし達はね。近付かなかったし。摩子なんて真っ先にどつか行っちゃうし」

「だって怖かったんだもん」

「友達のあたし達を置いていくなんてねえ」

「薄情ですねー」

「だからさつきから謝ってるでしょ。もう」

「分かってるよ。あたしもむっちゃ怖かったしね」

「私も腰が抜けてなかったら逃げてたよ」

「そっかお前等が無事だったなら。良かったよ」

「武ちゃん、もしかして心配してくれてたの?」

「当たり前だろ……特にお前は一応幼馴染だしな」

「愛だねー」

「愛だねー」

「愛ですなー」  
「うっせえ」  
「ありがとね、武ちゃん」  
「え、いや、別に。じゃあ、俺行くから」  
「愛だねー」  
「愛だねー」  
「愛ですなー」  
「だからお前等うっさい」  
「行っちゃった」  
「ホント可愛い奴だな、あいつは」  
「あ、そういえば」  
「どうした？」  
「昨日法子さんも居たけど、大丈夫だったかな？」  
「あー、そういえば、丁度魔物が現れた小学生の部に向かったからなあ」  
「でも、あの怪我をした子の他に、特に怪我人は居ないみたいですし、大丈夫だったんじゃないですか？」  
「うん。でもまだ学校来てないし」  
「いやに気にするね」  
「思い出してみれば、法子さんていつも一人だったでしょ？」  
「それが？」  
「何だか寂しそうにしてるし」  
「まあね」  
「きっとグループが固まっちゃってるから溶け込みづらいんじゃないかなと。ほら、女の子って一度グループ作ると入れ変わり辛いでしょう？」  
「そうかもしれないけど。それがどうしたんですか？」  
「うん、だからさ、私達の中に入れてあげられたらなって」  
「お節介な気がするけど」  
「入れてあげるっていうのも、何だか上からですし」

「そうかもしれないけど、でも」

「まあ、良いんじゃない？ とりあえず話しかけてみたら？ 嫌そうなら、それつきりにすれば良いし、嬉しそうにしてくれたら、その時は仲良くなれば良いんじゃない？」

「そうですね。友達になれたらそれは良い事です。いつも本を読んでいるし、何だか私と話が合う気がします」

「だよ、だよね！」

「まあ、摩子がしたいなら、したいようにすれば良いんじゃない。あたしは別にどっちでも良いし」

「うん、じゃあ、早速話しかけてみるよ！」

「お、噂をすれば」

「とりあえず無事だったみたいですね」

「ほら行ってきな」

「うんじゃあ、行って……」

「あ、待って。何だかすげえ落ち込んでるな」

「そうですね」

「もしかして昨日怪我したのって法子さんの知り合いなんじゃ」

「そうなのかも」

「あれは話しかけちゃまずいよね」

「少なくともあたしなら話しかけない」

「だよ、今は止めとくか」

法子が酷く沈んだ様子で入って来た時、その様子にクラス中のみんなが注目した。そしてほとんどが早とちりする。法子さんが落ち込んでいる。あれはきつと一昨日の悪口を本当は聞いていたからに違いない。悪口を実際に言っていた者達は何も感じず無遠慮な視線を投げかけたが、それ以外の者達は何だか申し訳なく思っ、すぐに目を逸らした。

法子はそんな形で注目を浴びている事なんて全く気が付かずに、ひたすら下を向きながら自分の席についた。すぐに教師がやって来

て、学校が始まる。

法子はいつもの様に俯きながら学校生活をやり過ごす。だがタマと出会う前の諦念と羞恥の入り混じった無心に近い心ではいられなかった。タマという話し相手が居たという事実は決して心から離れる事は無く、本を読んでも頭に入らず、寝ようとして周りの音が大きく聞こえる。孤独が酷く浮き上がって、法子は涙が出そうな位に悲しくなった。

話したい。話し相手が欲しい。タマちゃんに戻って来て欲しい。そう考え続けているのだけれど、そんな切なる願いもまた自分が一人ぼっちだと実感する為の材料にしかならず、法子はひたすらタマが戻ってくる事と今日という日が過ぎる事を祈りながら、俯いて学校生活を送り続けた。

時は進み帰りの時間にさしかかり、最後の閉門ホームルームが始まった。それも教師のちよっとした話が終われば解放される。そう考えて、法子は早く帰りたいたいと思いつけたが、事はそう上手くいかなかった。

「あ、そうだ、学園祭ももう一週間前だ。お前等そろそろ準備しとけよ」

教師がぶっきらぼうな調子でそう言った。

法子は嫌なイベントが迫って来たなとやさぐれた気持ちになった。今の最低に沈んだ気持ちで孤独な学園祭を迎えたら死んでしまうのではないだろうか。

「出し物は前に決めたよな。えーっと……何だったかな？」

教師の恍けた発言に、周囲が一斉にカフェだと突っ込む。法子にはその予定調和なやり取りがうっとうしくてたまらない。

やさぐれている法子を余所に、学園祭の話がどんどん纏まっていく。中にはめんどくさそうな人も居るけれど、その人も含めてクラス全体は楽しそうに、学園祭に向けてはしゃいでいる。

ただ一人自分だけが何も喋らずに一人ぼっちで俯いている。本当は周りと同じ様に楽しくやりたいのに。本当は周りの人達と親しく

したいのに。

いつもクラス一丸となる様なこつこつたイベントは嫌で嫌で仕方が無かったが、今日は何だかいつもより色々と考えてしまう。どんどんと嫌になる。その原因であるタマの失踪を思うと、更に嫌になった。

法子は文化祭に向けたやり取りを聞きながら胸の奥に何か重い者が詰まっていく様な心地がしていた。

きっと私がこんな風にみんな楽しんでる事なんて一生ないんだろっな。

## 英雄になりたくて

時は早いもので、ついこの間、一週間前に迫ったと謳われていた文化祭がもう明日に控えていた。法子のクラスの準備は着々と進み、既にほとんど出来上がっている。先程看板を作り終えて、後は片づけをしつつ、残りのこまごまとしたところを飾り付けているところだ。

この一週間、法子の心境も様々に変化した。法子の様子は以下の通りとなる。

初めの二日はひたすら落ち込むだけだった。初日はあのホームルームが終わった後、ずっと暗澹とした想像をしながら、自分の駄目さ加減を呪って、家に帰り、何もする気が起きずにそのまま寝た。二日目、ほぼ初日と一緒だが、ホームルームが終わった後に学園祭の準備があつた。ほとんどクラスとの繋がりが無い法子はまともに立ち動く事も出来ず、ほとんど役に立つ事が出来ず、辺りをうろろしながら、手持無沙汰に仕事をしているふりをしていた。クラスの意見は、この前の陰口で傷ついたから仕方が無い可哀そう、やっぱりあいつは役に立たないクラスのゴミという二つに分かれた。それらの評価はほとんど法子に届かなかつたが、最後の最後、丁度帰ろうとした時に、あいつ本当に使えないな、そんな言葉が聞こえて法子は思わず振り返ってしまった。意地の悪そうな顔達が法子を見て笑っていた。法子は逃げる様に走って帰った。何もする気が起きずそのまま寝た。

三日目、タマを失って沈む気持ちに加えて、更に学校に行きたくないという憂鬱までが混じって、朝からどん底に陥っていった。だが底まで来たのなら後は上るだけで、登校している内に法子の心境に明確な変化が表れる。前日まではタマの事を考えても、ひたすらタマが居ない事に沈むだけだったが、その日はどうすればタマは戻って来てくれるだろうと前向きに考える様になった。必死に頭を働

かせてタマとの会話を思い出しながら、タマが戻って来てくれる為の方法を考えて、学校に着く頃になってとりあえず自分の欠点を直していこうと結論付けた。欠点とは何か。それこそ数えきれない位にあるのだが、法子はその中で一番気にしている事、非社交性を治そうと考えた。そうだ、クラスの人と話してみよう。私が他の人と喋れる様な位にまともになったらタマちゃんは戻って来てくれるかもしれない。まずは挨拶を。心に久しぶりの火を灯らせて、教室のドアを開き、そうして大きく息を吸って、大きな声で朝の挨拶を言い放とうとして　結局声を出せずに自分の席へと座った。駄目だった。話そう話そうと強く思うのだが、実際に行動に起こす事がまるで出来ない。結局、何度も話そうとしては諦めて、放課後まで誰とも話せなかった。学園祭の準備では相も変わらず積極的な参加は出来ないが、せめて少し位は役に立とうと、前日よりは大分働いた。だが頑張ったところで、端から見れば結局少し役に立った位であり、ついでに手伝いの中で相手から話しかけられても法子は喋る事が出来ずに黙っていた為に、クラスの評価は前日より更に明確に分かれた。辛い事があったのに頑張ってくれている。今更何やる気出してんだよ。同情と嫌悪の割合は全く変わらないが、前日よりも法子に注目する人数が増えて、評価は両極端になった。教室から向けられる二種類の視線。法子がかもしその視線に気付いたらいつもの如く後ろ向きに捉えて落ち込んでいたであろう。だが幸いにも法子はその視線には気が付かず、ついでに心にはほんの僅かながらも達成感が湧いた。今日は頑張った。これならもしかしたらタマちゃんも。そんな期待をして家に帰るのだが、結局タマは反応をみせてくれず、がっかりしてまた沈んだ気持ちになり、そうして前日と同じで何もする気が起きずにそのまま寝た。

四日目、ヒーローになろうと思った。別れる際にタマは法子がヒーローになれないと失望していなくなつた。ならヒーローになればまた戻って来てくれるんじゃないだろうか。一度は否定した答えを再度吟味して、法子はこれこそ答えだと確信した。答えを見つけた



つもりの法子は何処か嬉しい気持ちで学校へと向かった。学校での様子は前日と変わらない。文化祭の準備もほぼ同じ。今日は加えてヒーローについて考えた。ヒーローにはどうすればなれるのだろうか。帰り道の途中、ヒーローの条件とは強さと優しさではないだろうか。と思いついた。誰にも負けない強さと人を助ける優しさ。そうだ、そうに違いないと勇んで、法子は人助けをしようと思いを固くしながら家に帰る。だが特に困っている人は見つからず、最終的に家の前に落ちているポイ捨ての空き缶を拾っただけで終わった。優しさが駄目なら強くなるかと、腕立て伏せを開始し、三回目で力尽きて、疲れ切った法子はそのまま寝た。

そうして今日、五日目、クラスの人々はほとんど帰り始めて、残りは有志達だけが残っている。法子もこそそとした様子で家路についた。帰り際に、ホントキモいよな、あいつ、という声が聞こえたが、今日は振り返らなかつた。顔が熱るのを感じながら、急いで教室から離れた。結局この一週間、タマは反応してくれなかつた。もしかしたら今持っているのは既に何でもないアクセサリーに過ぎず中身のタマはもう別の所に行ってしまったのではないか。そんな不安が心をよぎる。だがそれを考えても仕方が無い。今はとにかく自分が出来る事をするだけだ。

どうすればタマは戻って来る？ 再び頭を巡らせて、ふと思いつく。アトランという巨大なショッピングセンターがある。最近出来たその商業施設には国内最大の魔術専門店がある。そこにタマは行きたがっていたのではなかつたか。もしかしたらそこへ行けばタマが興味を持って戻って来てくれるかもしれない。

人通りの多い所に行きたくは無かつたが、タマが戻って来る為になら仕方が無い。法子は意を決して道を変えた。

しばらく歩いただけで、法子は死にそうになりながら道脇の石堀に手を掛けた。まだ着かない。一体何処にあるのだらう。情報に疎い法子はショッピングセンターがどの位離れているのか知らなかつた。近いとだけ聞いていたが、それは専用のバスや車で行く場合の

話であつて徒歩で行く距離ではない事を知らなかった。荒い息を吐きながら、そもそも道順すら知らない事を思い出して絶望的な気持ちになつた。

ふと近くから人ごみ特有のざわつきが聞こえてきた。その賑やかさに思わず踵を返したくなつたが、踏みとどまる。シヨッピングセンターに行けないまでも人通りの多い所に近付いてみよう。そんな決意が心に湧いた。そうすれば何かが変わる気がした。

一歩踏み出そうとした時、

「あ、お前」

傍から聞こえてきた呼びかけの所為で足が止まつた。聞き覚えのある声だ。見れば、そこに転校生の野上将刀が居た。

将刀を見た瞬間、法子は苦手だなと思つた。思つた瞬間、その思ひは爆発的に広がつて、法子の中で将刀に対する明確な苦手意識が育ち上がった。

「……野上君」

辛うじて法子は言葉を発する。法子が名前を呼んだのは決して話し合いの為の緩衝剤ではない。それは相手に主導権を持たせまいとする、拙い隔意だ。相手に一方的に喋らせればどんどん相手の会話は調子上がり、それに比例して自分の苦痛が増えていく事を法子は知っていた。けれど法子の隔意は何の効力も無く、将刀は気安い応答と受け取つて、朗らかに笑つた。

「どうしてこんな所に？」

友達が居なくなつて寂しくて、だなんて言える訳が無い。しかし咄嗟の嘘も思いつかずに、法子は顔を伏せた。

「そつちこそ、どうして？」

「俺、は……まあ、何となく」

将刀が歯切れ悪く答える。

「じゃあ、私も何となく」

法子も不愛想に答えた。

沈黙が下りる。

将刀は思いのほか弾まない会話に戸惑いつつ、気まづくなった  
雰囲気を変えようとした。

「そういえば、文化祭は明日だな」

将刀は無難な話題を出したつもりだったが、法子は文化祭に苦痛  
と無関心しか感じない。笑顔で文化祭の話題を出した将刀に法子は  
怒りすら感じて押し黙った。

将刀は法子が話題に食いついてこない事を訝しみつつも、まさか  
怒っているとは思わず、何とか法子の琴線に触れる話題を手繰り寄  
せようとする。やはり笑顔のまま将刀は言った。

「そういや、文化祭の準備頑張ってたな」

将刀は法子の振る舞いを頑張りと見ていた方で、単純な励ましの  
つもりだったのだが、後ろ向きな法子には将刀の言葉が皮肉にしか  
聞こえない。瞬間、沸騰した感情のままに叫ぶ。

「分かってるよ！ あたしが役に立ってないってのは！ みんなに  
嫌われてるのも分かってるから！ いちいち言わなくても分かっ  
てるよ！」

「な！ そんな事言っていないだろ！」

「うっさい！ 自分でも分かっているよ、こんなんじゃ駄目だつて！  
でもしょうがないでしょ！ どんなに頑張ったって人並みに出来  
ないんだから！」

急な剣幕に圧されて何も言えずにいる将刀へ、法子は尚も言い募  
る。

「良いよね、野上君はさ！ 楽しいんでしょ？ 生きてて！ 明日  
の文化祭だつて楽しみなんだよね？ でもね、世の中にはあんた等  
みたいな恵まれた人間ばかりじゃないの！ 何をしたって、皆に嫌  
われる人が居るの！ 明日の文化祭だつて、生きてる事だつて辛く  
て仕方が無い人が居るんだつて分かってよ！」

ぶちまけられた一方的な物言いに今度は将刀が逆上する。

「お前な！」

そこで感情が高ぶり過ぎて一瞬将刀の声が詰まる。突然の将刀の

大声とほんの一時の悲しげな間に法子は虚を突かれた。そこに将刀の言葉が突き刺さる。

「そんだけ後ろ向きに考えてれば、誰だってうっとうしいと思うに決まってるだろ！ こっちが楽しくしようとしてるのに、そっちがそれをぶち壊して、しかもそれを他人の所為にして不満に思ってる！ 何で嫌だと思つたら自分を換えようとしななんだよ！ どうして物事を前向きに捉える努力をしないんだよ！」

それはまさしく法子が日頃から自分に対して抱いている悪い評価その物だった。法子は何も言い返せずに、目に涙を浮かべて顔を俯けた。

法子の頭の中に言葉の衝撃が鳴り響いている。視界が揺れて安定しない。首筋から悪寒と熱が奇妙に緋い交ぜになりながら這い上がって、息が荒くなる。法子はよろめいて、後ずさった。もう将刀の声は聞こえていない。

「あんたはみんなに嫌われているって言っているけれど、そんな事は あ、おい！」

法子はその場に居られなくなって、背を向けて人通りの多い道へ走り出た。将刀の言葉など聞いていられる余裕は無く、法子は涙をこぼしながら、後ろ向きな自分を責め、それを指摘した将刀を責め、自分の周囲を責め続けて、人通りの多い道を駆け抜けた。先程の将刀の言葉に、自分という存在と今迄の生き方とこの一週間の頑張りを否定された気になって、法子は心を瓦解させながらひたすら頭の中で呟き続ける。

嫌だ、もう全部嫌だ。

直ぐに息が切れて走れなくなり、丁度良く在った時計台を囲むベロンチに腰かけて、ふさぎ込んだ。

嫌だ、嫌だ。

段々と思いは曖昧になり、もう何が嫌なのか明確に思い浮かべぬまま、むしろ明確な思考に結びつかぬ様に頭の中を塗り潰すそうと、嫌だ嫌だと思い続けた。

そこに声がかげられた。

「ねえ、一人？」

見上げるとスーツを着た中年男性がにやにやと笑いながら法子の事を見下ろしていた。脂ぎった毛深い手が法子の肩を掴む。

「ちよつと見ててよ」

そう言つて、中年男性はもう片方の手で懐から銃を取り出して、こめかみに当て、引き金を引いた。音も無く男性の頭が破裂して消えた。

## 道化師の悪夢

狂っている。

狂っていた。

頭の破裂した男は手を鳥の様に羽ばたかせ、往来にぶつかりながら何処かへと消えていった。ぶつかられた一人の女性は、猿の様な声を上げながら、近くで店の呼び込みをしている男性に掴みかかる。それをはやし立てる男達が手に手に箒を掲げて踊っている。別の場所では電柱に掴まってけたたましく笑う女が居る。それをしきりに眺めながら何やら画用紙に絵を書きながっている男が居る。他を見れば、裸になって抱き合う姿も見えた。嘔吐しながら転げまわっている者も居る。

狂っていた。

狂っている。

「恐ろしくなつて逃げようとした時に、横合いから腕を掴まれた。さつき頭を破裂させた男だった。男は無くなった頭に満面の笑みを浮かべて、優しげに語りかけてきた。頭が無いはずなのに、何故かそこに笑顔が見える。」

「さあ、君も一緒に」

法子は悲鳴を上げて掴む手を振り剥がそうとするが、力が強く引き剥がせない。男は蛆の湧いた瑞々しい首の断面を法子に近付けてくる。

法子がかく。男は放さない。

助けて。思わず法子は祈っていた。具体的な姿にはない。イメージは湧いたが、そのイメージに明確な姿は無かった。浮かんだのは、自分に語りかけてくれた刀の優しい声。助けてともう一度繰り返す。だがタマは反応しない。男の傷口が迫ってくる。

その時、乾燥した木の枝を複数まとめて押しつぶしたような、そんなひしゃげた音が響いた。目の前の頭の無い男の頭があるはずの

場所に、一本の矢が突き立っていた。

次の瞬間に、世界がひび割れ、崩れ落ちる。気が付くと何ら変わりの無いネオンの灯った繁華街。ただ通行人は居ない。その代わりに道路には沢山の人が倒れている。そして法子の目の前にピエロが立っていた。頭には矢が突き立っている。

「ひひ、僕の邪魔をするのはだあれ？」

ピエロが奇妙にねじくれた動きで横手を見上げた。法子の視線もそれに釣られる。

ビルの上に誰かが立っていた。良く見えないが、人の様だ。黒い姿が闇夜に滲んで、おぼろげにしかその姿を把握できない。

その人影が消えた。法子がビルの上の人影を見失った瞬間、法子の体に衝撃が走った。続いて宙に浮く心地がして、気が付くと元居た場所から遠く離れていた。遠くにピエロが見える。訳が分からない。足がつかずに混乱した。

「大丈夫か？」

法子へ優しい声かけられる。その声の出所は法子のすぐ前にあった。法子に技を教えた漆黒の騎士が子を抱きかかえて西洋兜の間から見える口元を微笑させていた。

「大丈夫……です」

熱に浮かされた様にはつきりしない頭で、法子はそれだけ答えた。騎士は頷くと、法子を地面に下ろして呟いた。

「危ないからそこから動くな」

剣を構えてピエロへと向く。ピエロが腹を抱えて笑いながら、近くに転がる人間を蹴り上げた。その瞬間、騎士が消えた。

ピエロが宙に浮かぶ。一拍遅れて、ピエロが居た場所に、剣を払った状態の騎士が現れ、大きな破裂音がした。

それが、剣で切ろうとした騎士と回避したピエロの一瞬の攻防だったと法子が気付いた時には、ピエロは近くのビルの中へと逃げ込み、騎士もそれを追って消えていた。

ビルの奥から笑い声と金属音と爆発音が断続的に聞こえてくる。

しばらくしてビルの窓という窓から何かが流れ出てきた。それは血だ。鉄錆の匂いが外にまで充満する。

やがてビルの内部が光り輝き、しばらくしてから騎士が飛び出してきた。そうして法子の前に着地する。

「とりあえずあの魔物は帰した」

騎士がそう言った。法子は安堵して騎士を見上げた。人と面と向かえない法子だが、兜に隠れて目が見えないから、平気でその顔を見る事が出来た。

「で、何で君はここに居るんだ？」

突然、騎士がそんな事を言った。法子はその意図が読み取れず、何とも答えられない。

「中……いや、君はまだ学生だろう？ 夜にこんな所に来たら危ない。早く帰……りなさい」

心配してくれてるんだ。敵めしい鎧を着たまるで物語に出てきそうな騎士が、そんな素敵な存在が自分なんていう惨めな存在を心配してくれていると思うと、法子はそのちぐはぐさがおかしくて、そして嬉しかった。

「はい、帰ります。どうせ用事なんかなかったから」

「ならどうして」

「それはアウトレットに行こうとしたけど、どう行けば良いかわからなかったから、とりあえずここに」

高揚した気分の所為でそこまで言ってしまったから、自分がとても恥ずかしい事を言っている事に気が付いて法子は口を噤んだ。

笑われるかなと思った。けれど騎士は微笑を崩さず、そうかただけ言っただけに背を向けた。

「とにかく早く帰った方が良い。じきに皆起きて混乱するだろうか」  
「ら」

その言葉を残して、騎士が闇夜に消えた。

法子が空を見上げていると、辺りからうめき声が聞こえてきた。

確かに騎士が言った通りの様だ。混乱する前にと、法子は急いでそ



の場を離れた。

家への帰り道、法子はぼんやりと空を見上げながら、騎士に助けられた事を思い出していた。カッコ良かった。悪党から人々を守るヒーロー、まさにそんな感じだった。まさしく法子になりたい理想の姿だ。

あんな風になれたら良いなと思った。その為にどうすれば良いのかは分からない。けれど何となく具体的な目標が見つかって、法子は満足していた。いつそあの騎士に弟子入りしようかと考える。

人を守るヒーロー。誰かが危険な目に遭っていたら、真っ先に駆けつけて守ってあげる。数あるヒーロー像の内の最も単純で最も普遍的な姿だ。けれどその見飽きたヒーロー像が今の法子にはとても新鮮に感じられた。心の底に確かに灯る英雄の形が出来た。

朝、昨日の事がニュースでやっていった。意識の混濁や怪我等の軽症者が多数に、重傷者が幾らか。最近の魔物の事件ではかなり大規模な被害だったと告げている。魔物の出現は増え始めると加速度的に増加するので一帯に住む人々は注意するよう呼びかけている。

そんな大事件だったのかと今更ながらに恐ろしくなった。だが法子の顔はにやついてしまう。騎士に助けられた事と明確なヒーロー像が浮かんだ事を思い出して。

準備をして外に出ると、寒さが昨日よりも一段と強まっていた。寒さに体を縮こまらせながら、さっきの嬉しさは何処へやら法子は今日の事を思つて憂鬱な気持ちになる。

クラスの出し物における法子の役割は裏方だ。料理を作ったり配膳したり。外に出て接客をするウェイターやウェイトレスに比べれば随分マシだが、それでも自分に務まるとは思えなかった。何なら良かったのかと言われても、出来ると思える事は何も無く、結局の所、文化祭に参加する事自体が嫌なのだ。

更に出し物への参加は交代制で、3時間置きの三交代。つまり6時間の暇がある事になる。出し物が嫌な原因は結局自分のミスが恐

るしだけで万が一にでも仕事をこなせばやり過ごす事が出来るのだが、暇な時間となると周囲からの重圧が原因となるので逃れる事が出来ない。その暇な時間をどう過ごして良いものか、法子には大変厳しい問題であった。

友達が居ないので文化祭を楽しむという選択は難しい。文化祭の賑やかな雰囲気の中、たった一人で6時間もうるつくというのは、自分の孤独な惨めさが際立って、想像するだけで吐き気がした。ましてその様子をクラスの誰かに見られる可能性が非常に高い。その事を種に笑われると考えると地獄以外の何物でもない。何処かに隠れて時間をつぶすと言うのも6時間というのはネックだし、学校では机に突っ伏して動かない法子には隠れられる場所が分からない。

後は学外に逃げるという手もある。人の出入りは多いだろうし、買い出し等で生徒の出入りもあるだろうから、それに紛れて外に出て、そのまま時間を潰してしまえば良い。思いついた案の中ではこれが一番気楽に思えたが、ただ一点、本来であれば学内で過ごしていなければいけない時間を学外で過ごすという抵抗感がどうしても拭えなかった。他人との関わりを避ける法子にとって、衝突とは最も忌避すべき事柄であり、その為にもルールはやり過ぎな位に守る方なので、さぼるのはどうにも後ろめたい。

どうすれば良いか。法子の今日の当番は正午から三時まで。つまり文化祭開始と同時に暇という災厄が降ってかかる事になる。時間は無い。どうにか身の振りを考えなくちゃと法子は無闇に気合を入れた。

「駄目だった」

「やっぱりねえ。代わってもらおうなんて無茶だよ」

「今日になって時間変更するのはきついでしょ。みんな色々約束があるだろうから」

「分かってるよ！でも、もしかしたらって思ってたさ」

「ま、諦めなよ。わざわざ法子さんと一緒の時間にしなくたって、

三交代の内の二つが自由時間なんだから、結局三時間は自由時間が被るでしょ？ だからその時にさ」

「駄目。きつと法子さん、もう片方の三時間がきつとすごく寂しいと思うもん」

「法子さんでいつも一人ですし、あまりそついうの感じないんじゃないですか？」

「そんな事無いよ。いつも寂しそうだし。昨日だって文化祭嫌そうだったし。やっぱり文化祭は誰かと一緒に回らないと楽しくないもん」

「幾らなんでも余計なおせっかいだと思うけどなあ」

「それでも良いよ。私は私が嫌だから、法子さんを一人にしたくないんだもん。自分勝手に法子さんと一緒になりたいの」

「別に良いけど、何かその言い方イヤらしいな」

「こつちは真剣なの！」

「分かった分かった。何でそんなに入れ込んでるのか分からないけど、摩子の為にお姉さんが一肌抜いてごんしょう」

「どうするの？」

「代わってやるよ。朝からだから」

「代わるも何も私と同じ時間でしょ？」

「そつじゃなくて、私と法子さんが代われれば、法子さんがお前と一緒の時間になるだろ」

「あ、そつか」

「法子さんは多分他の人と約束とか無いだろうし、時間が変わっても大丈夫だろうから」

「分かんないけど、法子さんに伝えてみる」

「頑張りな、お節介な摩子さん。それから後で何か奢れよ？」

「任せて！」

法子が装飾された教室のドアを開けると、駆け寄ってくる人影があった。法子が身を引いて道を譲ろうとすると、あるう事が目の前

に立ち止まり満面の笑みを浮かべてきた。

「おはよう！」

法子は突然の事に訳が分からず何も考えられなくなる。クラスの人が自分に話しかけてくるなんてありえない。あまりの事に法子は挨拶すらも返せない、

「あのさ、ちよつと法子さんをお願いがあるんだけど良い」

法子が首を傾げる。その首を傾げるという行為が相手の言葉に対する反応なのか、緊張した体が痙攣した結果なのか、法子自身にも分からない。

「法子さん、12時から3時までキッチンだったでしょ？ でも変更して欲しいの。9時から12時までホールに。良い？」

法子が頷く。

法子にとつて相手のお願いを断る事は相手にいずれ復讐されるという事であり、そんな事は御免なので、法子に相手のお願いを承諾しないという選択肢は無い。だから無意識の内に頷いていた。

「良かった！ じゃあ、私も同じ時間だからよろしくね」

そう言つて、駆け寄つて来た生徒は忙しそうに何処かへ行つてしまふ。法子はしばらく呆然とそこに立ち尽くして、ようやく頭が働き始めた頃に、相手の名前が分からない事に気が付く。それに気が付いた途端に脳髓が目まぐるしく働き始め、今のやり取りが非常に重たいものと気が付いた。

つまり自分に接客をやれという訳だ。でも、自分が接客なんか出来る訳が無い。不可能だ。まともにと喋れないのに、どうして接客なんて出来るだろう。

慌てて法子は布で仕切られたキッチン側へ行く。そこには全員のシフト表が張られている。それには法子ともう一人だけに時間の修正が行われていた。お互いの時間と役割を交換した形になる。

それはどういう事か。

法子に悪意を持つ者が、きつと務まらないであろう接客役にわざと据えたに違いない。しかも一番早い時間にして、心の準備も何も

させない様に。

一瞬視界が暗く陰った。倒れそうになった体を踏ん張って支えながら、法子は泣き出したいのを堪えて、キッチンから出る。カーテンを潜ると教室の中は机と椅子が整然と並べられている。生徒達が思い思いの場所に座り、立ち、だらけた調子や高揚した様子で文化祭の始まりを待っている。

法子はその間を通り、教室の外へと向かう。目的は無い。一人になりたかった。だが外に出る為の引き戸に生徒が数人、まるで塞ぐ様にして立ち話をしていた。行きづらかった。塞ぐ者達は以前法子の事を大声で批判していた者達だった。益々通り抜ける事が出来ない。法子は途方に暮れて、立ち止まる。

その時、教室の戸が開かれた。登校時間で出入りの多い今、誰もそんな事気にしない。目もくれない。戸の前に立っていた者達と戸を見ていた法子だけがそれを見た。

ピエロが立っていた。それはまさしくピエロ。何処からどう見てもピエロ。そして、昨日大量の負傷者を出したピエロの魔物と同じ姿をしていた。

昨日の事を思い出して法子はすくみあがる。逃げる事も、周囲に避難を促す事も、魔物に立ち向かう事も出来ずに、法子はただその場ですくみ上って動けなかった。

一方で扉の前に立っていた生徒達は入って来たピエロを見て、文化祭の出し物だと思っただ様で、おかしそうに笑いながらピエロの事を取り巻いた。

「笑うな」

甲高い声が響く。ピエロの言葉だった。その言葉を聞いたピエロの周りの生徒達は更に大きな笑いを響かせた。

次の瞬間、ピエロの前に立っていた一人が吹き飛んだ。血を吹き散らしながら教室の中を飛び、ガラス窓に激突して突き破り、ベランダに飛び出した。ピエロが生徒の腹を殴り飛ばした所為だった。

唐突な非日常に、教室中のざわめきが止まる。ピエロの周りに集っていた生徒達が後ずさりをし始めた。客席側に居る生徒達がピエロに視線を送り始めた。キッチン側の生徒達が物音を聞き付け、客席側を覗き始めた。

そして悲鳴があがった。まず初めに、客席側の生徒達がキッチン側から覗き込む生徒を突き飛ばしてカーテンの奥へと逃げ込み始めた。続いてピエロの周りを取り巻いていた生徒達がその後続いた。最後にキッチン側から覗いていた生徒達が慌ててキッチン側に引込んだ。最後の最後に法子が急いで、客席とキッチンを区切るカーテンをくぐる。

カーテンをくぐる瞬間、背後を振り返ると、ピエロは法子の事など気にせずに、ベランダに倒れた生徒へ近付いていくところだった。きつと酷い事をしようとしている。きつと酷い事になる。

怖かった。これから行われるだろう事も、自分が標的になつてそれと同じ目に遭わされる事も。食い止めたいという思いも微かにあった。だがそれ以上に怖かった。見ていられなかった。

法子は振り切る様にしてカーテンを閉めて、キッチン側を走る。廊下に通じる扉を目指す。キッチンにはもう誰も居ない。みんな逃げたままになっている。廊下の方から悲鳴が聞こえ、それが次々と連鎖した。きつと逃げた人達の混乱が伝播したのだ。法子は急がなければと焦った。このままではきつと、学校の外に逃げるまでの道程は大混乱になる。その混乱に阻まれている間にピエロが次の標的を探しに来るかもしれない。もしそうなれば混乱で逃げられない中で、襲われる事になる。

法子が急いで戸に向かおうとした時、甲高い金属音が響いた。音の出所は足元で、見れば剣型のプレスレットが下に落ちていた。手首のプレスレットが落ちたのだ。だがそんな事に構ってられない。今は何よりも逃げる事が優先だ。プレスレットは後で取りに来ればいい。

ふと頭の中に英雄という事が閃いた。けれどそれはすぐに霧散し

て、しかし確かに法子の心に明確な重さを残していった。ここで逃げては取り返しのつかなくなる予感があった。

法子の足が止まる。法子の頭は呆然としていて、今自分が何をしているのかもわからない。ただ逃げなくちゃと頭の中で繰り返しながら、体だけは無意識の内に立ち止まっていた。

その背後、カーテンの向こうから何かを引きずる音がする。きつとピエロが生徒を引きずっている。それが分かって、法子の中に言いようのない焦りが湧く。英雄という言葉が再び頭の中に閃いた。法子の足が動いた。

教室の外へ向けて、法子は再び走り出した。今の自分に何が出来る？ 何も出来ない。助けに行っても返り討ちに遭うだけだ。二人共死んでしまう位なら、一人だけでも生き残った方が良い。誰だっと同じ様にするはずだ。だから、だから逃げて悪くない。法子はそう心の中で念じながら、背後の物音を聞かない様に必要以上に足音を立てて、教室の外へと逃げ出した。

背後から獣の唸り声の様な悲鳴が響いた。

## 人々は歡喜で以って英雄を称える

凄絶な悲鳴に法子の足が止まる。教室の中からだ。さっきの生徒の悲鳴だ。何をされているのか分からない。あるいは殺されてしまったのかもしれない。分からない。分からないから恐ろしい。

恐ろしさで足が震え誰も居ない廊下で立ち止まり、その瞬間法子は何もかもが嫌になる。

教室の中で行われる惨劇も魔物が次々と現れる異常事態も、ピエロの様な恰好をした魔物も自分の事を非難した生徒も、誰も居ないこの廊下も沢山の人間に溢れるこの学校も、学校で行われる学園祭もそれに参加する事を憂鬱に感じる自分も、誰とも喋れない自分も誰とも関われない自分も、タマに愛想を尽かされた自分も人を傷つけてしまった自分も、いつまでも落ち込んでいる自分もきつと立ち直れないと諦めている自分も、そしてここで逃げようとしている自分も、全部が全部嫌だった。

逃げる事も嫌だ。立ち向かう事も嫌だ。知らぬふりも嫌だ。見捨てる事も嫌だ。戻るのは嫌だ。やられるのは嫌だ。迷う事も嫌だ。悩む事も嫌だ。苦しむ事も嫌だ。何もかも、全部が全部嫌だった。

嫌になって嫌になって、この世界に居る事すら嫌になった。消えてしまいたい。そう思った。もう全てを放り出したい一心で、法子は再び教室に駆け込んだ。こうなったらあのピエロに挑んで死んでやる。死ねば全てから逃げられる。でもただでは死なない。せめて一矢報いて死ぬ。せめて襲われている生徒を逃がして死ぬ。

自暴自棄な心で、法子は駆ける。武器は無いか。あのピエロに突き立てる武器は。

数歩先に剣型のアクセサリが落ちている。目にも刺せばきつと痛い。理性は出来る訳ないと断じるが、そんな事に頓着する暇はない。法子は駆けながら身を低くして刀をとる。体勢を崩して倒れそうになるが、自分の背丈よりも長い刀を杖にして自分の体を支え、



勢いを殺さずにそのまま駆ける。ああ、もう何でもいい。とにかく襲われている生徒を助けよう。それでこそ我が主。どうせこの先、私なんかが生きていても碌な事にならない。それならばきつと未来の広がっている別の誰かに人生を預けた方がきつと良い。いや、それはどうかと思うけど。

黒を基調とした丈の短いドレスを身に纏って法子は駆ける。目の前のカーテンを刀で切り裂き、その向こうへと跳びだす。

生徒が襲われていた。口から血を流した生徒はピエロに顔面を掴まれ、無理矢理目を見開かされていた。けれどまだ生きている。何をされているのか、法子には分からない。分からないが、襲われている、そしてまだ取り返しのつかない事にはなっていない、それだけで十分だ。

法子は敵意を持ってピエロを見据える。

『道化二弄バレル模造』

ある日鏡を覗いた弟が鏡像に向かって言いました。お前はたった今生まれたばかりだから俺の弟だ。弟なら俺の言う事を聞け。

ユニーク：デモ魔力八低イ

コミカル：デモ力持チ

バフーン：デモ意志八無イ

東』

ピエロの魔力は微弱。雑魚だ。少なくとも日曜日に闘ったキャットウォークと比べれば威圧感は遥かに低い。そう見て取った法子はそのまま駆けて、刀を抜いて一閃し、ピエロを切り裂いた。ピエロの体が切り裂かれると、何故かピエロの首も手足も体から離れ、バラバラになった。ピエロは溶ける様にして消えた。

あまりにも呆気無い。もしかしたら油断させる為の罠だろうか。警戒するも、気配はまるで感じられない。まさか本当に終わったのだらうかと法子が気を抜いた時、頭の中に声が響いた。

「いや、まだだ」

タマの声だった。

「た、たま、たつ、たた、たま、た」

「落ち着いて。乱れすぎていて心が読み取れない」

「ふおふほほうふへ」

「だから落ち着けて」

「落ち着いてなんかいられる訳が無い。」

「タマちゃん？」

「どうした？」

「本当にタマちゃんなの？」

「勿論。だからどうした」

「どうして？ 戻って来たの？」

法子が自分の体を見ると、魔法少女の衣装を着ていた。いつの間  
に。

タマが笑う。

「戻ってくるも何も私はずっと君の手首に垂れ下がって居ただろう  
？ 私が居なくなつた事は無いよ」

「でも話してくれなくて」

「それは黙っていただけ。君があんまりにも私に頼りっきりだから  
お灸を据えようかね」

法子が刀をゆっくりと自分の目の前に掲げた。

「どうした？ そんなに懐かしいのか？ まだ一週間も経ってない  
だろうに」

そしてそれを膝の上へと叩きつけた。折れない。だからもう一度  
膝へ。膝へ。何度か試みるも刀は折れそうにない。

「待て！ 待て！ 何をしているんだ？」

「タマちゃんを折ろうと」

法子が静かに答える。

「怖いよ！ 君、本気で言っているだろ」

「うん」

「うんって」

ふいに法子の目から涙がこぼれた。

「本当に寂しかったんだから」

一転した湿り気のある法子の思念に、タマは流石にたじろいだ。

「ああ、悪かったよ」

「本当に寂しかったんだから！」

また法子が膝に刀を叩きつけた。

「ああ、もう！ 分かった！ 分かったから落ち着けて。今はそれよりも魔物の方に集中しよう。文句は後で聞いてあげるから」

「そうだ！ 忘れてた」

忘れんなよとタマは思ったが、伝えなかった。今は事態に対応する事が先決だ。法子は襲われていた生徒に駆け寄って容体を確認する。

目立った外傷は無い。だが口から血を流し、意識も落ちている。

息はある。どうなのだろう。素人の法子には危険なのか大丈夫なのかも分からなかった。タマが答える。

「気絶しているだけだね」

「本当？」

「ああ。臓器が潰れているかもしれないけど、致命傷じゃなさそうだ」

「それって問題なんじゃ」

「大丈夫。とりあえずこの人間は置いておこう」

タマはあっさりと怪我人を置いていく事を主張した。法子がそれに対して非難の意志を送るがタマは飄々としている。

「とりあえず死にはしないよ。それよりも魔導師が先だ。あいつは厄介だから」

「もう倒したよ？」

「いや、さっきのは偽物だ。君の解析でもそう出ていただろ？ あいつは自分の偽物を作りだすんだ」

「じゃあ、まだ終わってないんだ」

「ああ。だから早く行こう。被害が広がる前に」

「でも」

法子は尚も怪我人を気にしてその場から離れようとしないう。それをタマは諫める。

「目の前の事に溺れちゃいけない。あの魔導師を逃す事の方がよっぽど不味い。本当に死人が出る」

「でも」

でも目の前には血を流して倒れている怪我人が居る。法子にはそれを放っておく事がどうしても出来なかった。

その時、突然、教室の壁が爆発した。吹き飛んだ壁の向こう、白煙の立ち昇る先に、人影が立っている。

まさか魔物かと法子は剣を構えるが、現れたのは魔物ではなく、以前闘った魔法少女だった。

「魔法少女見参！ この世界で好き勝手はさせないよ！」

何だかポーズを決めている。

「おい、変なのが来たぞ」

タマが呆れて法子に話しかけるが、法子は何だか楽しそうだ。

「カッコ良い」

そう呟いて、魔法少女に見惚れている。

「ああいうのが良いのかい？」

「タマちゃん、私達も決めポーズと決め台詞考えておこうか」

「やめてくれよ。それより魔導師だよ、魔導師。そっちに集中」

現れた魔法少女はポーズを解いて、教室の中へと入って来た。

「あれ？ あなたは前に会った」

法子の体が緊張で震えた。前に会った時は、こてんぱんにやられた時だ。嫌な思い出に法子の体は固くなった。

「ここに居た魔物は？」

「……さつき、私が倒しました」

思わず敬語になる。

「ホントに？ なんだ、変身する必要なかったな」

「ち、違います。あいつ一人だけじゃなくて、いえ、確かに一人なんですけど、沢山居て」

「……さつき、私が倒しました」

「どういう事？」

「そのつまり、さっきのは偽物で、本物は別の所に」

その時、外から悲鳴が聞こえてきた。法子ともう一人の魔法少女が窓に駆け寄って外を見ると、沢山のピエロが校庭の生徒達を囲んでいる。

「まずいな。後手に回るぞ、このままだと」

タマの切羽詰まった思念が法子の心を焦らせる。焦るだけで何も出来ず、おろおろと辺りを眺めまわし、それだけ。具体的にどう行動すれば良いのか法子には分からない。

「ねえ、あなた」

魔法少女が法子に語りかけてきた。

「何ですか？」

「あの魔物に詳しいの？ 本物の居場所は分かる？」

分からないと答えようとした時、タマが分かるよ君ならと囁きかけてきた。それにつられて思わず答える。

「分かります」

「そっか。じゃあ本物は任せた。私はみんなを守るから」

「え？ あ、はい」

法子が賛同したのを見て、魔法少女はにこりと笑うと、その場に居るもう一人、怪我をして倒れている生徒に近付いて、その体に手を翳した。生徒は光に包まれ、痙攣が収まった。

「この人の事も任せて。あなたは行って」

「はい」

何だか急な事態に法子は焦る。とりあえずどうすれば良いだろうと考えながらおろおろとしている法子を、魔法少女が怒鳴りつけた。

「早く！」

「は、はい！」

法子は慌てて壁の穴を通り、廊下へと飛び出した。

「どうしよう、タマちゃん。ああ言ったけど、私本物の居場所分からないよ」

「分かるだろ。解析に出ていた」

「そう……だっけ？」

「東ってあっただろ。あれが本物の居場所を示しているんだよ。本物が居る方角か、本物から見た偽物の方角なのかは分からないけど」

「じゃあ、どっちに」

「まあ、とりあえず廊下を真っ直ぐ行こう。廊下は東西に伸びているから」

法子が廊下を見渡す。東と西、どちらに行けば良いだろう。

「ねえ、タマちゃん」

「自分で考えな」

「うぐ」

そう言われては聞く事が出来ない。法子は必死で考えて東に行く事に決めた。東に行けば学校の中心がある。何となくボスは真ん中に居る気がした。

「まあ、間違っていない」

タマが補強してくれる。法子は勇んで東に向かう。

途中にピエロが見えた。

『東。あともうちよつと』

そんな解析結果が出た。どうやら合っていたようだ。

「しかし君の解析は本当に便利だね」

褒められて何だか嬉しい。久しぶりに誰かと話した気がする。もう何年も誰とも話していなかった気がする。だから嬉しくて、法子は勢いよく刀を振った。ピエロはあっさりとバラバラになって消えた。

一顧だにせず更に駆ける。風のように廊下を走り抜ける。

「止まれ！」

タマの急な制止に法子が立ち止まろうとして、つんのめって転んだ。そのまま擦れながら廊下を転げまわって、しばらくして止まる。

「痛い」

「さっきの部屋からおかしな魔力を感じた。多分そこだ」

法子が顔を上げて、今駆け抜けてきた廊下を眺める。それぞれの入り口を順繰りに眺めて、タマに問いかけた。

「何処？」

「あの、音楽室って書かれた所」

「分かった」

法子が立ち上がったって一息に跳び抜け、音楽室の前に着地する。

「居るんだよね？」

「十中八九」

法子が気合を入れて、刀を握る手に力を込め、扉を蹴り破った。

ピエロが鍵盤の上で踊っていた。さつき倒したピエロと寸分違わぬピエロだった。

「あれ？ また偽物？」

「何で？ 本物だと思っけど」

「だって偽物と全く一緒でしょ？」

「一緒じゃない偽物作ってどうするんだよ。自分と見分けがつかない様にしないと意味が無いだろ」

「それは、確かにそうだけど。何ていうか、折角のボスなんだし、

他のと比べたら派手な感じのが」

「アホな事言っていないで、解析」

「はい」

『グランギニョールに巣食う双子 ミラーマン

能力：鏡喜の世界

どうしたんだい、ボブ？ そんなに慌てて。

大変だ、ジョニー。家に帰ったら玄関にお化けが出たんだ。

どんなお化けだったんだい。

色白で太ってて豚の様な顔でしかめっ面でとにかく醜い奴なんだ。

それは君のワイフだよ。

成程、その通りだ！

HAHAHA!

HAHAHA! いや、ちょっと待ってくれ。僕のワイフは先月

死んだばかりだよ！

なら鏡で君を見たんだろう！

成程、その通りだ！

HAHAHA！

HAHAHA！ いや、ちよつと待つてくれ。なら誰が玄関に鏡なんて置いたんだい？ 鍵もかかっていたのにさ」

ピエロがとても楽しそうに悲しそうに鍵盤の上で踊っている。その間の抜けた様子に馬鹿にされた様な気がして、法子は腹が立つてタマに問いかけた。

「もー！ 何これ！ 解析、全然分かんない！」

「また妨害されたね」

「じゃあ、あいつの方が強いって事？」

そう考えると、急に不気味になる。狂った様に踊るピエロ。滑稽で、とても滑稽で。何故今、踊りなんて踊っているのか。敵対者が目の前に居るといふのに。まるで人間とはかけ離れた精神を持っている様な。不気味。負ければ、捕まれば、どうなるかは分からない。「安心してよ。魔力の量で言ったら君よりもずっと少ない。真正直に戦えば、君の方が強いよ」

「じゃあ、何で解析出来なかったの？」

「何というか、あの道化師は人を翻弄する事に命を賭けているんだよ。相手に自分を晒すなんて絶対にしない奴だから」

ピエロはまだ踊っている。法子はそれを見て、一筋縄ではいかなそうだと気を引き締めた。恐ろしさは減じたが、その分警戒心が強くなった。

「実を言うと、前の主があいつと闘った事がある。だからあいつの事は分かっている」

「ホントに？ じゃあ、教えて！ って駄目？ あんまり頼っちゃいけない？」

「いや、そんな事言っていられないよ。あいつは厄介だから」

「厄介？」



「そう、魔力こそ少ないけど、能力が厄介。偽物を作りだす能力と もう一つ鏡の中に入り込む能力」

急にピエロの動きが止まった。かと思うと、鍵盤に乗ったピエロが三人に増えた。背後からも気配を感じる。振り返ると、更に多くのピエロが居た。

「早速取り囲まれたね」

「でもダミー達なら余裕」

法子が振り向きざまに一步踏み込んで、刀を振るった。法子の背後をとっていたピエロ達がまとめて消し飛んだ。踏み込んだ足で跳ね上がり、天井に手を突いて無理矢理方向を変え、ピアノの上のピエロに切りかかる。刀を振るうとピエロが二人消し飛ぶ。本体には一瞬前に避けられた。

「外した」

「まあ、本体は偽物より強いから」

ピエロが音楽室を飛び跳ねながら、偽物を次々と増やしていく。偽物達も跳び回ってどれが本物のピエロなのか、眩惑する様な動きを繰り返して本物と偽物は入り混じっていく。

「さあて、どれが本物の僕が分かるかな」

沢山のピエロが一斉にそう言った。

法子が鞘に納めた刀に手をかけてピエロ達へと躍り込んだ。そして跳ねているピエロ達を無視して、一番奥で笑っているピエロへと切りかかった。

ピエロが刀を避けようと横に跳ぶが避けきれず、脛に半ばまで切れ込みが入った。

「痛い、痛い！ 運が良いよ、一発で正解を当てるなんて。でも次は当てられるかな？」

そうしてまたピエロが増えていく。今度はさつきよりも多い。皆、脛に傷がついている。部屋を埋め尽くすピエロの大群。法子は一歩も動かず、近づくピエロだけを切り裂きながら、待った。待っていると、ダミーの合間に一瞬だけ本物が見えた。

その時を見逃さず、法子はダミー達を押し飛ばしながら本物へと瞬く間に近付き、思いつきりで薙ぎ払った。今度はピエロの腹が真一文字に切り裂かれる。ピエロの腹から玩具がゴロゴロと飛び出してくる。

「良くやった、法子。このままいけば帰す事が」

タマの言葉が途切れた。ピエロは大きく後方に跳躍して、ピアノの上に立つ。また最初と同じ構図。辺りに犇めいていたピエロ達は皆消えて、今はピアノの上の一人だけになっていた。何だか薄気味悪い。何かしてくる。そんな気がして法子はうかつに飛び込めない。相手の出方を待つのが賢明だ。

「何しているんだ！ 早く！ あいつを鏡に入れさせるな！」

タマの叫びに法子が動く。刀を構え、踏み出し、ピエロの元へ、だがそれよりも遙かに先に、ピエロは後ろに倒れ、そうして窓に触れ、そのまま鏡面を通り抜けた。

「イツツシヨータイム！」

窓の中に入ったピエロは楽しそうに飛び跳ね、側転し、隣の窓へと移る。楽しそうに楽しそうに、窓の中を飛び跳ねている。

「入られたか。まずいな」

タマがぼやく。法子は楽しそうなピエロをぼんやりと眺めている。「あれ、窓の向こうに居る訳じゃないんだよね？」

確かにピエロは一見窓の向こうで飛び跳ねている様に見える。だが良く見れば、それはあまりにも平面過ぎた。

「ああなる前に、仕留めたかったけれど」

「どうしよう」

「どうしようもない」

音楽室にまたピエロが増え始めた。今度の増殖は緩やかで、一人また一人、少しずつだけれど確実に、ピエロの数が増していく。

「鏡に入っている間、分身は精度が落ちる。けど、こちらの攻撃が届かない所から延々と攻撃されるのは面倒だぞ」

「あれさ、窓を壊しても駄目なんだよね？」

「ああ、近くに他の鏡がある限り。この学校もそれに町も鏡ばかりだろ？ 無駄って言って差し支えないよ」

偽物のピエロが襲い掛かってくる。法子はそれを一步退いてから、上から下へ切り裂いた。更にもう一人、横合いから飛び掛かって来る。下に振り下ろした刀を逆手に持ち替えて、下から上へ切り裂いた。続けて、二人、左右から襲い掛かってくる。法子は刀を順手に持ち替えて、綺麗に一回転して二人切る。キリが無い。

今度は頭上から。身を低くして切り上げる。四方から同時に。回転して切り裂く。時間差で前後、上から。後ろを突き、頭上の攻撃を避け、着地したのと前からのを一息に突き刺す。キリが無い。

今度は上から。切る。右から、左にも、切る切る。右、左、上、切る切る切る。上、前、左、前、右、斜め、前二人、後ろ、右、斜め、五人、六人、キリが無い。

一人一人はとても弱い。攻撃は単調で遅く、一度切ればそれだけで消える。けれど数が多い。幾ら切っても幾ら切るっても、新しいピエロが増えていく。そしてその大本は安全な窓の中で寝転がり、意地の悪い笑いを浮かべながら泣いている。

切る。切る。切る。だが増える。更に多く、増殖する。キリが無い。

法子の手元が狂い切り損なった、ピエロが目の前へと迫る。危うい所で、かわして、切り飛ばす。法子は自分の魔力が少しずつ減っていく事を自覚していた。あの魔法少女と闘った時よりも更に早く魔力を消耗していく。それでもあの魔法少女戦より長く闘っていた。成長したという事だ。けれどそれでも、限界は見え始めていた。

「どうすれば良いの、タマちゃん。疲れてきた」

「正直、どうにも」

「どうにもって！ 前に闘った時はどうやって勝ったの」

「前に闘った時は、こちらの魔力の量も扱っても君よりずっと長けていた。だから三日三晩闘って、あの道化師の魔力が尽きるまで待った。でも魔力切れを待つにしても、怪我を負っているからあの時よ

りは早いだろうけれど、それでも一日は見ないと」

「そんなの無理だよ」

「分かってるさ。だからどうしようも無いんだよ。現状を打開するには、あの本体を叩くのが一番だけど」

法子が窓に入った。ピエロに視線をやった。ピエロが大きくあくびをして、笑っている。

「でも鏡の中を攻撃するなんて無理だろ？ だから、とりあえず撤退して、同業者に代わってもらってのはどうだい？ あの魔女にあつちはもしかしたら鏡の中に攻撃する手立てを持っているかも」

「絶対に嫌」

それは嫌だ。それでは悔しい。折角タマちゃんが戻って来てくれたんだから、これ以上失望させたくない。今回位は良い所を見せたい。

「そうは言ってもね。鏡の中を攻撃するなんて」

法子は必死で考える。鏡の中を攻撃する方法を。誰にも頼らず、必死で考える。

その思考を覗き見て、タマが嬉しそうにほくそ笑んでいるが、法子は気付かない。ひたすら襲い掛かってくる偽物のピエロを切り裂きながら、思考に没頭する。

鏡の中の敵を攻撃する方法は？ 法子は今まで読んだ漫画や小説見たアニメや映画を思い出しながら、考える。大抵鏡の中に入った敵は攻撃しようとして鏡から出た時に倒される。結局鏡の外に干渉するには鏡の外に出るしかないから、相手が攻撃してくる時を狙い澄まして反撃すれば良い。

しかし目の前のピエロは違う。確かに鏡の中の本体が鏡の外に直接攻撃する事は出来ないみたいだが、鏡の外に偽物を生み出す事で攻撃を行っている。

では他に対抗策は無いだろうか。例えば鏡を割るという方法。鏡を割れば鏡の中に居る事は出来ない。鏡を割って外に出て来たところを叩く。だがその作戦は先程否定されたばかりだ。

例えば鏡の中に入るといふ方法もある。相手が鏡の中に入れたのなら、こちらだって何らかの方法で中に入れるという道理だ。鏡の中は相手の舞台で厳しい戦いになるかもしれないが、それでも相手に干渉する事が出来るだけマシだ。

「それだ！」

「え、ちよつと、法子、流石にそれは」

法子が駆け出した。偽物ピエロ達を避け、飛び越え、ピアノの上に着地して、そしてピエロの居る窓へ飛び込む。法子は窓に触れてそのままガラスを突き破った。甲高い破裂音が響く。飛び出した法子はそのままベランダを越えて、中空へと飛び出し、危うい所でベランダの手すりを掴んで、下に落ちる事だけは避けた。

手摺を力強く引いて、体を浮かせ、軽やかに手摺の上に着地する。音楽室の中の沢山のピエロが法子の事を笑っている。割れた窓の隣の窓の中に本体のピエロが居た。そいつも法子の事を笑っている。腹が立った。

ふと外の様子が気になって振り返って下の校庭を見ると、あの魔法少女とそれから昨日助けてくれた黒い騎士が校庭に集う生徒達を守る為に奮戦していた。ピエロの数は多いが、それを全く近寄せない。けれどやはりキリが無い様で、危なげは無いものの、打開出来る様子も見えない。

私が何とかしないと。改めて気合を込めた法子は、背後から飛び掛かって来たピエロの首を視線もやらずに跳ね飛ばして、くるりと回り、音楽室を見据えた。

鏡の中のピエロをどうすれば倒せるか。

思考する間にもピエロが襲い掛かってくる。二人の腹を切り、もう一人の腕を切り、ベランダの下へと落ちて行くピエロには目もくれずに考える。

最も単純な方法は純粹に魔力をぶつける事だ。窓に入るには作品世界でのエネルギーを使っている場合が多い。そしてその鏡の中に入るエネルギーを遥かに超えたエネルギーをぶつける事で、相手を

鏡の中から無理矢理追い出すと言う方法だ。

これは良いんじゃないかと、飛び掛かって来たピエロの腕を跳ね飛ばしながら、内心で得意になる。あのピエロは自分よりも魔力の量が下らしい。ならばこちらが相手の持つ魔力よりも大きな魔力をぶつければ外に追い出せるのではないだろうか。

「無理だよ」

タマの否定が入った。

「駄目？」

「ああ、無理。魔力だけで追い出すには膨大な量が必要だからね。

万全でも無理なのに、今君はあのピエロよりも遥かに消耗している」

「じゃあ、八方塞り？」

「だからさっきそう言っただろ」

「そんな」

法子がしよげ返って、思考が途絶える。簡単に落ち込む法子に苛立って、タマがしまいとしていた助言を思わずしてしまった。

「あのさ、魔力って何だか分かっているの？ 魔術って何か分かっている？」

「え？」

「学校で習わなかった？」

「習って……ない」

「あのね、魔術ってというのは概念の力を別の力に変える方法な訳で、魔力って言うのはその概念の力の事」

「概念の力？」

「だから、因果の、いや、原因と結果って言った方が分かり易いか？ もっと平易に言えば、ああすればこうなるっていう繋がりが概念。その繋がりの結びつきが概念の力」

「良く分からないんだけど」

「まあ何となくで良いよ。で、逆に言えば魔術を使えば概念を無理矢理付け加える事が出来る訳だ。例えば、そうだな、初歩的なので言うと、羽が勝手に宙に浮いたりとか」

「それは授業でやった!」

「物凄く簡単に言つと、何かに新しい機能を付けられるんだよ。例えば君がいつも使っているドライヤーから熱風じゃなくて水を流したりね」

「うん」

「勿論もつと複雑な事も出来る。例えば、飲んだら人の感情を変える水だとか、切ったら物が消える包丁だとか、絵の中の人を撃てる銃だとか」

「うんうん。で？」

「だから」

タマの言葉が止まった。これ以上言えば、ヒントどころか答えになつてしまう。今ので充分、与え過ぎな位ヒントを与えたのだ。これ以上は、少し位は自分で考えてくれなくては困る。

「いや、それだけ」

「え? どういう事」

「ああ、もう良いから! そんな事より、さつさとあの道化師を倒す方法を考えな」

法子は混乱しながらも、偽物のピエロを切り捨てながら鏡の中の本体を攻撃する方法を考える。

そして突然大きな声を上げた。

「分かった! 分かったよ、タマちゃん!」

「良く気付いた」

答えに行きついた法子をタマが褒めた。

法子が思わず口に出していたので、ピエロがそれを聞きつけて、首を傾げて尋ねてきた。

「分かったってなーに?」

「うっさい! 覚悟しなさい、あんた達!」

法子がタマを握りしめる。

「それでどうすれば良いの? 何か呪文が居る?」

「いや、今の君じゃまだ無理だよ。本当に高度な概念だから。魔術

の式はこちらで組み上げる。魔力も私が今まで蓄えてきたものを使う。君はとにかく私との間の流れを保ち続けて。どれだけ流れが乱れようと」

「分かった！」

と気合を入れて応じたが、法子には流れというのが良く分からない。何となく感じるタマとの繋がりだろうかと思うのだけれど、その繋がりはいまいち掴みよりの無い感覚で、乱れというのも保つというのも良く分からない。

まあ、なる様になるさと、法子が気楽に構えて、襲い掛かってくるピエロを切ろうとすると、

「待て。概念を付与すると魔力の消費が激しくなる。概念を付与した刀で切れば更に。だから魔術が完成するまで、いや完成してからも本体を切るまで他のは切るな」

法子が慌てて手首を無理矢理動かして切っ先を逸らし、迫って来るピエロの胸倉を掴んで後ろに放り投げた。

「そういう事は早く言ってよ！」

「悪い。じゃあ、始めるぞ」

その瞬間、法子の中に何か仄明るい違和感が灯った。何だろうと思っているとそれはどんどん大きくなって、胸を圧迫してきた。何だ何だと思っている間に、それはどんどんと広がって、胸の奥が削られる様な錯覚が起こった。削られていく。痛みは無いが、やるせない気持ちの悪さが胸から喉へせり上がってくる。削られる振動で視界が揺れる。

怖い。何だか自分が壊され、作り変えられてしまう様な怖さを感じた。だが法子はそれに耐えて必死にタマとの繋がりを確認しながら、襲い掛かるピエロを避け、蹴り飛ばし、投げ飛ばした。

頭の中で何か音が鳴っている。それは手の先から流れて来る音で、ひたすらに不快で、意識が遠のきそうな程、抑揚が強くかつ単調な長く聞いていれば発狂しそうな音だった。それにも耐える。不安があった。だが同時に信頼があった。タマが自分に変な事をする訳が



ないという信頼、タマが失敗するはずが無いという信頼。だから耐えた。耐えられた。反響する不快感が法子を苛んでいく。それに抗って、法子は必死にピエロと闘った。

そして、

「よし、出来た。法子！ 後は本体を切るだけだ」

不快感が消えた。代わりに刀へ力を吸い取られていく感覚があった。

「分かった。でも」

だがいつの間にか本体のピエロは居なくなっていた。法子達がおかしな動きをしていると気付いて既に逃げ出したのだ。

「早く追いかける」

「うん、でも」

目の前にはダミー達が犇めいている。刀を使えない今、そこに道を作るのは困難だ。かと言って、分析から導き出されるピエロの逃走経路はダミー達を越えた先で、ダミー達を迂回すれば大幅な遠回りが必要になる。刻一刻と力が減っている法子にはその時間の浪費さえ惜しい。

「私ともう一人いたらな。こいつ等ばかり増えてずるいよ」

「アホな事言つてないで」

法子とタマの意識が同時に法子の手の先に注がれた。手の先には刀がある。法子が魔法少女になってから使い続けてきた刀だ。だが反対の手にも刀が握られていた。それも全く同じ刀が。

「私ともう一本？」

タマが呆然と呟く。全く同じ刀が二本。だが法子にしてみればその二つは明確に違う。一本がタマで、もう一本はタマでない。

「まさか君の二つ目の能力？」

「分かんないよ」

「まさか友達欲しさに私を増やしたんじや」

タマが気味悪そうに言った。

「だから知らないって！ それにタマちゃんみたいに意識は宿って

ないよ。それより今は武器が増えた事を喜ぼうよ！」

「そうだね。そっちの刀には概念を付与していないから、切っても消耗は少ないだろ」

「よし！ じゃあ行くよ」

法子がベランダの手すりを蹴って音楽室に踊り込み、新しく生まれた刀を一閃する。それだけで周囲のピエロは消え去った。法子が進む。刀を振るう。ダミー達が消えていく。音楽室を飛び出すと廊下にも同じ顔をしたピエロが犇めいている。法子が刀を振るいながら右の廊下を突破していく。曲がり角を左に曲がると遠くに本体が見える。足と腹を怪我して思う様に動いていない様だ。追いつける。だがさつきよりも沢山のピエロが足の踏み場もない程犇めいていた。法子は横に跳び、壁に足を着け、壁を蹴って一気に前へと跳んだ。ダミー達の頭上を跳び越え、落ちそうになるとダミーの頭や肩を蹴って、ダミーの上を走っていく。法子が本体に追いついたのと、本体が傍の教室に逃げ込もうとするのが同時だった。

「もう逃がさない！」

法子が逃げ込もうとする道化師の背中を切る。だが傷は浅く、ピエロはそのまま教室の中に駆け込み、そして窓の中に入った。

「ひひ、残念！」

ピエロが高らかに得意げに宣言する。だが法子は駆け寄って窓ガラスに思いつきり刀を振り下ろした。窓の中に宿る存在を切るという概念を付与した刀を。窓の中のピエロは袈裟に切られ、理解出来ないといった表情で法子を見た。法子が更に切ろうと刀を構えたのと同時に、背後から追いついてきた大量のダミーが法子目掛けて襲い掛かる。

法子は舌打ちしつつ、構えた刀を戻して、反対の刀でダミー達を切り払う。ダミーは消えたが同時に刀も折れた。

「え？」

折れた刀の先を眺めて法子が呆然とした。

「壊れやすいみたいだな」

使える武器は無い。そこへダミー達が再び襲い掛かってくる。かと思うと、法子は折れた刀を床に刺して、新たな刀を生んだ。法子自身も驚く程、まるでいつもそうしてきたかの様な必然さで法子の手新しい刀が生まれていた。

「けれど簡単に作りだせる。便利な能力だな、それ」

ダミー達を切り払う。消えたダミーの向こうからまたダミーがやって来る。一体いつまで切れば良い？

「法子！ やったぞ、あいつの魔力が尽きた」

本体が窓から抜け出していた。魔力が尽きて鏡の中に居られなくなったのだ。

法子がそれを追う。ダミー達が壁を作ろうとしたので、それを切る。すると再び刀が折れた。折れた刀を床に突き刺して、再び新たな刀を。

教室の外に逃げ出そうとしている本体に先回りして、その前を塞ぐ。本体が反転して逃げようとする。ダミー達が本体を守ろうとする。立ちはだかるダミーを切る。刀が折れる。それを突き刺して新たな刀を。そして逃げる本体に先回る。

そんな事を繰り返している内に、ついにダミーが居なくなった。魔力切れでもうダミーを生む事も鏡に逃げ込む事も出来ない。

「チエックメイト」

法子が恰好を付けて言い放った。

ピエロが笑う。

「残念無念」

諦めた様に腕をだらりとしたに垂れ下げて頂垂れる。

かと思うと、飛び掛かって来た。

不意を打とうとしての事だったが、法子は薄く笑って剣を真つ直ぐにピエロの鼻先へ向けた。

タマの声が頭に響く。

「そのまま、帰りたいと願うんだ」

法子は一つ頷くと、ピエロに向かって意地悪そうに笑った。

「イツツシヨータイム」

ピエロの口調を真似て、そう皮肉気に宣言する。

すると教室の中に突き立つ折れた刀達が光りで結ばれて、巨大な魔法円を描いた。その光が爆発して、光が満ちる。そして光が消えた時には、ピエロが居なくなっていた。

もう気配は感じない。間違いなく帰した。魔物の恐怖は去ったのだ。

法子が後ろに倒れる。頭を打ち付けたが満面の笑みだ。

「勝った！」

「ああ」

「初勝利！」

「良くやった」

法子はしばらく天井を見上げて荒い息を吐き、それから息を整えてタマに尋ねた。

「見直した？」

「何度か危ないと思った場面もあったけど、そうだね、素晴らしかった。見直したよ」

「私、英雄になれた？」

「ふふ、外に行ってみんなの前に出てみなよ。きっとみんな君を英雄視してくれるだろう」

法子が危なっかしくふらつきながら、窓辺に寄った。外には沢山の生徒が居る。ピエロのダミーはもう居ない。生徒達の視線は魔法少女と黒い騎士に集まっている。どうやら生徒達は二人を褒め称えているらしい。

「ほら、校内の戦いを知らない彼等は、魔導師を倒したのがあの二人だと思っているよ。ここは君が出て行って、私が倒したってびしつと言わないと」

「やだよ。そんな浅ましい真似」

「英雄になれないよ？」

法子が微笑む。同時に魔力が尽きて、変身が解けた。

「良いの。人前に入るなんて恥ずかしいし。それにね、私はみんなに称えられる英雄じゃなくて、みんなを守る英雄になりたい。孤独でも何でも良い。誰よりも強くなって、みんなを守れるようになりたい」

「そうかい。なら何も言わないよ。君が人知れず世界を守る英雄になると言うのならそれも良いだろうさ。ただね、一つ気に食わない」

「何？」

「孤独という点さ。まさか今回勝てたのは全部自分一人の力だなんて思っていないだろうね？ 誰が君を見捨てようと、私が居るだろう。君は孤独なんかじゃないさ」

「そうだね。うん。私、一人じゃない」

法子が素直に頷いた。頭の中に満足そうなたまの思念が流れてくる。それに釣られて法子もまた満足そうに笑った。

## 支えが無ければ物は倒れる

「切った人間への見舞い？ 止めておいた方が良いと思うけれどね」  
「でも、このままじゃ後味ばつかり悪いし。ちゃんと私があの魔法少女だって事を知ってもらって謝らないと」

「変身した状態で行くのかい？ 言っとくけど、今の君の評価は子供を切ったやり過ぎヒーローだよ？ 未だにテレビでやってるじゃないか。変身ヒーローの在り方についてとかそんな題名が付いて。それで病院なんか行ってみなよ。死神が迎えに来たって騒ぎになるよ」

その言葉に法子は傷ついたという顔をして、沈み込んでしまう。

「いや、一応最後のは冗談だから笑ってほしいんだけど」

タマの言葉に法子は首を振る。

「ううん、タマちゃんの言う通りだよ。私は今、悪役だし、それで人前に出たらまずいっていうのも分かってる」

「だから、昨日みんなの前に出て高らかに宣言すべきだったんだよ。今からでも遅くないんじゃない？」

魔物を倒した後、法子は本当に何も言わずに皆の元に戻った。校内に隠れていた生徒達に混じって、さも怖くて隠れていたという風を装って。

タマには何とも歯がゆかった。どうしたって解決した事を知らしめておいた方が、法子にとって良いはずだから。

でも法子は拒む。

「私は、陰ながら人を助ける事に決めたの。人前に入るなんて性に合っていないもん」

「まあ、君がそう言うなら良いけど」

法子だって分かっている。確かにタマの言う通りで、昨日みんなの前に出て自分が倒したと言って、子供を切ったという汚名を僅かなりとも払拭すべきだったのだらう。そうしなかったのは、結局法

子の我が儘だ。違うと思つたからだ。華々しく人前に出て賞賛を浴びる偶像と身命を賭して人々を守る英雄は全く違つたもので、相容れない。何となくの漠然とした思いではあるけれど、法子はそう思つていた。そう、どちらかと言えば、助けたほんの一握りの人にだけは分かつて貰えて、残りの大部分には忌み嫌われる、そんな英雄になりたいと思つた。苦しむ人々を守る存在なのに、自分だけが幸せの絶頂を目指す事は、何となく嫌だつた。自分が苦しむからこそ、苦しい人を分かつてあげられる助けてあげられる。魔法少女になつて苦樂の感情に浮き沈んだ二週間は、法子にそんな考えを閃かせた。「変身した私が出て行つて混乱するなら、変身しないでお見舞いに行つて、傷付けちゃつたあの子にだけ正体を明かせば良いでしょ？」

「あのね、ああもう、本当に分かつているのかな？ その子にとつて君は、自分を切つた憎い奴なんだよ？」

「分かつてるよ。だから謝りに行くんでしょ？」

「だから、そんな奴が来たつて嫌なだけで、そもそも謝られたつてそんな簡単に許せる問題じゃ無いし」

「でも謝らないと始まらないから」

「切られた方にとつては嫌な気分にはかならないと思つよ。心が軽くなるのは君だけだ」

法子が何かを思う前に、タマが重ねて伝える。

「私の主の中にも居たよ。人を切つた者が。村の人を何人も切つた昔、親を死なされた恨みでね。復讐の為だから、自分は何をやつても良いんだと思つていたよ。その後、色々あつてね、情勢が変化して彼の心境も変化して、それで彼は村の人に償おうとした。殺される事も覚悟して、何でもするし、何をしてくれても構わないつて言つて、村人達に自分を委ねた。結果として、彼とその一族はみんな惨たらしく殺されて、彼の痕跡は全部消されて、その上で彼には醜い過去が付け加えられた。正しい英雄に殺される化け物になつた」

部屋の外から声が聞こえる。朝ごはんが出来たみたいだ。

法子がそれに生返事をする。心をタマの話から逸らせない。

「それでも村の人達の恨みは収まっていなみたいだった。むしろそれまで以上に恨んでいるみたいだった。死んでしまった後なのにね。この話を聞いてどう思おうと君の勝手さ。あの時の主と君では状況も心情も何もかも違うから。そのままの事が起きるなんて事は無い。それでもちよつとは感じるものが在って欲しいね」

法子は静かにベッドから立ち上がって、部屋の外に出た。

タマの話は衝撃であつたけれど、それでも自分の決めた正しいと思う行動を曲げたくはなかつた。

「それでも行くよ。タマちゃんの話は良く分かつたけど、今のままじゃ、私、英雄なんかじゃなくて、切り裂き魔だもん。助ける人と倒す敵を区別しないと。だからあの子供とそれからあの魔法少女、二人にちゃんと謝らないと私は英雄になんか絶対なれない」

「分かつてない気がするんだよね、自分自身が考えた事の意味が。

私は結構君の事を気に入っているんだ。だから下手な所で立ち止まらないですよ。この前みたいにさ」

「んふふ、ありがとう。でも大丈夫、もう魔法少女を辞めるなんて言わないよ」

法子が笑顔を浮かべて受け答える。その気安い返事が、タマには不安でならなかつた。

病院への道を法子は辛そうに歩いている。

「筋肉痛が……痛い」

それにタマが笑う。

「あれだけ大立ち回りをやって今日動いているなら、とても成長しているよ。魔力だってほとんど回復しているし」

その言葉で法子も嬉しそうに笑う。

「本当？ 成長してる？」

「ああ、してるしてる」

「そっか、良かった」

幸せそうにしながら痛みを顔に顰めている法子を感じながら、タ



マもまた嬉しくなった。そこで更に明るい話題にしようと、先程二ユースで見た話題に切り替える。

「そういえば、良かったな。君の同級生が助かって」

「え？ ああ、そうだね。そういえば、さっきニュースでやってたね」

結局、昨日の魔物の被害は重傷者が二名のみ。一人は法子の同級生で全治二週間。もう一人が生徒を守ろうとして殴り飛ばされた教師、こちらは全治三か月。勇敢な教師の行動は賞賛されると共に、二人のヒーローが助けに来なかつたら殺されていただろうと苦言も呈されていた。だから危険な事はなるべく慎む様にと。今後、近辺で更に強力な魔物が出現するだろう事と合わせて、不要な外出は避ける事、まず逃げる事を優先する事、何か会った時はプロに任せる事、と注意喚起が並べられた。

その他に、逃げる際の混乱で、転んで皆に踏みつけにされた重傷者が一名とその他軽症者が多数。

少なくとも死者が出なかつたのは幸いだ。

法子がほっと安堵の心を持ったが、タマがそれをぶち壊す。

「あの時は、助かるなんて言っただけど、本当の所どうなるか分からなかつたからなあ」

「は？」

訳が分からず、法子は手元のタマを見つめた。

「物凄く吹っ飛ばされ方をしていたし、内臓が潰れているんじゃないかと思っただし、急がないと危険だと思っただけだ。いや、あの魔女の魔術は凄かつたね」

その瞬間、法子が壁にタマをぶつけた。勢い余って、法子の腕も傷付くが気にしない。

「タマちゃん、何言ってるの？」

法子が感情を押し殺した声で尋ねる。タマが慌てて答えた。

「勘違いしないでくれよ。あの時、もし君が目の前の悲劇に拘泥すれば、あの学校どころか、町全体が滅ぶ可能性があった。冷静に考

えればどちらを選ぶかなんて分かるはずだ。けどそんな事言っただけ、あの時の君の天秤に、いや沸騰した人間の天秤に目の前で死にかけている人間の命を乗せたら、反対に何を持ってこようと、目の前の人間の命に傾くだろう？ だから、あの時は方便を使わせてもらっただよ」

法子の体が震える。それが怒りによるものなのか、悲しみによるものなのかは分からない。

「そんな事言っただけ！ それじゃあ、タマちゃんは見殺しにしようとしたって事？」

「まあ、そうなるね。でも今言っただけに勘違いはしないで欲しいな」「でもその為に嘘を吐いたんでしょ？」

「本当の事を言っただけで君は納得しなかっただろう？ まあ、嘘を言っただけで納得しなかったのは誤算だったけど」

「でも……でもタマちゃんは嘘を吐いてまで見殺しにしようとした」「じゃあ聞くがね、君はあの時あの人間を助けられたかい？ 君は

あの重体に陥った人間を安静かつ迅速に運びだし、しかるべき処置が受けられる場所まで連れて行く事が出来たかい？ あの時はあの魔女が居たから助かったが、そうで無ければ何処かの病院に運ぶ必要があっただろう。あれだけの重傷者を治癒する魔術を覚えている人間なんてそうそう居ないからね。あの容態だと早ければ三十分もしないで死んでいたかもしれない。君はあの人間を救えたかな？」

タマの怒涛の言葉に法子は俯く。

「それは出来なかったかもしれない……けど」

「かもじゃない。出来なかったんだ。冷静にならなくちゃいけない。あの時、君が出来た最善の行動は、一刻も早くあの事態を納めて、医療従事者があの場にやって来られる状況を作る事だった」

法子はまだ納得がいかない様子で俯いている。

「忠告しておこう。君はいずれ、救う対象を天秤にかける事になる。その時に中途半端な態度をとれば君の心が潰れるよ」

法子が問う。

「それは私には救いきれないって事？」

タマが答える。

「君だけじゃない、誰にも救いきれないよ。世界の不幸を全部掬い上げようなんて、無茶な話さ」

法子が自嘲する。

「私はみんなを救おうとは思ってないよ。私はそこまで人が好きじゃないし。私はただ自分の為に英雄に」

タマが遮る。

「それでも、英雄を目指せばいずれぶつかさ。救いたくても救えない、そんな大きな壁に」

「分かったよ！」

そう言って、法子は再びタマを壁にぶつけた。また勢いをつけすぎて自分の手を傷つける。

「全然納得してないじゃないか」

「タマちゃんの言う事は分かったし、もうその事では責めてない」

「じゃあ、何で」

「タマちゃんが私に嘔吐いたから」

法子の目から急に涙が溢れ始めた。

「何となくだけど分かるよ。お話でも良く在るから。誰かを救えない葛藤っていうのは。だからそれは良いよ。確かに昨日の私は中途半端で、決めきれなくて、それをタマちゃんが決めてくれたのかもしれない。むしろ感謝する事かも知れない。だから昨日の事についてはもう責めない。でもタマちゃん私に嘔吐いたでしょ。それが嫌なの。折角の友達なのに、ようやく昨日仲直りできたのに、それなのに嘔吐くなんて」

堰を切った様に泣き始めた法子にタマが狼狽える。

「それは……すまなかった。でもそんなに泣く程かい？」

「え？ あれ？」

ようやく法子は自分の涙に気が付いた様子で、袖で拭い始めた。「なんで泣いてるんだらう。そんな悲しい訳じゃないのに。違うん

だよ、これは違うの。自分でも何だか分からない」

「ああ、いや、私も悪かった。そうだな、君はまだ若いし、人を救う道程もまだ歩き始めたばかり。それなのにごちゃごちゃ言い過ぎた。老婆心が働き過ぎたよ」

「違うよ、それはもう分かったもん。納得したし」

「そうかい？」

タマが尋ねる。法子が頷く。

そして法子ははつと顔を上げた。

「分かった。多分、私、今迄友達居た事無かったから、それできつと必要以上に裏切られたと思って悲しいんだ。タマちゃんが居なかった一週間も嫌で嫌でしようがなかったし」

タマは咄嗟にそうじゃないと思った。が、よくよく考えてみれば、その通りかもしれないと思い直した。何にせよ、法子に心労を与え過ぎた。

法子と出会って二週間。タマに言わせれば、法子は敏感すぎる。何にしても大げさに捉えすぎて、それに心を浮き沈みさせてしまう。それは法子だけが特別なんじゃない。この年代の子供はそういうものなのかもしれない。

二週間、喋る刀と出会い、友達になり、変身して、魔物と闘い、同業者に負けて、人を傷つけ、魔物を倒し、人々を救った。きっとあまりにも密度が濃すぎたのだ。普段から周囲と関わりの無い法子にとっては、この二週間それこそ今までの人生に匹敵する位の波に晒されたのかもしれない。

支えてくれる人が居ればまた違うだろうとタマは思う。その相手として自分はどうだろうとタマは考え、横には並べないと否定する。法子はタマを友達と呼ぶし、タマもそれで良いと思うが、友達とは少し立場が違うとタマ自身は思っている。体が無いから困った時に手を差し伸べる事は出来ない。悩みを聞いたって結局タマは数百年前から生きている刀なのだ。十数年生きた人間とはかけ離れている。だから法子が悩んだ時に、正しいと思う助言は出来ても、悩み

に共感する事は出来ない。

せめて自分が人型だったらなあとタマは思う。自分が人型で、法子の精神に寄生するのだから、きつとなれたらう。悩みを分かち合い、手を差し伸べられる友達に。

法子の家族は支えとなる存在だろうかとタマは考え、ならないと断定する。法子にとって家族は安息の場所である。外とは完全に分かたれた聖域だ。だから、法子は外の悩みを決して持ちこもっていない。学校で孤独な生活を送っている事を法子は家族に黙っている。自分の中に溜め込んでいる。家族はどうやら分かっている様だが、法子から相談してくるまで待つつもりなのか、積極的に突っ込もうとはしない。

弟はそんな姉を助けようとしている様だが、法子はそれを拒否している。姉と弟という立場の違いや、弟の方は姉である法子と違って学校で上手くやれている事などで、むしろ劣等感を感じてしまっている。だから弟が手を差し伸べようとすればするほど、法子の悩みが深くなる。

結局立場が違うのだ。だから同じ立場の人間が法子の傍に居てくれればとタマは願う。特にこれから変身ヒーローを続けていくのであれば、更に悩みは増えるはずだ。そんな時に支え合える仲間が居れば。そう例えばあの、

「ねえ、タマちゃん」

「なんだい？」

「さつきから思考駄々漏れだから」

「……何で？前はちゃんと隠せていたのに」

「分かんないけど、いつもより何だかタマちゃんが考えている事が分かる」

これはやり辛くなりそうだ。

「何を？」

色々。

「変な事企んでるんじゃないでしょうね？」

「本当に読めているんだ。全く。成長するのは良いけど、変なところ  
で成長しないで欲しいな」

「こっちの勝手でしょ」

法子が不機嫌に受け答える。

「あのね、タマちゃん。私の傍に悩みを言える人が居ないって言っ  
たけど、タマちゃんが居るでしょ？」

「だから私は」

「タマちゃんに体が無くたって、種族が違ったって、タマちゃんは  
いつも私を支えてくれる大事な友達だもん」

「そりゃどうも」

そうじゃない。私じゃ駄目なんだ。

「だから何考えているか分かるから」

「もう、本当にやり辛くなっただな」

タマは道の先を見る。病院が見えた。

今のやり取りで、不安が薄れてしまった。けれど、これはいずれ  
解決しなくてはいけない問題だ。けれどこれは法子が解決しなけれ  
ばならない問題で。何か自分に出来れば良いけれど。

「余計なおせっかいだよ」

その前にまず心が読まれない様にしないと。

英雄は憧れ、憧れは……

「法子、病院に着いたけど、心の準備は？」

「まだ、あんまり」

法子は苦い顔をして病院の門を眺めた。

「今更？」

「だって」

タマが呆れながらふと気が付いた事を思い伝えた。

「そういえば、何も持ってないけど良いの？」

法子は理解出来なかった様で、曖昧な思念を返してくる。

「だからさ、お見舞いに行く訳でしょ？ 良いの？ 準備しなくて？」

「準備って……何？ もしかして、謝る為にタマちゃんを使って切腹するとか？」

「いや、違うよ」

「流石に出来ないよ。確かに謝りたいし、償いたいとは思うけど」

「違うって。ああ、もう良いよ、勝手に切腹してなよ」

「切腹はやだなあ、切腹は」

何だか切腹に拘泥して愚痴？とした思念を送って来る法子を無視して、タマは病院を行き交う人々を眺めた。法子と同年代の少年少女が多い。恐らく昨日の事件で怪我をした同級生を見舞いに来たのだろう。

法子は出来るだけ人波から離れて病院の玄関へ向かう。見上げる様な白い建物は何だか泰然と乾燥していて、とても中で粘液に塗れた人の生き死にが繰り返り広げられているとは思えない。

この中に法子の切った子供が居る。そう思うと、タマは何だか緊張した。一体相手がどんな反応を見せるのか。少なくとも好意的な反応ではないだろう。その反応は法子の心に傷を付けるかもしれない。あるいは実際に肉体を傷つけようとして来るかもしれない。

その時どうするか。

百年前は見捨てた。償おうとした主が村人に惨殺された時は、どうなるうと何もするなと言われていた事もあり、本当に何もしなかった。その選択が間違っていたとは思わない。主の希望であればそれを尊重すべきであるし、刀である自分が刀の尺度でもって、人間側の事情に踏み込まない方が良いとタマは思っている。けれど悔しくはあつたし、二度同じ事をしたとは思わない。

だからどうするか。法子は謝ろうとしている。けれど、切腹はしたくないと言った。負けた犬が勝者に腹を見せる様な全面的な降伏を望んでいる訳ではなさそうだ。きっと法子は良く分かっていないのだらうとタマは思う。きっとどうしていいか分からなくて、分からないなりに何かしようとした結果が、謝りに行くという行為なのだ。何か確固たる意志の下での行動ではない。

ならば助けたって良いだらう。最悪の事態だけは絶対に避ける。

法子が玄関を通り抜け、中に入る。人の数は多い。タマは目当ての子供をどう探すのだらうと疑問に思った。

「ああ、でもあそこに並んでいる病院の人間に聞いてみれば良いんだな」

入ってすぐそこに看護師が並んでいるのを見てタマはそう結論付けたが、法子は否定した。

「赤の他人の私にはきつと教えてくれないよ」

「そうなのかい？ 君が人見知りして話し掛けたくないだけじゃなく？」

「それもあるけど……でも教えてくれない」

「じゃあ、どうするんだい？」

「どうしようね」

法子は受付を過ぎて病院の奥へ進んでいく。だが目的に向かって進んでいる様にはとても見えない。辺りを見回しながらさ迷っている。

本当に何も考えていなかったのか、こいつ。呆れたが、すぐに考



えを改める。見つからないならそれに越した事は無い。法子が目的を果たすのではなく、法子が無事で居る事が大事なのだ。

「じゃあ、帰ろう。こんなに人が居たんじゃ見つかる訳が無いよ」

「うーん、そういう訳にも」

そう言つて、法子が何気なしに廊下の途中の休憩スペースを見た。そこに居た。

法子が切った少年がそこに居た。パジャマ姿の少年が点滴を脇に立てて、楽しそうに笑っていた。

法子の体中から汗が吹き出した。意識が遠のく程緊張してふらついていた。

「ごめん、タマちゃん」

「どうした？」

「やっぱり無理。帰る」

「は？」

出来れば会わずに帰って欲しいと思つていたタマでさえ、その突然の心変わりに驚いた。

タマが法子に説教をしようとしたその前に、法子が切った少年の隣で少年と談笑していた人物が法子を見つけて笑いかけてきた。

「あれ？ 法子さん！」

逃げかけていた法子の姿勢が更に一步退いた。法子に声を掛けたのは、文化祭で法子にシフトの変更を告げた同級生だった。

「法子さんも誰かのお見舞いに？」

語りかけられたが法子は答えられない。法子の思考は混乱で渦巻いてほとんど停止した様になっている。日頃の他者に対する劣等感もあるし、相手は自分の名前を呼んでくれているのに、自分は相手の名前を知らないという引け目もあった。何よりあまりの唐突な出現に法子の頭が付いていかなかった。

「誰？ 摩子お姉ちゃんの友達？」

法子が切った少年が法子の同級生へ尋ねる。

摩子という名前なのか。とりあえず相手の名前が分かった事で、

法子の思考がまとまり始めた。これは絶対に覚えておかななくちゃいけない。そう決意する。

「うん、そう!」

摩子の元気の良い肯定に、法子のまとまりかけていた思考が再び熱気を孕んで霧散した。

「ね? 法子さん」

摩子が同意を求めて来たので、法子は口を戦慄かせながら震えに似た小さな首肯をした。他人からの好意に慣れていない法子は、自分が摩子に何か仕出かしてしまって、それで摩子は何かの仕返しをしようと思しさを見せているのではないかと本気で疑っている。

疑り深い法子を余所に、摩子は隣の少年を促した。

「純君、ほら、初めてであった人にはちゃんと自己紹介しないと。お母さんに言われてたでしょ?」

「あ、そうだった。初めまして、後藤純って言います」

「あ、えっと、十八娘法子、です」

純はねごとと呟いて首を傾げた。聞きなれない苗字に戸惑ったらしい。それを横から摩子が補足した。純は感心した様に頷いた。

「摩子お姉さんもそうだけど、二人共難しい苗字だね」

それを聞いて、法子は自分のクラスに、自分以外で難しい苗字を持った者がもう一人居た事を思い出した。確か五月女という苗字の目の前の摩子の事だったらしい。名簿に載っていれば必ず目立つ珍しい苗字という関連性が、摩子に対する警戒を少し溶かしてくれた。「純さんは摩子さんの弟さんなの?」

法子は何だか浮かれているなど自分の事ながら思った。自分から目の前の相手に世間話を振るなんていう事は生まれて初めてかもしれない。

「さんは変だよ。俺、年下なんだからさ」

「さんは要らないよ。友達なんだから呼び捨てで良いよ。私も法子って呼ぶから。ね?」

二人が笑顔を浮かべた。

「おうん」

法子はまともにも舌も口も動かず、変てこな答えを返した。

さんは要らないなんていう台詞、何だか漫画みたいだ。法子は不思議な高揚を感じていた。

高揚に促された結果、まるで自分では無いかの様に口がすらすらと動いてくれる。

「じゃ、じゃあ、純、君と、ま、摩子」

意味も無く二人を呼んで、照れて、法子は頭を撫でつけた。気恥ずかしい。顔が熱い。何だか悪い事をしている様な気持ちが出た。

「そうそう。でね、私と純君は家族じゃないよ。この前病院で知り合って、それで仲良くなったの」

「丁度、看護婦から逃げてるところでさ」

「すぐ後に捕まってたね」

ふと今更ながらに自分が切った相手の容体が気になって、法子は不躰に尋ねた。

「逃げてたって、怪我は大丈夫なんで……大丈夫なの？」

純は快く答えた。

「うん、お腹に傷があるんだけど、そんなに重い怪我じゃないよ。

お母さんは無茶苦茶心配してたけど、お父さんは笑ってた」

「そうなんだ」

何と答えていいか、法子には分からなかった。目の前の少年は笑っているが、それを傷つけた当人が笑っていい訳が無い。もしかしたら内心ではとても苦しんでいるのかもしれない。その本心のところが気になった。

いまいち話慣れしていない法子は、回りくどく聞く事など考えず、直截に核心をついた。

「入院、つらい？」

「えー？ っ、ちょっと暇かなあ。ごはんもあんまり美味しくないし。でも塾行かなくても良いのは良い。最近、お母さん、病院にまで宿題持ってくるけど」

微妙なところだった。心の底から入院に嫌悪している訳ではなさそうだが、やっぱり嫌な事は嫌らしい。

「じゃあさ、やっぱり、その、純君の事を傷つけた魔法少女の事、恨んでる？」

自分で言った言葉なのに自分で傷ついて、法子の視界が揺れた。緊張で呼吸が荒れて、酸欠気味になっていた。ああ、聞いてしまった。後戻りは出来ない。そう思うと、胃に詰め物をされた様な不快感があった。

純はしばらく不思議そうに法子の事を見つめていたが、やがてまた笑った。

「全然！」

明るく言い切った純の言葉が信じられずに、法子は重ねて聞いた。「本当に？ 切られたのに？」

「うん！ だってあれ、魔物を倒す為に仕方が無い事だったじゃん」「そう、だけど」

純が悪戯を思いついた様な、秘匿と稚気を孕んだ笑いを浮かべた。「あのね、これ、お母さんには内緒にしてね。俺、変身ヒーローになりたいんだ」

「ヒーローに？」

「そう！ エリーパーって知ってる？」

法子は知っていた。少年漫画に出てくる架空のダークヒーローだ。さっぱり人気が出ずにすぐ打ち切りとなったが、法子はそれなりに好きだった。

「分かるよ。読んでたから」

「ホントに？ 俺、それになりたいんだ」

「ダークヒーローに？」

純は首を振る。さつきからずっと笑顔。よっぽどヒーローの話題を喋るのが嬉しいらしい。

「そうじゃなくて、あんな風にみんなに分かってもらえなくても、みんなにいじめられても、それでもみんなの為に闘うヒーローにな

りたいんだ。みんなにちやほやされてる普通のヒーローより、よっぽどカッコ良いじゃん？」

その思いを法子は良く理解出来た。何せ、法子が目指しているヒーロー像と全く同じだったから。

「エリーパーの事、友達はずまんないしカッコ悪いって言ってたけど、でも俺はなりたい。あんなヒーローに。変かもしれないけど」

「変じゃないよ」

「本当？」

「うん。だって私も同じ。そんなヒーローになりたいもん」

純が笑う。

「じゃあ、期待してて。俺がそんなヒーローになったら、法子お姉さんの事も守るから！」

お姉さんという言葉が何だか気恥ずかしくて、法子は赤面した。

うちの弟もこれ位素直で可愛げがあればなあと思う。

その時、突然純が顔を顰めた。どうやら傷が痛くなったらしい。

「あ、大丈夫？」

摩子が気遣わしげに俯いた純を覗き込む。純はそれに笑って答える。

「大丈夫。ちょっと痛かっただけ」

法子も心配になる。法子があんまりにも不安そうにしているので、純は元気づかせる様に言った。

「本当に大丈夫だから。傷はすぐ治るって言われたし、それにこの傷は勲章だし」

「勲章？」

「そう、怪我は男の勲章なんだよ。この傷は魔物を倒す為の傷だから、だから誇りに思ってお父さんも言ってたし」

「そう、なんだ」

それは法子には理解出来ない観念ではあったけれど、でも、法子はその少年の言葉に、安堵して、心が軽くなって、情熱が湧いて、頑張ろうと思った。頑張ってみみんなを救おうとそう思った。

「あ、純君！　こんなところに居た」

三人が声のした方を見ると、看護士が一人、誰も乗っていない車椅子を押していた。

「まだちゃんと直ってないのに出歩いて、駄目でしょ」

「あーあ、見つかつちやった」

純は残念そうに呟いて、立ち上がった。

「怪我、早く治したくないの？」

「はい、ごめんなさい」

「もう」

看護士に促されて車椅子に乗って、純は摩子と法子に手を振った。

「じゃあね、楽しかった」

そうして、何だか恥ずかしそうに口ごもってから、

「また来て話してくれると、嬉しい」

そうして看護士に押されて、去っていった。

残された法子は、急に摩子と二人つきりにされた事で気まずくなつた。なのですぐにその場を離れる事にした。

「じゃあ、あの、私もそろそろ、行くね」

そう言つて背を向けて去ろうとした時、摩子が嬉しそうに言った。

「うん、じゃあ、また学校でね」

法子は思わず振り返って、摩子の顔をまじまじと見つめた。摩子の顔に浮かんだ屈託のない感情を見て、法子の喉の奥から感慨深い何かがせり上がってきて、法子は思わず泣きそうになった。それを必死でこらえて、鼻声になった事に気付かれない様、出来るだけ小さい声で短く答えた。

「うん、また」

そう言つて、早足で別れた。

その後ろ姿を、摩子は不思議そうに眺めていたけれど、やがて「ま、いつか」と言つて立ち上がった。

「良かったじゃないか、向こうは恨んでいなくて」

病院を出て、ショッピングセンターに直通するバスに乗り込んで、人心地ついた法子に向かってタマが笑って言った。

「うん」

病院に行って良かったと法子は同意する。これで罪が償えた訳ではないけれど、それでも少年に行方を肯定された事で心がとても軽くなった。

「でも結局謝らなかったんだね」

「う」

痛い所を付いてくる。

「だって隣に摩子さんが居たし」

「まあね」

「それに何ていうか、言っちゃまずかったと思う」

「そう？ 向こうは恨んでいない様だったけど」

「そうじゃなくて、私がああの時のヒーローだって分かったら、きっとがっかりしただろうから」

「そんな事無いと思うけど」

法子の劣等感は一気に根深いなどタマは残念に思った。あの少年に肯定された事で一気に明るくなってくれないかと期待したのだけれど。

「まあ、何にせよ、病院に行って良かったね」

「うん」

「友達も出来て」

法子が仏頂面になる。

「意地悪」

「え？ 何で？」

「何でも。ねえ、ちゃんとしてたかな？ 変な事してなかった？」  
タマには法子の不安がいまいち分からない。

「変な事って？」

「何かこう、嫌われる様な事」

「してなかったと思うけど」

「本当に？」

「うん、多分」

タマが曖昧に返す。

「あー、大丈夫かなー。嫌われてないかなー」

何で悩んでいるんだろう。タマには全く理解出来ない。きっと法子が良くやる杞憂なんだろうと思って、タマは明るく言った。

「大丈夫だよ」

法子がおずおずと尋ねる。

「本当に？」

「ああ。それに過ぎた事を悩んでも仕方が無いだろう」

「そっか……そうだよな」

その途端、法子の思念がぱっと明るくなって、今の悩みは何だったのかと思える程、喜びに満ち溢れた。

「あんまり気にしないようにしましょう！」

「そうそう」

「折角タマちゃんが行きたがってたお店に行くんだしね」

「そうそう」

同意してから、タマはどういう事かと不思議に思った。何がどう

折角なんだろうか。それは良いにしても、行きたがっていた店？

「行きたがっていた店って、もしかして国内最大の魔術専門店の？」

「そう、そこ！ アトランだっけ？」

タマは一瞬思考が遠ざかり近付いては遠ざかる様な錯覚に陥った。振り子の様に揺れ動く掴めそうで掴めない思考をようやく掴み取った時、タマが法子に短い強烈な思念を伝えた。

「えー！」

「えって何？」

「いやだって、え？ 本当に？ 何で急にそんな。いや、ありがとう

いんだけど」

「何でって、分かんないけど、何となく、嬉しくて」

タマは更に追求したい気持ちもあったが、法子の思念のトーンが落ち始めた事に気が浮いて、これ以上言い重ねるのを止めた。今は



素直に喜ぶべきだ。

「うん、私も嬉しいよ」

「何だか凄く腹立つんだけど」

バスが止まり、シヨツピングセンターに着いた。

シヨツピングセンターに降り立ってタマはまず人の多さに驚いた。こんなに沢山の人間がごった返す場面を今まで見た事が無かった。

実際のところ、日曜日にしては客の入りが随分と少なかった。というも連日の魔物騒動で近辺に強力な魔物の到来が予想されていたから。それでもタマにとっては、そして法子にとってもこんなに大勢の人間の最中に紛れ込む事は初の体験だった。

「ちよつと酔ってきた」

人ごみの中を歩き始めて早速法子は気分が悪くなる。

「大丈夫かい」

だが今更戻ろうにも法子に人の波を掻き分ける力は無く、流されていく事しか出来ない。

更に歩くと人波が三つに分かれた。ようやく人との間に隙間が出来て、法子はまばらになった人波の合間を抜けて壁に寄りかかった。

「本当に人が多いね」

「大丈夫かい？」

「うん、何とか」

「しかし沢山店があるな。場所は分かるのかい？」

「うん。事前に調べておいたから。一番上の階の、って言っても二階しかないけど、その真ん中に噴水があるんだけど、その近く」

法子は壁を離れて再び歩き出した。エスカレーターに乗って二階へ上り、更に奥へ進んだ。丁度シヨツピングセンターの中央まで来ると、そこに大きな噴水があった。

「もうちよつとだよ」

「大丈夫かい？」

「う、うん。頑張る」

少しずつ足取りの重くなってきた法子だが、何とか力んで先へ進もうとした。

ふと視線の先、噴水の一角に黒い影が立ち上った。何も無い所から、突然現れた様に見えた。

何だろうと思っていると、タマの叫びが聞こえた。

「まずい！ 逃げろ！ ここを離れる！」

法子はぼんやりと影を見つめ続けた。影は段々と人型になって、何だか揺らめいている。

影の周りに居た人々がその影に気が付いて、驚いて、叫び声を上げて、逃げ始めた。それが連鎖して、辺りの人々が一斉に噴水から駆け離れる。

法子はそれでもぼんやりと影を見ていた。

「おい！ 法子！ 早く逃げろ！」

影は段々と大きくなつて、それが人位の大きくなると、顔の辺りにぼつかりと穴が開いた。

あ、ヤバいなと思つて、現実感の無いままに逃げようとした。けれど法子が逃げる前に影のぼつかりと空いた口に光が集い、それが放たれた。法子に向かって。

その光が法子の直前に迫った瞬間、法子の目の前の空間が歪み、光を抑え込む。そうして光が破裂して、辺りに炎と爆音が広がった。そこでようやく法子の頭が現実に追いついた。

「な、何？ 今の」

困惑する法子はいつの間にか魔法少女に変身していた。

「何とか間に合った。良いから、法子逃げろぞ」

「タマちゃん、あれ何？」

「魔王だよ、魔王。遂に現れたんだ」

炎の向こうに、更に大きくなって天井に付こうとする影とその周りに生み出された沢山の魔物が見えた。

## 私に何が出来るか

二体三体と魔物を切る。ぼやけた影の様な姿をした魔物達だが確かに切った手ごたえはあった。だがその何倍もの魔物が向こうから押し寄せてくる。人の形、獣の形、鳥の形、魚の形、様々な生き物の姿を混ぜ合わせた様な怒涛の如き影の波が押し寄せてくる。

学校で道化と戦った時の様な不毛さだが、まるで違う。一体一体が道化なんかよりはるかに強い。そして切っても消える事が無い。しばらくすると傷が塞がってまた襲い掛かってくる。数自体は道化の分身と比べると少ないが、手強さは段違いだった。

法子はまともに戦う事すら出来ず、ひたすら自分を追って来る魔物をひきつけながらシヨツピングモールの中を逃げ続けた。弱音を吐かず魔物を切っては逃げるを繰り返す。

タマはもう何も言わない。言っても無駄であるし、何か言えば法子の気が散ってしまうから。手助けをする事は出来ない。出来る事は祈るのみだ。せめて死なないでくれる様に。

時は戻って、魔王が顕現した直後、

「魔王？」

目の前で次第に大きくなり始めた影を見て、法子は呆然と呟いた。

「そう。あの強力な魔力は間違いなく魔王だ」

タマの言葉を受けて、法子はぎゅっと唇を噛みしめると、タマに向かって変身の呪文を唱えた。

「タマちゃん、私はあなたと契約する」

だがタマは黙っている。

「タマちゃん？」

「もう変身しているよ」

法子が自分の体を確かめると確かに魔法少女に変わっていた。

「よし！ じゃあ」

「やめる！」

タマに怒鳴られて法子の体が震える。

「ど、どうしたの？」

「戦うなんて無茶に決まっているだろ」

確かに駆け出しの自分が魔王に太刀打ちが出来る訳が無い。それは分かるのだが、法子は納得出来なかった。目の前に魔王が居るのだ。どれだけ勝ち目がなくとも英雄を目指すのなら闘わなくてはならない。そう思った。

「でも」

「あのね、君は魔法少女になって何がしたいの？」

「何って……英雄に」

「英雄っていうのは？」

「みんなを守る……」

「だったら勝ち目のない闘いに挑まないで逃げ遅れた人を助けるのが先決だろう」

それは、分かる。分かるが、逃げ遅れた人を助けている間に、あの魔王に襲われたらどうしようもない。誰かが止めなくちゃいけないのだ。

「大丈夫だよ。魔王は今、動けないから」

「動けない？」

「そう。詳しい事は省くけど、強力な存在が世界を越えた時はその反動で、まともに動けなくなるんだ。さっき君に攻撃したので恐らく限界。今はあの魔王も、それから取り巻きもまともに動けないよ」

見れば、魔王は天井を突き抜ける程、大きくなっているもの、同じ場所から一步も動いていない。取り巻き達も、何だか黒く滲んだ墨の跡みたいなのばかりで、それらは皆地面にへばり付いて動かない。

「なら今の内に倒しちゃえば」

「無理だって言っているだろ。大規模な送還魔術が君に出来るのかい？」

「それは……でも今の内に弱らせておけば」

「大して変わらないよ。今、あいつ等は自分の体や力を上手く使えていないっただけだ。あいつ等が膨大な魔力を持っている事は変わらない。だから君が攻撃したところで山を水滴で切り崩そうとする様なものだよ」

「でも、このまま何もしないで居たら、あの魔王は強くなっちゃう訳でしょ？」

「あれだけ膨大な魔力なら、完全な本調子になるには、一日そこ等じゃ無理だよ。何日もかかるはずさ。それまでに現代の魔術師達が集まるのを待とう。今はとにかく辺りに居る人を避難させる事だ」

反論できなくなって、法子は納得した。

「分かった。今はとにかく逃げ遅れた人を助ければ良いのね」

「うん。まずは少し奥へ行ってみよう」

法子は刀に手を添えて、魔王達へ向けて走り出した。

「おい！」

「大丈夫」

そうしてすれ違いざまに魔王と数体の魔物を切り裂いてそのまま魔王を尻目に走りぬける。魔王から離れきった法子は笑う。

「これなら大丈夫でしょ？」

「上に飛べ！」

タマの叫びに反応して、法子は飛んだ。一瞬前に法子が居た場所に光が着弾して爆発する。廊下に大きな穴が開いていた。

「油断するなよ」

「ごめん。まだ動けたんだ」

「みただね」

下から悲鳴が聞こえた。

「落ちた瓦礫に当たったか？ 助けに行かないと」

タマが言い終わる前に、法子は穴を抜けて下の階に下りた。散乱した瓦礫を取り巻いて人々が怯えた様子で震えていた。だが瓦礫に潰された者は居ない。

ほつと法子が安堵したのもつかの間で、辺りに居る人々が法子を見てあからさまに恐怖の表情を浮かべ、悲鳴を上げて逃げ始めた。その内の一人が倒れ、逃げ惑う人々に踏み潰される。倒れた者を誰も助けようとはしない。法子が助け起こそうと慌てて駆け寄ると、倒れた者は近寄る法子を見て恐怖の悲鳴を上げ、擦れた許しを請いながら、必死の体で後ずさりし始めた。法子がそれにシヨックを受けて立ち止まると、倒れた者はそのまま壁にまで後ずさり、手を這わせて立ち上がり、人々に踏み潰された所為で明らかに折れている腕の痛みなど感じない様子で、泣きながら走り去っていった。

「そういえば、君、汚名があつたね」

法子はあまりの苦しさに答えられない。

泣き声が聞こえた。

見ると、子供が一人倒れて泣いていた。

法子がまた駆け寄ると、子供は怯えた様子で法子を見つめ、母親を呼び始めた。これでは近寄れない。

「タマちゃん、どうすれば良い？」

「無理矢理抱えて逃がせばいいんじゃないかな」

「それは」

目の前で子供が泣いている。恐怖に染まった表情で泣き叫んでいる。

「出来ないよ」

その時、声がした。

「どうしたの？」

声のした方を見ると、かつて法子を倒した魔法少女がやって来た。

「その子、怪我したの？」

魔法少女は子供へ駆け寄って体を検めた。

「うん、大丈夫みたい」

魔法少女が子供を抱きかかえる。すると子供は安心した様に魔法少女へ体を預けた。その様子を見て、法子の心が痛む。

魔法少女は屈託のない笑顔を法子に向けて尋ねてきた。

「あなたも逃げ遅れた人を避難させよう？」

「そ、そうです」

「そっか。さつきね、黒い鎧の人と会って協力してみんな逃がそうって事になったの。あの魔王、あ、えっと、強力な魔物がこのシヨッピングモールの真ん中に居るんだけど、シヨッピングモールは東西に長く伸びているから、東と西の二手に分かれようって言われて、私は西側の人を逃がす事に決めたの」

黒い鎧。法子は一人のヒーローを思い浮かべる。きっと自分を助けてくれたあの騎士だ。

「だから、あなたも一緒に逃げ遅れた人を助けに行こう」

そう言って、魔法少女が手を差し伸べてきた。

その誘いを受けようと手を伸ばして、さつきの怯えた人々の表情を思い出して、伸ばした手を下ろした。

自分が居たらむしろ混乱してしまう。

だから、言った。

「私は、あの魔王を止める」

途端に頭の中にタマの罵詈が響いた。

「馬鹿か、法子」

だが自分に出来る事はこれしかない。もう決めたのだ。

「やめた方がよいよ」

魔法少女も止めてくる。

「魔王は動けないみたいだけど、周りにも魔物が沢山居て動き始めているから。危ないよ」

活動を開始した。そうとなれば、ますます行かなくてはならない。みんなが逃げ出す時間を誰かが稼がなければ。

「私が食い止めるから、その間にあなたはみんなを逃がして」

法子が決意を込めてそう言った。魔法少女はしばし逡巡してからやがて頷いた。

「分かった。すぐにみんなを逃がして迎えに来るから。無茶はしないで」

魔法少女が拳を突きだしてきた。法子にはその意味が分からない。「約束だよ」

魔法少女が重ねていった。そうして更に拳を法子へ近付けた。意味は分からないが、何となく拳を突き合わせた方が良い気がして、法子は相手の拳に自分の拳を当てた。

すると魔法少女は頷いて、子供を抱えて去っていった。最後に一度振り返って、

「絶対に無理しちゃ駄目だよ！」  
そう叫んで消えていった。

残された法子は気合を入れて、魔王の所へ向こうとして、

「ちよつと待て」  
タマに止められた。

「止めても無駄だよ」

法子が言った。

「みんなを逃がす役になれないのなら、今私に出来る事は魔物を食い止める事」

「大人しく引き上げる選択肢は？」

「無い」

法子の決意が固い事を感じ取って、タマは諦めた。

「分かった。でも良い？ さっきあの魔女も言っていたけど、絶対に無茶はするなよ」

「うん」

法子は天井の穴を抜けて二階に戻ると魔王の居る噴水へと向かう。強大な敵に向かう今の状況は憧れていた英雄の姿に酷似していたが、法子の心にはその事に対する高揚はまるで無かった。緊張もまた無い。心は凧いで何の感情も湧いていない。ただ駆けた。

視界の先に魔王と魔物達が居た。魔法少女の言った通り、魔物達は活発に動き始めている。何かを探す様に辺りを徘徊している。

人間を探しているのかもしれないと法子は思った。だとすればやっぱり食い止めに来て正解だ。



「違う、法子」

「何が？」

「あいつ等は君を探しているんだ」

一体が法子を見つけた。途端に噴水の周りに居た十数体の魔物達が法子を見て、そして襲い掛かって来た。

「数が多いな」

「タマがばやく。」

「うん、でも何とか」

「注意してね。目の前のだけじゃない。下の階にも何匹か。それに後ろからも迫っている」

法子が後ろを振り向くと、確かに四体、魔物が居た。下の階から唸り声が聞こえた。囲まれている。

「とりあえず囲みから逃れよう」

「法子は来た道を戻る。四体の魔物が向かってくる。」

「倒す事は考えなくて良い。とにかくあの四体の向こう側へ」

法子は刀を構えて、四体との距離を詰め、直前で横に跳んで、壁を蹴り、魔物達の斜め上を通り抜けようとした。そこへ、反応した一体の爪が襲い掛かってくる。法子はそれを切り払い、魔物の囲いを抜けた。

一度立ち止まって振り返り、襲い掛かってくる魔物達へ法子は刀を構える。

その時、タマの声が響く。

「後ろへ跳んで」

言われた通りに後ろに下がると、廊下が突き破られ、下から魔物が現れた。その魔物を刀で切りつける。

「ちゃんと魔物の気配を探りながら」

着地した法子は気を研ぎ澄ます。辺りに居る魔物の気配を感じ取れた。まだ下に何体か居る。前からも沢山の魔物が迫って来る。

速度の違いで三体が集団を抜け出して法子に迫って来た。襲い掛かってくる魔物へ向けて、機先を制す為に法子は踏み込んで一体を

真上から切り裂き、更にもう一体を下から切り上げる。後ろに跳躍して距離をとってから、刀を振って斬撃を飛ばし、三体目を切り裂く。

だがいずれも大した痛手を負わせられず、三体はすぐさま体勢を整え向かってきた。

「一回切った位じゃ駄目か」

「当たり前だよ。はつきり言って、何回切ろうと無駄」

「もっと魔力を込めれば」

「多少は動きを止められるかもしれないけど。きつとすぐに回復するよ。君が力尽きるのを早めるだけだ」

法子は考える。この場にいる魔物を倒すにはどうすれば良いだろう。そうして思い出す。あの道化戦で使った刀に概念を込めるという方法なら倒せるんじゃないだろうか。

「無理」

だが相談する前にタマが切って捨てた。

「あれを作るのにどれだけ魔力が必要だ分かってる？ あの時は私が溜めていた魔力があっただけど、今はもうほとんど無いよ。君の魔力を使っても一本作れるかどうか。維持するのにも魔力が必要で、二体か三体切ったところで終わりだね」

二体か三体。だが目の前からは十数体の魔物が迫って来ている。

全く足りない。

「どうしよう」

「良い？ 君の目的は魔物を食い止める事。魔物が君だけを狙っている今の状態は、他に危害が加わらないという意味で、願ってもない事だ。魔物が君を見失わない程度に逃げながら、この状態を維持しつつ、逃げ遅れていた人々が完全に逃げるのと救援が来るのを待つのが一番だ。だから余計な事は考えずに逃げる事に集中すれば良い」

「分かった」

また数体が抜け出してきた。法子はそれを切ってやり過ぎそうと、

真一文字に切り付けた。だが一体だけ切られても全く怯まずに襲い掛かってくる者が居た。棘がびっしりと生えた拳を突き出してくる。法子は反射的に思いつき魔力を込めて、魔物の拳を刀で跳ね飛ばし、返す刀で魔物を切り下した。

魔物は崩れ落ち。動かなくなる。倒したのだろうかと法子の心に僅かに光明が差した。

「タマちゃん、もしかしたら倒せるかも」

「無理だよ。じきに治る」

また別の魔物が二体、襲い掛かってくる。法子は魔力をありったけこめて二体を切り飛ばした。そうして、さっき倒した魔物を見てみると、タマの言った通り傷が治っていくところだった。

「まあ、どんな魔物でも概念を破壊しない限り殺す事は出来ないし、どんなに切ってもいずれば回復するけど……でもこいつ等は特に回復が速いね」

タマの呟きに法子は絶望的な気持ちになった。

「倒せないんだね」

「言っただろ」

そうして法子の逃走が始まった。

逃げに逃げに逃げ続けて、次第に法子の魔力は費え、もう限界に差し掛かっていた。

口を出すまいと決めていたタマもここに至って口を出さざるを得なくなる。

「もう限界だよ、法子」

「うん、分かってる。もうみんな逃げ切れたかな？」

「どうだろうね。君があ魔法少女と別れてから十五分、普通に歩けば外には出られているだろうけれど、この状況は普通に歩いて外に出るのは訳が違うし、微妙なところだね。混乱でも起こっていったら、多分まだ」

「まだ十五分？ 二時間位は戦ってたつもりだったのに」

「残念ながらね」

目の前に迫った魔物を避ける為に、法子は大きく上に跳んだ。

法子は天井へと着地する。すぐさま魔物が迫り攻撃を放ってくる。すんでのところで法子は天井を蹴って、下へと落ちた。天井の一部が魔物達の攻撃で吹き飛び、天井に巨大な穴が開く。ぽっかりと空いた天井を見上げて、法子は戦慄した。段々と魔物の攻撃が強くなっている。

「もう無理だよ、法子。外に逃げよう」

「外に逃げてどうするの？」

「少なくともあの魔女ともう一人黒い騎士が居るだろう？ 一人より三人の方がまともに相手できるだろう」

「でもそうしたら普通の人達は」

「それを何とか食い止めるんだよ」

だがそうは言っても魔物の中には遠距離まで届く攻撃をしてくる者も居た。少年を切った時の嫌な記憶が思い出される。守りきれるだろうか。

「三人なら、勝てる？」

「無理だね。食い止めるのもきついかもしれない」

「じゃあ、外に出たって」

「でも出るしかない。このままここに居ても仕方が無い。今、魔物は君だけを狙っている。君が居なくなれば魔物は無差別に人を襲うだろう。君が生きのびれば生きのびるだけ周囲への被害が少なくなるんだ。だったら生存確率の高い方を選ばなくちゃ」

「そうかもしれないけど」

その時、大気が鳴動した。うねる様に空間が歪む。甲高い音が世界の全てを切り裂いた。

天井がばらばらに崩れ落ちてくる。法子はそれを避けながら、何事かと辺りを見回した。

「もっ……ここまで」

頭の中でタマが呟いた。

「どうしたの？」

「魔王が起き出した。何だこれ、異常な魔力だ。尋常じゃない速度でこの世界に慣れ始めている」

「でも、さつき」

「私の見立てが甘かった。これは、まずい」

タマから絶望の思念が流れ込んでくる。事態を理解した法子は追って来る魔物から逃げながら、怯えきった思念でタマに尋ねた。

「どうすれば……良いの？」

「逃げる」

「外に？」

「違う。とにかく何処までも。奴等が追ってくる限り何処までも。」

もう周りなんか気にするな。とにかく逃げる」

ふつと空が陰って、辺りが暗くなった。見上げると、建物よりも何倍も大きくなった魔王が太陽を隠していた。

その巨大さに法子が慄いていると、更に変化が起こる。

辺りが枯れ始めた。廊下や壁が茶色や灰色に変色していく、瓦礫もまた茶色と灰色に浸食され、浸食されつくすと粒子となって溶け崩れた。爆発音が聞こえた。見ると、電化製品が次々とショートして破裂し、中から緑色の液体を流し始めていた。隣のフードコートでは散乱している食べ物紫色に変色していた。

「何これ？」

「知らん！ 良いから逃げる！」

植物は枯れ果て、それなのに奇妙にねじくれながら成長していく。ペットシヨップから奇妙な泣き声が聞こえる。見たくない。本が全てどろどろの白いスープになっている。インテリアのコーナーがお化け屋敷と見まがうほど。服が全て糸状の絡まり合った何かになっている。その合間から何かの目が覗いている。

世界が狂い始めていた。

「どうにかしないと」

「どうにも出来ない！ もう君がどうこう出来る次元は遥かに超え

ているんだ。とにかく逃げる。もうそれしか道は残されていないんだよ」

法子は嬉しく思う。タマの言葉が全て法子の為を思っているのだと思念で分かるから。相手の考えている事が分かるって言いなあと思う。

タマの気持ちがとても嬉しい。嬉しいからこそ、ここで逃げて情けないところを見せたくない。

「法子？ 何だい、その魔術」

そう思うと、何としても、新しい道を切り開きたくなった。

「君の生命を魔力に換えているのか？」

だからその為に、力が欲しいと思った。

「それにしたって変換する量が桁違いだぞ。死ぬ気か！」

法子が駆けた。魔王へ向けて。金色の髪が常よりも光り輝いている。衣装の丈が伸びて、ローブの様になっていた。

「馬鹿か？ 馬鹿か馬鹿か馬鹿か？ 死ぬぞ？ 本当に死ぬぞ？」

目の前に、沢山の魔物が迫る。法子は刀を握り、ただ一度振った、それだけで遠近大小強弱構わず魔物達は切り裂かれ、

「やめる！ やめてくれ！ どんどん君の命が削れている。ここまですでだ。取り巻き達を倒したんだから、ここで」

同時にその周囲を魔法円が囲み、光と共に全ての魔物が消えた。

「嫌だ！ 嫌だ！ 私はもう、納得のいかない形で主と分かれるのは嫌なんだ。お願いだからやめてくれ！」

走る法子の前に魔王が迫る。天を摩す様な巨体を見上げて、法子は笑う。今生きている事が堪らなく嬉しかった。そして死ぬ時に大好きな友達が傍に居てくれる事が嬉しくてしようがなかった。

「ねえ、タマちゃん。今迄ありがとう」

「止まってくれよ、お願いだから」

「ねえ、タマちゃん。タマちゃんと会えてね、初めての友達になつてくれて、とつても嬉しかった。きつとタマちゃんと会わなかったらずつと嫌な思いをして、小さくなって生きてたと思う。でもね、

タマちゃんと会えて、物語みたいな生き方が出来て、短い間だったけどとっても楽しかった」

「お願いだからそんな事言わないでくれ」

「だからね、タマちゃん。私はここで死んじゃうと思うから、次の人と仲良くしてあげて。きっと世の中には私みたいな人が沢山居ると思うから」

「やめてくれ、私は君と」

「だからね、タマちゃん。さようなら」

法子は底抜けの喜びを胸に抱きながら魔王へ向けて駆け抜けた。

## その時孤独な少女は素晴らしい英雄の夢を見た

『魔王』

魔王

魔王

魔王

魔王

魔王』

やっぱり解析は役に立たないかと舌打ちしつつ、法子は魔王を睨みつけた。巨大な魔王は四つん這いとなって法子を見下ろしている。その状態でもちよつとした高層ビル位ある。何だか怪獣の様だ。法子は試しに剣撃を飛ばしてみた。遙か遠くの魔王の脛に当たるが損傷を与えられた様子は無い。まともにやっても勝てなそうだ。

魔王の巨大な拳が迫って来た。横に跳んで逃げる。爆発が起こる。だが煙が晴れた後、拳が振り下ろされた場所を見ても破壊の跡は無い。良く分からない。分からないから危険だと思った。

魔王の周りを光球が舞い始め、それが法子へ降り注いできた。見た所、込められた魔力は少ない。当たっても痛くない位に、けれども用心してそれを避ける。避けた先に、また拳が迫ってきた。拳には恐ろしい位の魔力が込められている。食らえば死ぬ。始めから死ぬ気の法子は冷静に、剣に込めた魔力を開放して爆発させて、その爆風で後ろに飛んだ。

楽しい。楽しかった。極限の状況に身を置いている。その特異さに酔って法子は笑った。

振り下ろされた魔王の拳の皮膚が伸びて、無数の蔦になって法子へ襲い掛かって来た。やはり膨大な魔力が込められている。避けきれそうもない。そう判断して、法子は切り落として消滅させるといふ概念を刀に付与して、蔦を切り落とし消滅させた。蔦に繋がる皮膚も僅かに消滅させる事が出来たが、それだけだった。本体ごと消



すには魔力が足りなかった。

また光球が降り注いできた。更に魔王の口に光が集い、巨大な光球となった後、法子へ向けて射出された。

如何せん数が多い。避けきれずに、光球の一つが腕に当たった。だが当たっただけで痛くもかゆくもない。

何となく分かった。恐らくまだ魔王はこの世界に完全に慣れた訳ではないのだ。動きは何処かぎこちない。それに遅い。魔力を外部に放てば即座に発散してしまう。だから光球に威力が無い。

魔王の周りにまた多数の光球が生まれ始めた。数はどんどん増えて、辺りをまばゆく照らす。幾つあるのか数えきれない。少なくとも避けきれぬ数ではない。だが避ける必要が無い。法子の心は余裕を持って、更に分析を進めた。

どうやら魔王の体は人間と同じ様な構造を基準にしている様だ。足と手で体を支えている。手を使って攻撃してくる。こちらを認識するのに顔に付いた目を使っている。頭をこちらに近付けようとはしない。多分重要な器官が集まっているのだ。外見が人間に似ているのでもしかしたらと思っていたが、どうやら人間と同じ様な構造で、同じ様な場所が弱点らしい。だとすれば、首を飛ばして頭を潰せば相当の痛手を与えられる。

後はどうやって頭の部分まで上ったものか。腕が横から迫って来る。法子はそれを飛んでかわし、腕の上に着地した。丁度良いと思つて、法子は腕を伝って上っていく。

これで頭まで近付けると思つたのだが、途中で腕の皮膚が伸びて鳶状になり襲い掛かって来た。法子は慌てて跳び上がり空中に躍り出る。

どうやら体を伝って行くのは困難だ。どう近付いたものか。あまり制御の利かない空中に浮いていたくはない。

こんな風に攻撃されるから。

魔王の口から光球が射出され、法子へ向かってきた。何とかすれば避けられるかもしれないが、所詮威力の無い攻撃だ。刀で切つて

しまえば良い。

法子は刀を構え、

そして切った。地面に着地する。

こうなったらとことんやってやろうと、すつと体から力を抜いた。そして目を閉じる。集中し、イメージを喚起し、世界に共鳴させる。目を開くと、何処までも遠くまで夥しい数の刀が浮かんでいた。

浮かんでいるというよりは空中に突き刺さっている。魔王よりも更に高くまで、ショッピングモールよりも更に広大に、何処までも刀が突き刺さっている。どの刀も、刀身が半分ほどない。試しに法子が一本引き抜くと、刀身の残りの半分が現れた。まさしく空中に埋まっていた。

法子が空中に突き刺さっている刀の上に乗る。かなり固く埋まっている様で、力を込めても揺るがない。

法子が一面の刀を改めて見回した。どの刀にもそれぞれ違った概念が付与されている。今法子が持っている刀は切り落として消滅させる刀と切った物を凍らせる刀。

今のままじゃ倒せそうにないと悩んでいると、悩む暇を与えないかの様に、魔王の拳が再び迫って来た。でもやっぱり遅い。簡単に避けて、別の刀の上に着地し、更に迫る光球を避ける為に、刀の上を乗り継ぎながら空中を縦横無尽に跳び抜ける。

跳び続けながら魔王を倒す方法を考え、じゃあこうしようとかの中で呟いて、法子は自分の周囲に無数の刀を生み出した。

込められた概念はただ一つ。消滅。

纏った刀は法子の動きに合わせて付いてくる。これを魔王の頭に突き立てる。一本では消せないかもしれないけれど、複数あればきつと出来る。

さらに法子は空中の刀を選別して、消滅と生成を行った。刀の配置で送還の魔法円を作りだす。頭を吹き飛ばしたら、すぐに魔法円を発動させて帰す。そうすれば終わりだ。

法子は成功を確信して口の端を持ち上げて笑った。その体が僅か

に揺れた。

自分の体に相当ガタがきているのだと分かった。早く闘いを終わらせなければならぬ。この分だともう長く持たない。今は生み出した魔力で辛うじて命を支えている状態だ。多分変身を解けば、きつと支えが無くなって死ぬだろう。悲しくは思っただけで、それは綺麗な終わりだと何だか納得する気持ちがあった。

魔王が一際大きな雄叫びを上げた。闘いに引き戻される。見れば魔王は体を大きく伸ばして隙を晒していた。

今なら行ける。そう判断して法子は足元の刀を蹴った。刀を蹴り継いで、魔王の顔の前まで来て、引き連れた無数の剣を突き立てる為に、気合を入れて息を止めた。

その時、魔王の口に光が宿った。また効きもしない光球かと法子は呆れたが、どうやら違う。込められた魔力がいやに多い。今迄に無かった軋む様なノイズ音が発せられていた。

まずい。そう思った。だがもう避けられない。後戻りは出来ない。体がもう限界に近かった。今回を逃したら無数に生み出した刀を維持する事が出来そうにない。

だから法子はそのまま刀を突き立てる事に集中した。元より死ぬ身だ。恐れる事は何も無い。

魔王の口にどろりとした粘質の何かが集っていく。それは人の形をとって、その背に生えた翼を大きく広げた。それが何だか分からない。分からないがもう関係ない。

法子は纏っていた無数の刀を魔王の顔に向けて放った。更に自身も身を躍らせて、魔王の口元へ向けて、その一番危険に思える羽を生やした粘質の人型へ向けて、ありったけの魔力を込めた消滅の刀を突き立てた。

その瞬間、法子の体が軋んだ。見れば体が茶色と灰色に浸食されている。ああ、さっきショックモールを枯れ果てさせた魔術か。そう気づいて、自分の死を悟った。

でもまだ終わらせない。消滅の刀を更に深く突き立てる。次第に

粘質の人型は消えていく。それだけでなく魔王の頭も刀を突き立てた箇所を中心に消え始めた。

法子の意識が霞んでいく。

霞む意識を何とか繋ぎ止めて、最後に送還の魔術を発動させた。

宙に浮かんだ刀と刀の間から闇が生まれ、それが巨大になり、魔王を取り囲み、圧縮されて、魔王を消した。

魔王の居なくなった空を法子が落下する。体はもうほとんど枯れてしまっている。地面に落ちて体が崩れる。崩れた体は元に戻らず、そのまま砂のようになって風に流れて消えていく。

そして法子は完全に消えた。

魔王を倒したという功績を残し、英雄という称号を得て、法子は消えた。

時は戻って、法子が魔王へ駆け出した直後、

法子は解析しようと、魔王を睨みつけた。解析の結果が帰ってくる。

『魔王』

魔王

魔王

魔王

魔王

魔王』

全く何も分からない。けれど落胆はしない。端から期待はしていなかった。続いて法子は試しに剣撃を飛ばしてみた。遙か遠くの魔王の脛に当たるが損傷を与えられた様子は無い。まともによっても勝てなそうだ。

魔王の巨大な拳が迫って来た。横に跳んで逃げる。爆発が起こる。だが煙が晴れた後、拳が振り下ろされた場所を見ても破壊の跡は無い。何かの魔術だろうか。考えるが分からない。分からないから考えても仕方が無い。

魔王の周りを光球が舞い始め、それが法子へ降り注いできた。魔力が込められている様には見えない。牽制だろうか。用心してそれを避ける。避けた先に、また拳が迫ってきた。拳には恐ろしい位の魔力が込められている。食らえば死ぬ。始めから死ぬ気の法子は冷静に、剣に込めた魔力を開放して爆発させて、その爆風で後ろに飛んだ。

振り下ろされた拳の皮膚が伸びて、無数の蔦になつて法子へ襲い掛かって来た。やはり膨大な魔力が込められている。避けきれそうもない。法子は避ける事を止めて、刀に消滅の概念を付与して蔦を切り落とし消滅させた。蔦に繋がる皮膚も僅かに消滅させる事が出来たが、それだけだった。本体ごと消すには魔力が足りなかったか。逆に言えば、魔力を込めれば効くという事だ。

また光球が降り注いできた。更に魔王の口に光が集い、巨大な光球となつた後、法子へ向けて射出された。避けきれずに、光球の一つが腕に当たった。だが当たっただけで痛くもかゆくもない。

何となく分かった。恐らくまだ魔王はこの世界に完全に慣れた訳ではないのだ。動きは何処かぎこちない。それに遅い。魔力を外部に放てば即座に発散してしまう。だから光球に威力が無い。

魔王の周りにまた多数の光球が生まれ始めた。数はどんどん増えて、辺りをまばゆく照らす。幾つあるのか数えきれない。少なくとも避けきれぬ数ではない。だが避ける必要が無い。

更に分かった事がある。どうやら魔王は人間と同じ様な場所が弱点らしい。だとすれば、首を飛ばして頭を潰せば相当の痛手を与えられる。

後はどうやって頭の部分まで上つたものか。腕が横から迫ってくる。法子はそれを飛んでかわし、腕の上に着地した。丁度良いと思つて、法子は腕を伝つて上っていく。

これで頭まで近付けると思っていると、途中でまた皮膚が伸びて蔦状になり襲い掛かって来た。法子は慌てて跳び上がり空中に躍り出る。

どうやら体を伝って行くのは困難だ。どう近付いたものか。あまり制御の利かない空中に浮いていたくはない。狙われれば避けられない。

魔王の口から光球が射出され、法子へ向かってきた。何とかすれば避けられるかもしれないが、所詮威力の無い攻撃だ。刀で切つてしまえば良い。

法子は刀を構え、

「悪いけど、ここまでだ」

タマの言葉が頭に響いた。途端に体中から力が失われた。光り輝いていた髪はただの金髪に戻り、服装も丈の短いドレスの様な衣装に戻ってしまった。

法子が発動させていた生命を魔力に変換する魔術をタマが止めた所為だった。

どうして？ 法子の頭に疑念が湧く、まさか裏切られた？ タマちゃんは魔王の仲間？

詮索している余裕は無い。光球はすぐそばまで迫っている。さっきまでの大幅に強化された状態ならともかく、力を失った今食らえばひとたまりもない。

何とか刀に魔力を込めて、光球を切り付けた。焼け石に掛ける水よりも効果が無かった。光球が迫って来る。目の前の空間が歪んで光球を包み込んだ。だが止めきれずに突き破られ、光球が法子にぶち当たり爆発する。

吹き飛ばされた法子は瓦礫となった地面に叩きつけられ何度か跳ねて最後は瓦礫の合間に埋もれて止まった。変身が解ける。血を流す法子はぼんやりと遠くの魔王を見つめた。

「どうして？」

「君は良くやったよ、法子」

「どうして？」

「目的は果たした。だからもうお終いだ」

遠くの魔王は無数の光球を生み出している。魔王の目は法子を睨んでいる。ああ、殺されるんだなと法子は思った。

その時、魔王の体が爆発し、背中に巨大な槍が突き立ち、更に二筋の光線が魔王の体を貫いた。

唐突な展開に目を疑っていると、人の声が聞こえた。

「居た！ こつちだ！」

しばらくして法子の顔を覗き込む者がいた。髭面の青年と如何にも善良そうな中年女性。

「まだ生きてる！」

「早く運び出しましょう」

「運が良かったな、嬢ちゃん。助かるぞ」

助けが来たんだと分かった瞬間、法子の意識が途切れた。

ニュースで魔王が現れた事件を報道していた。

テレビの画面には魔王が建物を崩した瞬間の映像が流れている。ちなみに店内に備え付けられていたカメラは騒動の所為で壊れてしまっていた。更に外部に転送された監視カメラの映像も、奇怪な草叢の風景が映っているだけの壊れたデータになっていた。

ニュースキャスターが事件の詳細を伝えている。

何でも、あれだけ強大な魔物が出現したのに死者が出なかった事は歴史的な快挙らしい。

ニュースによればこうだ。法子の住む町の近隣で、強力な魔物の出現が増加していた事を鑑みて、政府は一週間ほど前から魔物討伐の資格を有する者達を辺りに常駐させていた。特に人と魔力が集まりやすい場所を重点的に監視していて、現場となるシヨツピングセンターもその一つだった。

事件発生直後すぐさま連絡が行き亘り、あらかじめ決められていた手順で、まずは人々の安全を確保、ここに嬉しい誤算があつて、登録されていないアマチュア変身ヒーロー二人が資格を有するプロよりも先に、率先して人々を逃がした為に、被害が最小限にとどま

ったという。そうして人々を逃がし切った後は、出現した魔物へ遠距離から一斉に攻撃が加えるという手はずだったのだが、ここに一つ悪い誤算があり、逃げ遅れた民間人がまだ一人居た、その所為で無差別となってしまう遠距離からの攻撃は行えず、突入して救出しつつ魔物を倒すという作戦に変更となり、その準備をしている内に魔物が巨大化、更に暴れ始め、建物が崩壊し始めた為に、危険と判断して、強行突入を決行。結果として取り残されていた一人を救出、魔物は帰された。

何にせよ、ショッピングモールが崩壊したものの、魔物による被害だけを見れば逃げ遅れていた一人と無理な突入作戦で怪我を負った魔物従事者数人のみ。全員、あまり重い怪我では無かった。これは快挙であり、如何に魔物に対する

要約すれば、法子の行動は全て無意味だったという事だ。いやそれどころか邪魔だった。法子が居なければもっと早く、そして安全に魔王を倒せたはずだったから。

テレビの画面では今回一番の活躍をした二人のアマチュア変身ヒーローがインタビューを受けていた。あの魔法少女と黒い騎士だった。事件直後の二人は疲れた様子だが、笑ってカメラに向かっていく。

二人は日本中に顔を知られ（と言っても片方は兜で顔を隠しているけれど）、憧れの対象となる。人々を救った英雄として。

一方で二人の背後に救急車へ乗せられようとしている少女が映っている。逃げ遅れた少女だが、テレビを見ている者達は、それに対してほとんど何も思わない。精々大変だったんだなあと軽い同情を送る位である。勿論、英雄視なんてするはずがない。

変身が解けていた事に少女は幸運を噛みしめるべきだろう。もし変身した状態でテレビに映り、変身ヒーローだと知られば、視聴者からは先走って迷惑をかけた馬鹿者と罵られていたであろうし、更に以前の悪行を知っている者達からはもっと強い非難を浴びせられたであろうから。



特に救急車に乗せられる際の、一瞬見せた笑顔に対して。

その時少女は英雄になる夢を見ていた。それが夢だと知らぬまま。

その笑顔を嫌悪した少女は、テレビを消して病院のベッドに潜り込んだ。

## 始まりの朝

少女は生気の抜けた顔をしてテレビを見つめていた。

しばらくして機械的な動作で指を動かし不必要に力強くテレビを消した。それから布団の中に潜り込んで出てこない。刀が必死に語りかけても一向に顔を出す気配が無い。少女の他には誰も居ない病室の中で、刀は少女を布団の中から出そうと必死に励まし続けた。

そんな病室の窓の向こう、ずっと先の空の上に一人の男が居た。

男は逆さまになって落下しながら、病室を眺めて口角を釣り上げ笑った。

「あれが親父と闘った魔女か」

男は病室の中の盛り上がったベッドを眺め続け、次第に笑いを強め、最後には声を上げて笑い出した。

「面白い！ あんな物が親父を。人間は面白いな！」

笑いながら、尚も男は落ち続け、そのまま公園の木に頭から突っ込んだ。

「暇をしそうにないな」

逆さまのまま木の枝に引かかった男は泰然と笑い続けた。朝靄のかかった人知れぬ公園の中に哄笑が高く響いた。

法子はその日の午前中を布団の中に包まって過ごした。といつても、ずっと外界と隔絶しようとする布団に引きこもって耐えていたのではない。確かについて昨日の事である魔王との戦いとその失態、更にもその失態が全国放送で流れている事は法子の心を抉って止まなかったが、それ以上に疲労が強かった。そんな訳で、全てを呪う様な気持ちで布団に隠れたにも拘わらず、早々にその温かさに負けて柔らかな眠りに落ちていた。

起きたのはお昼時になってから、食事を運んできた看護師に起こされた法子は寝起きと疲労と悲嘆で食欲が湧かず、汁物をほんの少

し噉つて、それ以上食べられずにぼんやりとしていた。

目の前のベッドは空いていて誰も居ない。隣もそうだった。四つのベッドには法子と、その斜め前の病弱そうなか細い女の子だけが居る。その女の子は既に半分ほど食べ終わって、満足そうに箸を置いた。少女が顔を上げた。法子は慌てて顔を下げ、無為に食事を眺める。法子は積極的に初対面の人と話す事が出来ない。出来ればお互い知らぬ存ぜぬで通じたかった。目など合わせたら、間違ひなく気まずい雰囲気になる。少女は法子よりも年下の様だが、年下といえどもそう簡単に法子は話す事が出来ない。

しばらくして看護師が膳を下げて来た。法子は食べていない事を注意され、それに俯いて小さな声で返答した。看護師はそれを事故によるショックの所為で元気が無いのだろうと推断して幾分の同情を残して去っていった。

入れ替わりに見舞いの客が来た。法子のではない。斜め前の少女へである。少女と同じ年位の女の子達は病室に入るなり騒ぎ始め、少女のベッドを囲んだ。少女もそれに対して嬉しそうに応じる。楽しそうに話している。

法子は羨ましいと思う。あんな友達が居るからきつと頑張れているのだろうと思う。

下世話な話好きの看護師の所為で、法子は斜め前の少女がどんな境遇に晒されているのかを知ってしまった。

突然体が動かなくなる原因不明の病で一年前から入院していて、それでも笑顔を捨てずに闘病している豪い女の子。まだ法子は入院し始めてから一日も経っていないが、確かに斜め前の女の子はとても明るく元気そうに見えた。

女の子の話聞いた時には他人の内情を吹聴する看護師への嫌悪でほとんど意識しなかったが、よくよく考えれば、そんな難病を患いながら明るくいられる彼女を凄いと思う反面、何処か嫉妬めいた感情も思い浮かんだ。

そしてその感情は女の子を囲む友人達の姿を見ている内に、更に

強まり、醜く変じた。

入院してから一年しても通ってくれる友達、そんなのが居ればそれは頑張れるだろう。そんな事を思ってふてくされて、法子は窓の外を見つめた。

ああ、どうして私にはお見舞いが来ないんだろう。そんな事を思う。まだ中学校の終業時刻からほとんど時間が経っていない。全力で走ったって、来られるはずが無い。勿論見舞いに来る人間が居たとしての話ではある。実際に来るかどうかは分からない。それでも法子の願望はあまりにも自分勝手だった。

背後から聞こえてくる喧しい会話が聞こえてくる中、法子がじつと我慢して外を見てみると、猫を従えた摩子が病院の門を抜けたのが見えた。どうやら今日も法子が切った純の見舞いに来た様だ。律儀だなあ、豪いなあ、ついでにこっちにも来てくれないかなあと、法子は思う。思ってから、何を期待しているんだと自分を恥じた。一人ぼっちの人間が何の努力もせず他人との関わりを求める事は恥ずかしい事だと法子は思っていた。だからと言って自分から行動しないのが法子の法子たる所以で、だかこそ今までずっと一人ぼっちだったのだ。

もう少し時間が進むと、遂に女の子の友人達が帰る時刻になった。面会は二十分程度。それでも一年間毎日来ているというのだから、よっぽど友達思いなのだろう。法子は背後からそんな気配を感じてまた嫉妬に駆られる反面、安堵も感じた。ようやくこの苦しみから解放される。友人達が完全に外へ出るその時まで決して油断せずに、法子は窓の外を見続けた。だから気が付かなかった。

入れ替わりに見舞い客が来た。斜め前の少女へではない。紛う事無く法子へである。見舞いに来た摩子と純は病室に入るなり笑顔になって、そっぽを向いている法子の元へと向かった。

そこは鉄錆の匂いが充満する廃工場の中だった。町工場といった趣の工場は完全に打ち捨てられて、後には処分できなかった機械と

忍び込んだ誰かが残っていたごみが散乱していた。

その入り口に女と男が立っていた。女がその鋭い容姿をスーツで固めているのに対して、男は髭剃りもしていない不摂生な全身を、地面を擦る位に長いコートで覆っていた。

男は顎の無精髭を無造作に撫でさすりながら、傍のビニール袋を踏み潰して振り返る。

「おいおい、話に聞いていた魔物なんて何処にもいないぞ？」

男と対した女は無表情のまま抑揚なく答えた。

「ええ、その様ですね」

「その様ですねって、お前」

その瞬間、男は懐から一枚の札を取り出して女に突きつけようとした。だが既に女の姿は目の前から消えていた。

男が見上げると、女は二階相当の崩れかけたキャットウォークに立って、男を見下ろしていた。

「気付かれました？」

「工場に入った時から殺気を隠し切れていなかったぞ」

「そうですか。精進致します」

「腐れ詐欺野郎め」

「野郎ではありません」

男は舌打ちして、懐から大量の札を取り出して宙に浮かべた。札は一枚一枚が等間隔に並んで男を囲む円を作った。その円が上中下に三つ。

男は笑って引き金を引く。

「出てこい、くそつたれ」

それを合図に、男の頭上の空間がひび割れ始め、そのひびの間から長い爪の生えた毛深い手が現れ始めた。膨大な力が場を蹂躪しようと威圧を放ちながら顕現しようとしている。

その時には既に女が男の背後をとっていた。男の背には見えない何か突き立って腹まで貫通していた。確かに刺した何かがあるはずなのに、それは見えず、傷口だけがはっきりと見えている。男の

頭上から現れようとしていた毛深い手はいつの間にか消えていた。女がその何かを捻ると、男の傷口が抉られ変形し、男はよろめいた。そんな男に女は更に何かを捻りながら冷ややかに言った。

「どんな魔術であろうと、発動前に術者が死ねば止まる。それだけです」

「糞が」

男は霞みそうになる意識を手繰り寄せて呪文を頭の中で詠唱し始めた。視界にはレッドアラートが瞬いている。肉体の情報を示す数値は滅茶苦茶になっていた。自分の状況を可視化した魔術で男は自分の体が死にかけている事を具体的に知った。そんなものを使わなくても、腹に開いた傷を見ればそれこそ瞭然だが。

男は尚も頭の中で呪文を詠唱しながら、余力を絞って女に尋ねた。「どうして裏切った。同じヒーローを」

「ヒーロー？ 魔物を討伐する仕事とヒーローは全く別物だと思いますよ。巷だと混同されていますけれど」

女は無表情で項垂れる男の後頭部を見つめながら続けた。

「それに裏切るも何も私とあなたが出会ったのは今日が初めて。仲間になった覚えはありません」

「ならどうして嘘を吐いて俺をここにおびき寄せた。どうして俺を殺そうとする」

呪文は完成が近づいている。幸い女は会話に気を向けてくれている。止めを刺されないのは、ほんの一縷の幸運だった。けれどその前に命が飛ぶかもしれない。

「大した理由はありません」

「ふざけるな」

「理由が欲しいのですしたら、そうですね、あなたが私と同じ物を欲しがっていたからでしょうか」

「欲しがってた？ 最近欲しがっている物なんて一軒家位だぞ」

「御冗談を。あなたも欲しがっていたのでしょうか？ あの望みを叶える」

女が喋っている間に詠唱が完了した。その瞬間、男は自分の中に残っている魔力をありったけこめて、遠く離れた別の場所へと跳んだ。

後には古びた工場と怜悯な女と生温い血液が残った。女は一度辺りを探ってから、男が近くに居ない事を確認して、ゆっくりと外へ向かった。

ドアが開かれ嫺やかな女性が現れた。柔和な笑みを浮かべながら、書類を胸に室内を一つ見渡し、そして疑問符を零す。

「あら？ ルーマ様はいらっしゃらないのですか？」

全くと言って良い程、物の無い部屋の中には、たった一人、二足歩行のキリギリスが丸椅子に坐って本を読んでいた。キリギリスは女性の声に顔を上げてから、呆れた様子で溜息を吐いた。

「王子様は当分帰ってこないと思います。この前と同じ様に、選挙活動だと叫んで飛び出していきましたから」

「何処へ？」

「詳しくは分かりませんが、国王があちらの世界に行って帰って来た事に、最近とても執心していましたし、大方あちらの世界に行つたのではないですか？」

キリギリスは冗談めかしてそう言うてからまた本へと視線を落とす。一方で女性は重苦しく頷いた。

「分かりました」

「あ、サンフ様まで行かないで下さいよ。今は選挙の大事な時期なんですから。もう本当にサンフ様だけが頼りなんですよ」

そう言うてキリギリスがもう一度ドアを見ると、女性は既に消えていた。床には書類が散らばっていた。

何の変哲も無い市営体育館の体育場に沢山の人が列を作って勢揃いしていた。最前の壇上には一人の男がマイクの前に立って、列を作る人々を満足そうに眺めまわしている。何かスポーツ大会の開会

式を思わせる様子だが、それにしても人が多すぎた。老若男女混合でざっと見て千人、スポーツ大会としてみれば異常とは言えないかもしれないが、少なくとも今居る体育館と比べれば人が多すぎる。

「お久しぶりです、皆さん」

壇上の男が人々に向けて挨拶をした。だが誰も答えない。マイクがハウリングして酷い音を立てる。だが誰も身動きすらしない。男はそれを眺めてまた満足そうな顔をした。

「本日集まっていたいたのは他でもありません。遂に我らが敬う神の卵を発見いたしました」

そう言つと、男は口角を釣り上げて目を細め、わざとらしい笑みを作った。すると列を作る人々も同じ笑顔を作つて答えた。会場が全く同じ作られた笑顔で満たされる。

「指示はいつもの通りに、それでは行きましょう、皆さん。神の国へ」

男は両手を上げると、人々は笑顔のまま列を乱さず、背後の扉を出て、赤く凝固したロビーを抜けて、晴れ渡つた外へ出た。人々が居なくなつた体育場で、男は両手を上げたままずっと動かなかつた。



## 状況は淡く動く

何だろうこれ。

空前絶後において在り得ないと推断していた異常な光景に法子は当惑して押し黙っていた。

法子の目の前にあるう事が同級生のお見舞いがやって来ていた。

「林檎食べる？ 食べても平気？ 怪我は重くないの？」

法子の前に切り分けられて皿に乗った林檎が差し出された。兎の形だ。

差し出された林檎を見つめながら、法子は食べても良いものか迷う。あっさりと手に取って食べては何だか卑しい気がした。誰も手を付けていないのに、自分だけが勝手に食べるのは止めた方が良いかと言って、相手に示してもらった好意を受けずに無視するというのもまた傲慢だ。生意気だと思われるかもしれない。

法子が悩んでいると、摩子は小皿を少しひっこめながら、不安げに眉を寄せた。

「やっぱり怪我重いの？」

「そ、うでは、ない」

法子は緊張で身を固くして何とかそう答えた。そうして震える手を皿に伸ばし、林檎に刺さった楊枝を掴まんで手に取った。

ちよつと顔を上げれば、摩子が心配そうに法子を見つめている。

法子は思わず目を逸らして林檎を齧った。林檎の味がした。自分が何か突拍子もない事をして摩子に呆れられそうで怖かった。

それでも何か言わなくてはならない。

「怪我は重くない」

必死の思いでそう言った。するとまた摩子の質問が浴びせられた。

「ホントに？ いつ位に退院出来そうなの？」

答えなくちゃと焦りながら法子は簡潔に答える。

「分からないけど、検査が終わったらすぐに」

段々と口の滑りが良くなっていく。

「検査って何の？ 何か悪い所があるの？」

「無いと思うけど、一応念の為につて。何かがあるか分からないから」  
「そっか。そうだよな。大変だったもんね」

摩子は安堵した様で、息を吐いて笑顔を浮かべた。その時、摩子の隣に居た純が些か沈んだ様子で法子に詫びた。

「ごめんね、法子お姉さん」

何の事を言っているのか、法子には分からない。ただとても重大そうな顔をしているので、こっちが何かしてしまったのではないかと法子は不安になった。

「俺、ヒーローになって守るって言ったのに、守れなかった」

何だと法子はほっとして、それから申し訳ない気持ちになった。守ろうとして守れなかったのは法子も同じだ。それどころか、実際に守る手段を持っていたのに、法子は人々を守れなかった。いや、守らなかった。闘う事しかなかった。結局全て、他のヒーローに丸投げして、自分は無様に負けて。そうして今、のうのと生きている。それが申し訳なかった。だというのに今、かつて切り裂いた少年に謝らせてしまっている。それが申し訳なかった。

「えっと、その」

けど本当の事を言う事は出来ず、かと言って曖昧に謝るのもおかししいし、励ますのもおこがましくて、法子は何も言えずに口ごもった。

純が真っ直ぐな瞳で法子を見据えた。法子は目を合わせられず俯く。

「俺、もっと頑張つて、早くヒーローになるから。それでみんなを守るから」

そう言った。真っ直ぐな瞳で。でも法子は目を合わせられない。

「もう少ししたら退院するし、そしたら俺、魔術の勉強するんだ」

「え？ 退院？」

純が大怪我をしてからまだ一週間。法子は血に沈んでいた純の姿

を思いだして、早く治り過ぎじゃないかと訝った。

「うん。何だか治るのが凄く早いつて医者も驚いてた」

実の所、夜中こっそりと純の病室に忍び込んで怪我の治癒を行っていた者が居るのだが、それは治療を行った当人以外誰も知らない。

「だから早くヒーローになって、昨日のテレビに出てた二人のヒーローみたいな、俺もなるんだ」

テレビに出ていた二人のヒーローとはあの魔法少女と騎士の事だ。法子は、その一躍有名になった二人を思い浮かべて、その後に分身の滑稽な様も思い出して、憂鬱な気分になった。世界中から嫌われても人々を守る英雄になろうと思った。けれど現実には嫌われている所為で人を助ける事が出来なかった。自分は間違っていたのだろうか。

尚も二人のヒーローを称賛する純の横から、摩子が恥ずかしそうに口を出した。

「あのね、実はみんなを助けたのは二人だけじゃないんだよ」

「どういう事？」

「あのテレビに映ってた二人以外にもう一人、みんなを助けたヒーローが居たの」

まさかと、法子は顔を上げた。

純が首を傾げる。

「でもテレビでそんな事言ってたけど」

「でも居たんだよ。危険を冒して、魔王と闘いに行ったヒーローが何でそれを知っているの？ と法子は震える。何だか分からない衝動が身の内から込み上げてきた。

「みんな逃げる事ばかり考えてたのに、その人だけはたった一人で皆を逃がす為に魔王に挑んだの」

「でもテレビじゃ何にも言ってたのになあ」

「人が集まる前に何処かに行っちゃったみたい。きつと凄く慎み深い人なんだよ」

「へえ。人知れぬヒーローかあ、カッコ良い」

二人が変身した法子の話をしている間、法子当人はずっと黙っていた。黙って顔を赤らめて胸を破りそうな程の動悸に苛まれながら、笑いたくなる喜びと必死に闘い続けた。ここで微笑めば正体がばれしてしまう。二人が褒めるヒーローが実は惨めに病院へ運ばれた自分なのだとばれてしまう。そう考えて法子はじつと耐えていた。

恥ずかしそうに顔を赤らめて俯いている法子を見て、摩子はそつとほくそ笑む。

それから一時間ほどして、摩子と純は病室を去った。

「それじゃあね。また学校で！」

「またね、法子お姉ちゃん！」

この一時間、法子は口数少なく、相手の話題に応答するだけで、自分からは一切話題を振らなかつた。他者から見れば打ち解けていないのかと誤解されそうな態度であつたが、法子自身は二人の会話に必死で付いていこうとしていたのだ。ただ法子は今までまともに他人と話した事が少なかつたので、会話に付いていく事が困難だつただけだ。法子の心境は大分和らいでいて、二人にかなり気を許していた。法子としては珍しい事に、去っていく二人に対して手を振つて応じる余裕すら出来ていた。

二人が見えなくなつた後、法子は感慨深げに溜息を吐いてから、頭の中でタマに向かつて呟いた。

「疲れた」

「お疲れ。良かったじゃないか、友達が出来て」

面白がるようなタマの笑いを無視して法子は尚も言った。

「私、死ぬのかな」

「何だい、突然」

「だって」

途端に法子の心が溢れ出る。

「だっておかしいよ。私にお見舞いが来るなんて。家族ならまだしも学校の人だよ？ 今迄誰かが話しかけてくれる事だつてほとんど

無かったのに。もしかして新手のいじめなのかな？　もしかして私  
が喜んでるのを、私が焦つてどもってるのを、何処か物陰でみんな  
が見てて、騙されて馬鹿な奴つて笑われてるのかな。そうじゃなく  
ちやおかしいよ。もしあれが本当なら。もし本当にお見舞いに来て  
くれてたなら、そんな天変地異が起こつたなら、私、もしかしたら  
明日死んじやうのかもしれない」

「馬鹿？」

タマがにべも無い返答をする。法子はそれを無視して、外を見つ  
めた。今度は心の底のわだかまりを吐き出す様な溜息をした。

「本当に疲れた」

「こんな事じゃ先が思いやられるなあ」

「これ以上学校の人がお見舞いに来たら　私、死ぬ」

「この上なく情けないけど、君にとっては良い死に方なんじゃない  
？」

タマが呆れてそう言った。

その時病室の扉が開いた。

法子が恐る恐る目を向けると、そこに果物の入ったバスケットを  
持った将刀が立っていた。

日が落ちて辺りは暗くなっていた。法子の居る病院から大分離れ  
た路地を二人の二十の半ば頃の男女が歩いていた。女は苛々とした  
様子で真つ直ぐ前を見て歩いていた。男は飄々とした様子で手に持  
った紙に目を落としていた。

男が紙から目を上げて前方の電灯に照らされた薄暗い路地を見つ  
めた。

「どうだ？　願いを叶えそうな何か、あつたか？」

「ある訳無いでしょ。そもそもどんなものだかも分からないんだか  
ら、あつたとしても分からないわよ」

「ホントに何なんだろうな。願いを叶えるものって。物質なんだよ  
な？」

「さあ。はつきりとは分からないけど」

女が鋭い視線を男に突き刺す。

「願いを叶える何かがこの町にあるっていう文面なんだから、物質なんじゃない？」

「そうかあ。そうだよな」

男が呆けた様子で女と視線を合わせた。女の目が更に鋭くなる。

「何よ」

「いや。で、お前は どう思ってるんだ。今回の件」

「どうって……怪しいと思ってるわよ」

「だよな」

男がまた紙に視線を落とす。そこには男女の居る近辺の大雑把な住所と『願いを叶える何かがある。危険。調査を願う』とだけ書かれていた。冗談の様な文面だ。

「大体このメールを送って来た奴は何がしたいんだ？ そんな大層なものがあるなら、自分で手に入れて自分で使えば良いじゃねえか」

「そうね。でも理由はいくつか考えられる」

男が試す様な笑いを浮かべて女を見た。

「例えば？」

「一つ目はその何かで願いを叶えるには、強力な魔力を持った人間が複数人必要な場合」

「成程。だからその強力な魔力を持った人間と多くの繋がりを持つ魔検にメールが来た訳だ」

「私の友達が所属している魔術結社にもメールが行ってるみたい。メールの送信者とはかく人を集めたがってる」

「ふん。で、二つ目は？」

「願いを叶える何かがあるっていうのが、嘘の場合。嘘を吐いてどうしたいのかは、メールからは分からないけど」

男が紙の文面に目を走らせてから、また女に目をやる。

「まあ、願いを叶える何かがあるってだけじゃな。絞り込めねえな。パツと思いつくのだと、テロとかか？ ここに人が集まって騒ぎが

起こってる間に、警備が手薄になった別の場所をつてな具合に」

「どうかな。それなら願いを叶える何かなんていう荒唐無稽な理由を付けないで、もっと現実的で警察なんかも信用する様な危機感を煽ると思うけど」

「問題はそこだ」

男が女の顔へ向けて人差し指を突きだした。女がそれを払い落とす。

「指差さないで。問題っていつのは？」

「明らかに冗談なんだよ。これ」

男が紙をひらひらと振る。

女が頷いた。

「そうね。でも」

「実際に俺とお前が派遣された。つまり魔検のお偉いさんは一分でも可能性があると思ってる。そう思う何かを掴んでいる」

「そうね」

「けど、俺もお前もそれを知らされていない」

「キナ臭い」

「そうだ」

男と女は角に行き着き右に曲がった。

「まあ、詮索しても仕方がねえけどよ」

「今の情報じゃこれ以上分かる訳無いしね」

「そう言う事だ」

角を曲がり切った男は女に尋ねた。

「で、他に気になる事は？」

「願いを叶えるってのが分かり易いのよね」

「どういう意味だよ。俺は分かり易い方が好きだね」

「何ていうか、狙ってくださいつて言ってるみたい」

「つまり？」

「つまりその賞品を手に入れる為に争い合えって読めるのよ」

「同士討ちしろって事か？」

男がにやりと笑った。

女はそれを無視して辺りを見回した。

「そう。こんな風に」

物陰も何も無いはずの路地から湧き出た様に突然人影が滲み出始めた。黒い忍び装束を着ていてその姿は輪郭が映るだけ、細部ははつきりと窺えない。ただ人だとしか分からない。男と女は背中を合わせて敵に備える。

「そついや知ってるか？」

「何よ、この状況で」

「黒より柿色の方が闇に隠れるらしいぞ」

「はあ？」

「つまりあいつ等は素人つて事だ」

「あつそう。その寝言にどんな意味があるの？」

「手加減しろつて事だよ」

男が両の袖から細長い針の様な短剣を取り出した。それと同じくして、女が懐から静肅を促す際に使う木槌を取り出した。

「とりあえず殺さなければ良いでしょ。動かない様に痛めつければ、幸い近くに大きな病院もあるみたいだし。『それではこれより開廷致します』」

女が左足を上げて右足だけで立つ。

その動きを合図に影達が男女へ襲い掛かった。

「それよりあんたこそ大丈夫でしょうね？ あんたのは加減が利かないんだから」

「相手が素人だつて分かったら一気にやる気なくなつた。お前一人でやつといてくれよ」

影が男女に近接し拳を突きだす。影達は皆、無手だった。男女はそれを避け、男が蹴り飛ばした。蹴り飛ばされた影は後ろの陰達に当たって、全員倒れ伏し呻き始める。

女が呆れた様子でそれを眺めていると、男が欠伸をした。

「弱すぎ。めんどくせえ。さつさと終わらせるか」



男が双剣を水平に掲げ、真っ直ぐ影達へ突き付けた。実際に何かした訳ではないが、その一連の動きが常人であれば動けなくなる様な怖気を与える。だが、影達はまるで感じた様子も無く、男へ向かってきた。

男が笑う。

「その度胸だけは買ってやる。良いか、素人忍者共、『この世が如何に残酷か。その身を以って教えてやる』」

男はその言葉を終えるや否や、疾風のように影達へ突っ込んだ。

十分後、倒れて呻く影達の間立って、男女は顔を見合わせた。

「誰も殺さなかったか？」

「そっちはどうなのよ」

二人は辺りを見回して確認を図る。全員息も意識もありそうだ。

「それじゃあ情報を聞き出すか」

「連れ去る？」

「必要ねえよ。ちょっと痛めつけければ吐くだろ。人払いよろしく」

男が女に向けて笑いかけた時、路地中に幾重もの鋭い絶叫が走った。影達が弓形にしながら叫んでいた。

男女が敵の攻撃かと辺りを見回し構える。だが一向に襲ってくる気配も、攻撃が飛んでくる気配も無く、しばらく絶叫だけが鳴り響いた。そして最後には泡立つ様な音と共に全員の絶叫が途切れた。

全身を黒い布で覆う影達は一見、何の異常も見られないが、男女は辺りに強い血の匂いが漂い始めた事に気が付いた。経験から悟る。全員死んだのだと。

男は苛立って地面を蹴り飛ばし、舌打ちをした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3687x/>

---

孤独な魔法少女は英雄になれるか？

2012年1月14日23時54分発行